
仮面ライダーフォーゼ 青春のIS？

D R T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーフォーゼ 青春のIS？

【Nコード】

N4968X

【作者名】

DRT

【あらすじ】

織斑 一夏は誘拐された所を仮面ライダースーパー1こと沖一也に助けられる。
それが切っ掛けで宇宙に行くこと、仮面ライダーになることを目指すようになった。
それから年月が経ち、高校受験を前日に控えた一夏はある女性とぶつかってしまい
それが一夏に運命のスイッチを握らせる。

その手に宇宙をつかめ！

第1話『青春・スタート!』

その日は織斑おりむら 一夏いちかにとって運命的な日となった。

幼い頃に両親はいなくなり、同じく幼かった姉と2人暮らし。

その姉や幼馴染みの家族などの周りの人に支えられながら暮らしていき

幼馴染みとの出会いと別れを何度か経験するという、ある意味濃密な日々を過ごしていた。

しかし、その日は今までの中で一夏に一番の影響を与えたと言ってもいいだろう。

その日、一夏は誘拐されてしまう。なぜ、自分が誘拐されたのかはわからない。

でも、誘拐犯達の話から姉が関係しているのはわかった。

この頃、姉はISの操縦者として、第2回モンド・グロツソ出場していた。

インフィニット・ストラトス
IS 本来は宇宙開発の作業用マルチフォーム・スーツ。

しかし、ある事件を切っ掛けにISは本来の目的を外れ、軍事目的の開発が進むこととなる。

そして、モンド・グロツソは各国が開発したISを競わせる。

いわゆる武術競技であり、一夏の姉である千冬ちふゆは日本代表として出場していた。

それはともかくとして、この時の一夏は誘拐による恐怖で怯えていた。

なぜ、姉の名前が出てくるのか、それすらもわからなくなるくらいに。

自分はこのままどうなってしまうのか？ 押し込められたワンボックスカーの中で不安に襲われた時だった。

ワンボックスカーが急停車したかと思うと途端に騒がしくなる。

それどころか、外でなにやら争っているらしい音まで聞こえてくる。

爆発音まで聞こえた時には怯えていた一夏でも何事かと思ったほどだ。

しかし、それも聞こえなくなったことで再び不安が強くなった所でワンボツクスカーのドアが開かれる。

その先にいたのは奇妙な姿をした人だった。

なにしろ、銀色の体に蜂を思わせる目をしたマスクを被っていたからだ。

「大丈夫かい？」

しばし、呆然と見ていた一夏だったが、その人に声を掛けられたことで正気に戻る。

それでその姿がスーツのような物だと気付くと同時にあることにも気付いた。

「もしかして、一也さん？」

つい最近知り合った男性の声に似ていたことに。

沖 おき 一也 かずや。数週間前に一夏が住む町にやってきた男性である。

食堂をやっている友達の家で偶然出会い、話をしたことで時折話すようになった。

ちなみに仕事でこの町に来たらしいという話は聞いている。

かといって、なぜこのような格好をしているのかはわからなかったのだが。

「む、あれは すまない、詳しい話は後です。ただ、俺のことは秘密にして欲しい」

「え、なんで」

「色々ある。今はそうとしか言えない。では、後で会おう」

何かに気付いてどこかに顔を向ける一也はそう言い残すと、状況がつかめない一夏を残してバイクで走り去ってしまう。

いきなりのことに呆然とする一夏だったが、その後すぐに姉である千冬が文字通り飛んできた。

一夏が誘拐されたことを知り、モンド・グロツソの最中であるにも関わらず駆け付けたのだ。

そして、一夏が無事なことに喜んだ千冬はISを装着したままで思わず抱きしめてしまうのだった。

しばらくして、何があったのか千冬に聞かれた一夏はこれまでのことを話した。

一也のことは見知らぬ人と言うことにしておいて

それからしばらくして、一也と再会した一夏は話を聞くことになったのだが、その話が凄かった。

秘密にしなければならぬこともあって全てを話してもらえたわけではないのだが、一也はある組織に属しているということ。

この町に来たのは犯罪組織と思われる者達が動いているという情報を得たので、その目的等を調べるために一也が来たという。

また、あの姿は凶悪犯などと戦うための姿であり

「仮面、ライダー？」

「ああ、その中で俺はスーパー1と呼ばれている」

あの姿が仮面ライダーと呼ばれていることを聞いた一夏は目を輝かせた。

仮面ライダー　人知れず何かと戦う存在がいて、そう呼ばれているという都市伝説があるのは一夏も知っていた。

しかし、実際にいるとは思っていなかったのが本音だ。

けど、実在した。そして、その人が目の前にいる。そのことに一夏は感動すら覚えてしまう。

その後も一夏はあれこれと一也に話を聞き、元々は宇宙開発に関わっていたことなどを聞くのだった。

それからしばらくした後、一也は一夏に別れを告げて町を去っていった。

一夏を誘拐した者達がやはり犯罪組織の一員であり、その犯罪組織に対処する為に行かなければならないということ。

その一也を見送った一夏はその時に2つの目標を目指すようになった。

1つは宇宙に行くこと。一也の話を聞いて、強い興味を持ってしま

ったからだ。

もう1つは一也のように仮面ライダーになって、あの時の自分のように誰かを助けられるようになること。

その2つの目標を目指すために一夏は精進するようになったのだ。た。

それから更に時は経ち 一夏は1人町を歩きながら高校受験のことを考えていた。

なにしろ、明日が受験日なのだ。そのせいであれこれと考えてしまうのである。

その一方で悩みもあった。最初の方こそ有名進学校を受験しようと思っていた。だが、その学校は学費が高かった。

目が飛び出る程では無いのだが、今の学費と生活費を姉に頼っている状態ではとても言いづらい。

アルバイトをしながらも考えたが、その学校のカリキュラムを見してみるとそれも難しい。

悩んだ結果、私立でありながら学費が安く、就職率が高い藍越^{あいえつ}学園を受験することにした。

しかし、一夏にとっては苦渋の決断でもあった。何しろ2つの目標のことを考えると、道が遠のいたように思えたからだ。

でも、諦めたわけでもない。道が遠のいたかもしれないが、なれないと決まったわけでも無い。

だからがんばろうと改めて決意し、家路につこうとしたのだ。た。これから待つ、自分の運命のスイッチに気付くことも無く

その頃、1人の女性がアタッシュケースを抱きしめながら人気の無い公園を走っていた。

女性の名は星野^{ほしの} 衛理華^{えりか}。肩まで伸びる黒髪に黒縁メガネを掛けた

凛々しく整った顔立ち。

平均的な身長にスレンダーな体を女性用スーツで包んでいる。そんな彼女は慌てた様子で走り続けていた。

時折後ろを振り返る所を見る。その先には異様な光景があった。

赤く重厚そうな鎧を着込んだような姿の者が衛理華を追いかけていたのだ。

何者かはわからない。しかし、衛理華は間違い無くこの異様な人物
怪人に襲われた為に逃げ回っていたのである。

そんな衛理華を怪人はどこまでも追いかけていた。胸や腰、膝にオリオン座の様に並ぶ青いレンズのような物を輝かせながら

「本当になんなのよ、あれ」

怯えた様子で衛理華は逃げ続けた。少なくとも怪人に追われるような覚えは無い。

なのに、怪人はまるで目の敵のように追いかけて続ける。それだけでも厄介なのに

「がああああああああ!?!」

「嘘でしょ!?!」

ベンチが怪人の腕の一振りですべて砕け散ったことに衛理華は驚愕した。

そう、怪人の力が異常すぎる。ベンチに使われている金属部品もひしゃげ、ちぎれているのを見れば嫌でもわかってしまうのだ。

もし、捕まったらどうなるか……そんな考えたくもない未来を思い浮かべてしまい、それから逃れようと衛理華は必死になって逃げた。運悪く公園には人気が無いが、それでも助けを呼べないわけでもない。

その為に衛理華は慌てながらも携帯を取り出し、操作して警察に連絡しようとした。

「きゃ!?!」「うわ!?!」

しかし、その時に誰かにぶつかってしまい、アタッシュケースを落としながら倒れてしまう。

「あ、すいません。大丈夫ですか？」

そんな衛理華に謝る青年　こと一夏。

彼がなぜここにいるかといえば、気分転換に公園を歩いていたのだ。その一夏は謝りながら衛理華が落としたアタツシユケースを拾おうとして

「なんだ、これ？」

それを見た。アタツシユケースの中にあるのは奇妙な形をした何か。

一見すると何かの装置に見えた。黒いパネルを中心に4つの様々な形のスイッチがある。

そのスイッチの前にはこれまた4つの赤いスイッチがあり、更に装置の右端にはレバーがあった。

なんだろうと思いつつも拾おうとして

「あつつ、て、まずい!？」

「え?　つて、なんだありや!？」

立ち上がるうとする衛理華の声を聞いて、一夏は思わず顔を向けた。

その先にいたのは衛理華を追いかけていた怪人が睨むかのように立っている。

その怪人を見て、一夏は思わず装置を抱きしめながら驚いてしまう。

「私にもわかんないけど、明らかにやばそうだから逃げない!」

「え、逃げる?　え?　え?」

衛理華の言葉に一夏は戸惑う。

いきなり怪人が現れたかと思うと衛理華が逃げようと言い出す。

突然すぎる展開に理解が追いつかないのだ。その間に怪人が近付こうとしていた、その時だった。

「なんだ?」 「え?」

何かがつなるような音が聞こえ、一夏と衛理華は思わず顔を向けた。

その先にあったのは一夏が抱きかかえる装置。その装置が高鳴るか

のようにならざる音を出していたのだ。

「コズミックエナジーが活性化した!? 嘘!? 今まで何をしてもダメだったのに!?!」

「え?」

驚く衛理華に一夏は不安そうな顔をする。

もしかして、自分は何かとんでもないことをしてしまったのではと思っただのだ。

しかし、一方で衛理華は驚きながらも内心は興奮が抑えられない。

一夏が抱きかかえる装置。それはある理由から今まで動かなかつた。衛理華は動かそうと試行錯誤したが、それでも装置が動くことは無かつた。

そのことにくじけそうになりながらも衛理華は諦めずに続け、大事に装置を持ち歩いてきたのだが
理由はわからないとはいえ装置が動いた。その事実に興奮してしまつたのである。

「ごめん!」

「え? な、なんだあ!?!」

しかし、今は喜んでもらえない。ゆっくりとではあるが、怪人が近付いてきてるのだ。

不安もあるが、今はこれに賭けるしかない。そう思いながら衛理華は装置をひつたくると一夏の腹部に押しつけてしまう。

一夏がそのことに戸惑つてると装置から何かが伸び いつの間にかベルトになつて一夏に装着されていた。

「え? なんですか、これ!?!」

「詳しいことは後で話すから!」

そのことに驚く一夏だが、衛理華はそれだけ答えると赤いスイッチを全て下ろしてしまう。

それと共に黒いパネルになにやら人の形をした映像が浮かび上がった。

「て、どこ行くんですか!?!」

「話は後！ カウントダウンが終わったならレバーを入れて！」

「は？ カウントダウン？」

《スリー》 「うお！？」

その後、慌てる一夏からいきなり離れて木の陰に隠れる衛理華が叫ぶ形で答えた。

まったく訳がわからず戸惑う一夏だが、電子音で響く本当に始まったカウントダウンに驚いてしまう。

《ツー》

「な、なんだかわからないけど」

《ワン》

「ええい！」

それでも続くカウントダウンに戸惑いながらも、一夏は言われたとおりにレバーを動かした。

すると軽快な音楽と共にリング状の装置みたい物が現れたかと思うと一夏の頭上で回転し、彼を光で包んでしまう。

「ぐお！？」

それと共に何かが噴射され、それが凄まじい風圧となって辺りを吹き飛ばそうとする。

そのことに怪人は思わず顔を背けてしまうが、衛理華はそれに耐えながらしっかりと見つめていた。

そう、見守らねばならなかった。自分とあの人の想いが詰まったあれの行く末を

やがて、風圧と光が収まりリング状の装置が消えると、そこには一夏はいなかった。

その代わりにいたのは奇妙な姿をした者

白い宇宙服にも見えそうなスーツを纏い、両手足に白く別々にマークが入ったプロテクターが装着されていた。

なお、マークは右足に青いバツのマーク、左足に黄色い三角のマーク、右腕に赤い丸のマーク、左腕に黒い四角のマークである。

そして、顔はなぜかロケットに見える……というか、ロケットにし

が見えないオレンジの目を持つマスクが装着されていた。

「んん!？」

「え? なに!?!? 何が起きた!?!? 俺、どうなっちゃったんだ!?!?」

その姿に怪人は驚いた様子を見せるが、一方で奇妙な姿をした者は慌てた様子で自分の顔や体を触れながら驚いていた。

そして、その奇妙な姿をする者からは確かに一夏の声が発せられている。

「落ち着いて! それはフォーゼ! とにかく、そいつをなんとかして!」

「は? フォーゼ? え? なにが!?!」

「うおおおおお!」

「え? おわああああ!?!」

叫ぶ衛理華だが、何が起きたのか理解出来ていない一夏は混乱するばかり。

その間に興奮したらしい怪人に文字通り殴り飛ばされてしまう。

「え? って、おわつと!?!」

が、背中から何かが噴射されたかと思うと落下速度が落ち、一夏はふらつきながらもなんとか着地することが出来た。

「凄い……あいつに殴られたのに……」

その光景に衛理華は目を見開いて見つめる。

確かにあれは 『フォーゼ』はそのつもりで造ってはいるが、鉄を簡単に引き千切る力を持つ怪人に殴られても平気でいられるとは思ってもいなかった。

自分の想定以上のことに衛理華の興奮は高まっていく。

「うおおおお!?!」

「ちよ、ちよつと!?!? うわ!?!」

が、一夏はそうもいかない。なにしろ、何が起きてるのか全くわからないままなのだ。

そのため、両腕で殴り続ける怪人から身を守るしか出来なかった、

その時である。

《ロケット・オン》

「へ？」

怪人に殴られた拍子で右端のスイッチを押してしまい、軽快な電子音が響いた。

それで押したスイッチに思わず顔を向けてしまふ一夏であったが

「な、なんだあ！？」

右腕に何かが現れ、包み込むように装着されていく。

その光景に一夏は戸惑いながらも目が離せずにいた。

「ロケット？　つて、おわあ！？」

やがて、その現象が収まると一夏の右腕にはオレンジ色のロケットが装着される。

そのことに首を傾げそうになる一夏だが、そのロケットがいきなり噴射を初めて飛ばされそうになり

「ぐわあ！？」

殴りかかるうとしていた怪人をそのロケットで突き飛ばしてしま
うのだが

「おわあああああ！！？」

一夏はというとロケットによつて文字通り飛ばされていた。

しかも、驚いているせいかコントロール出来ずにあちこち飛び回っ
てしまう。

「えっと、あのスイッチのコントロール方法は……ああもう！　ベ
ルトの右端のスイッチを戻して！　それで解除されるから！」

「うわあああああ！？　み、右端？　これが！？」

それを見た衛理華は何かを伝えようとするが、伝えようとしたこ
とを思い出せずに別の方法を伝えてしまう。

驚きながらもそれをかるうじて聞いていた一夏は右端のスイッチを
引き戻し

「うわあああ！？」

それと共に右腕のロケットが消えるが、そのせいで一夏は落下し

てしまう。

「おお!?!」

それも背中から何かを噴射されて落下速度が落ち、尻餅を付く形で下りることが出来たが。

「なんかわからないけど………凄い」

そして、自分の両手を見つめながら一夏はゆっくりと立ち上がる。このスイッチやスイッチがなんなのかまったくわからないが、それでもなんだか凄いことだけはわかった。

「うおおおおおお!!」

「くそ! やられてばかりでいられるか!」

しかし、そんなのは関係無いとばかりに襲いかかる怪人。そのことに気付いた一夏は自分を奮い立たせた。

何がどうなってるかわからないが、それでもやられっぱなしではいられなかったからだ。

「うおおおお!!」

「くおお!?!」

だからこそ、やられてたまるかと一夏は怪人に殴りかかる。

それにひるみ、両腕で守りながら動きを止めた怪人を一夏は何度も殴り続けた。

「おおお!!」

「うわぁ!?! く!」

しかし、怪人も叫んだかと思うと両腕を広げ、オリオン座に並ぶレンズからいくつもの光弾を撃ち出してきた。

一夏はそのいくつかを受け吹き飛ばすが、背中の噴射を使ってなんとか着地する。

「おおおおお!!」

「そう何度も受けてられるか!」

《ロケット・オン》

逃すまいと怪人は更に光弾を撃ち出してくるが、一夏は当たるまゝと右端のスイッチを押して右腕にロケットを再び装着し、飛び上

がって光弾から逃れていた。

「アストロスイッチの力を……使いこなしてるの？」

先程とは打って変わって自由に飛び回る一夏の姿を衛理華は驚きの顔で見つめていた。

なにしろ、あのスイッチの使い方をほとんど教えていない。なのに、一夏は完全とは行かないものの使いこなしていたのだから。

「他に何か無いのか？ これは？」

《ドリル・オン》

しかし、逃げ回るばかりではどうにもならず、一夏はなんとかしようとして左から2番目のスイッチをひねった。

すると一夏の左足にドリルが装着される。

「ドリル！？ でも、これなら」

「レバーをもう一度入れて！」

そのことに軽く驚きながらも一夏はあることを思いついて実行しようとして、それとほぼ同時に衛理華の叫びが聞こえてきた。

「レバーを？ なんかわかんないけど！」

《ロケット・ドリル・リミットブレイク！》

そのことに首を傾げながらも、一夏は言われたとおりにレバーを動かす。

すると電子音と共にドリルが高速回転を始め、ロケットが更なる唸りを上げる。

「凄い！ これなら！」

このことに驚きながらも一夏はロケットの推力でドリルを突き出しながら怪人へと飛び込み

「ロケットドリルキックー！」

「ぐおおあああああああああ！ー！？」

思わず出たかけ声と共に怪人を貫いてドリルが地面に突き刺さり

「おおわわわわわわ、っと！」

「あああああああああ！ー！？」

ドリルの回転で自分も回転しながらもなんとか止まって無事に着地することが出来た一夏。

その間に怪人は断末魔と共に爆発の中へと消えていく。

その時、怪人から何かが飛び出す、一夏も衛理華もそのことには気付かずにいたのだった。

「よつと。しっかし、これってなんなんだ？」

「く、う……」

「て、まだ生きてるのか!？」

入れたスイッチを戻し、ロケットとドリルを消してから改めて自分の体を見る一夏。

その時、うめき声が聞こえて慌てて構えてしまつのだが

「う、うう……」

「へ？ 人？」

そこにいたのは怪人ではなく、背広を着た男性だったことに軽く戸惑ってしまう。

「か、川岸君!？」

「え？ 知り合いですか？」

「大学の同期よ……でも、どうしてあなたがそこに……まさか、さっきのつて」

顔を向ける一夏の問い掛けに驚いていた衛理華は答えながらそのことに気付く。

そう、川岸と呼ばれた男性がいた場所は、怪人が爆発した場所でもあったのだ。

「ああ、そうだ……さっきのは俺の仕業だ……」

「そんな……なんで、こんなことを」

「君には才能があった！ なのに、君はその才能を無駄な研究にばかり費やして……俺はそれを止めたかったんだ！

そしてたら、変な奴がこれを使って脅かしてやれ……そうすれば、研究をやめるって言われて……」

「これ？」

どこか怒りをあらわにしながら話す川岸に麗華は首を傾げた。

というのも、気になる一言を聞いたからだ。

「変な形をしたスイッチだ。それを押したら俺はあんな姿に……そういうえば、スイッチはどこに行っただ？」

「スイッチ？ それってどんな」

「おおお！？」

そのことに答える川岸であったが、そのスイッチを持っていないことに気付いて辺りを見回していた。

衛理華は詳しく聞こうとするのだが、そこで一夏が叫んだために川岸と共に顔を向けてしまう。

一方、一夏は驚いていた。池に映る自分の姿を見て。なぜなら

「これって、仮面ライダーじゃないか！」

そう、フォーゼの姿は仮面ライダーに似ていた。完全に似ているというわけではない。

けど、マスクにスーツ、それにベルトと特徴的な物が似ていたことが一夏をそう思わせたのである。

「仮面ライダー？ いや、それはフォーゼって言うんだけど」

「フォーゼ？ そっか、仮面ライダーフォーゼか……やったあ！」

訂正させようとする衛理華。ちなみに彼女は仮面ライダーの都市伝説は知らなかったりする。

しかし、思い込んで一夏は両手を挙げて喜ぶ。なにしろ、自分でも叶わないと思っていた目標が思いがけないことで叶ったのだから。

「あれが……君の研究の成果なのか？」

「まあ、一環……かな？」

そのことに呆れながらも問い掛ける川岸に、衛理華は苦笑しながら答えた。

そのせいか、衛理華は川岸が持っていたというスイッチのことを忘れてしまう。

そんな3人を離れた場所で見ている者がいた。

どこかサソリを思わせる顔をした者が奇妙な形をした黒いスイッチ

を持ちながら

第1話『青春・スタート!』（後書き）

というわけで初めましての方は初めまして。

小説を読もうでは2つ目となるライダーモノです。うん、仕事もあるのになにしてんだ私?^^;

ちなみに気分転換で書いた物なのですが、気が付けば1話書き上げてるとい

うん、仕事が遅れないように気をつけます。そのせいで亀更新になりますが……デイケイドも書かないとダメだし。

ちなみに次回は衛理華から話を聞くことになった一夏。

しかし、一夏には別の運命が待っていた　というようなお話です。次回でお会いしましょう……いつになるかわからんが……

第2話『青春・ロックオン！』

「さ、入って」

「あ、お邪魔、します」

あの後、落ち着いたことで変身を解いた一夏は衛理華に説明するから付いてきてと言われ、ある大学の一室に通されていた。

そこで衛理華に案内されながら恐縮しつつ入る一夏。

その中はバラバラの状態のバイクや何かの機械などが乱雑に置かれており、とても片付いてるとは言えないものであったが。

なお、お互いの自己紹介はここに来るまでにすでに済ませている。

「ごめんね、散らかってて。さてと、まずは何から話した方がいいかしら？」

「さつき織斑君の姿、フォーゼだったか？ あれはいつたいなんなんだい？」

イスを渡して座らせる衛理華の話に一緒に来ていた川岸が問い掛ける。

それに対し衛理華はなぜか難しい顔をし、それを見た一夏と川岸は疑問を感じて訝しげな顔をしてしまう。

「4年前、私とおじいさま……ほしの星野 たいぞう泰蔵教授はあるエネルギーを発見したの。

宇宙から無尽蔵に降り注ぐエネルギーを。私達はそれをコズミックエナジーと呼んでるけどね」

少しして、意を決した衛理華は話し始める。

しかし、一夏と川岸には首を傾げる話ではあったが

「私達はコズミックエナジーを調べた結果、あらゆる機械のエネルギー源になるだけでなく機械の性能などを上げたり、物質化したりすることが出来ることがわかったの」

「馬鹿な！？ そんなエネルギーが存在するはずがない!？」

真剣な眼差しで話す衛理華だが、そのことに川岸が反論する形で

声を荒げた。

確かに夢のようなエネルギーだが、実際は様々な法則を無視しているとも言える。

衛理華と同じ大学の教員であり物理などを専攻している川岸にしてみれば、そんなエネルギーがあるはずが無いというのが当然だったのだ。

「確かに川岸君の言う通りよ。普通なら、そんなエネルギーはありえないわ。」

でも、実在した。それで私とおじいさまは実用化に向けて研究を始めたけど……それは困難を極めたわ」

「どうしてですか？」

「コズミックエナジーを使うには特殊な装置が必要なものもあるけど、採取出来る量が微量でしかないの。」

そうね……今手元にある装置だと、乾電池1本分貯めるのに1年以上掛かるわ」

「そんなに!?!」

衛理華の話に問い掛けた一夏は思わず驚いてしまう。

いくらこの手の話に疎いといっても、聞く限りでは大変だというのはわかったからだ。

「それに機械の性能を上げるとしても、それは小さな物でしかないから

だから、私とおじいさまは実用レベルで使えるように研究を続けたわ。」

でもある日……おじいさまは大きな災いが起きると言い出したの

「大きな災い……ですか？」

「ええ、それはなんなのはおじいさまも良くわかっていなかったみたいなの。」

でも、コズミックエナジーを調べることで何かに気付いて、そんなことを言い出したみたいだけど

今なら、それがなんなのかはなんとなくわかる気がするわ」

「う……」

話を聞いていた一夏の問い掛けに話していた衛理華は答えながら顔を向ける。

顔を向けられた川岸は思わず顔をしかめていたが。

確かに話に乗せられて使ってしまったとはいえ、今思うと怪しいと一言では片付けられないような物だった。

なにしろ、スイッチを押しただけで自分を怪人へと変えてしまったのだから

「それで私とおじいさまは実用化も併せて、その災いに対する術を作ったの。」

それがフォーゼドライバーとアストロスイッチよ」

「これ……ですか？」

衛理華の話を聞いた一夏は開かれたアタッシュケースの中にある装置、フォーゼドライバーを見た。

ベルトになって自分を変身させる。あの時は思わず喜んでしまったが、今思うと凄い装置だと思った。

「しかし、今までの話を聞いてると使えるように思えないのだが？」
「ええ…… 実際、織斑君に触れるまでは起動すらしなかったわ。」

一応、今までの研究で何らかの方法でコズミックエナジーを活性化出来ることはわかってたの。

それでもフォーゼドライバーやアストロスイッチを起動出来るほどでも無かったけど……

けど、おじいさまは決して諦めずに必死でその方法を見つけようと研究を続けたわ。でも、去年過労で……」

川岸の問い掛けに衛理華は沈んだ顔で答え、そのことに川岸はしまったとばかりにうつむいてしまう。

一夏も悲しそうな顔をしていた。話を聞いて、泰蔵教授はどこにいるのかと思っていた。

でも、実際は……その事実に関心を痛めたのだ。

「まあ、過ぎちゃったことだけだね。」

それで私はおじいさまの研究を受け継いで続けていて、今日のこと
が起きたってわけ」

「そうか……でも、良かったじゃないか。研究が実を結んで」

「そうでもないわね」

「え、なんでですか？」

話を聞いて喜ぶ川岸であったが、話していた衛理華は難しそうな
顔をしていた。

そのことに一夏は首を傾げる。研究が完成したのではと思ったから
なのだが

「たぶん、織斑君に何らかの要素があつて、それによってコズミッ
クエナジーが活性化したんだと思うんだけど

さっきも言ったようにまだ研究中だから、その要素がなんなのかわ
からないのよ」

腕を組みつつ、難しい顔で衛理華は話す。

なにしろ、コズミックエナジーにはまだ不明な点が多いのだ。

それを話すと話がこじれそうなので、衛理華は話す気は無かったの
だが。

「おいおい、大丈夫なのか、それは？」

「人体に害が無いのは確認してるから、その点に感しては大丈夫よ。
ただ、フォーゼドライバーやアストロスイッチ性能を十分に使える
ほどの活性化は私としては予想外だったけどね」

疑問に思った川岸の問い掛けに衛理華は苦笑混じりに答える。

実際、フォーゼドライバーとアストロスイッチは補助となる物を用
いて運用することを前提にしていたのだ。

しかし、一夏はその補助無しに使うことが出来た。

これは衛理華にとっては予想外であり、だからこそ調べる必要があ
ったのだが。

「そういうわけで織斑君には手伝って欲しいのよ。あ、変な実験は
するつもりは無いからね」

「え？ ああ、それくらいでしたらいいですけど」

両手を合わせつつお願いする衛理華に一夏は後頭部を搔きつつ答えた。

色々と疑問には思うが自分の夢を叶えてくれた人でもあるので、それくらいなら手伝ってもいいかと思ったのだ。

「ありがとうね。で、早速で悪いんだけど、これらに触れてみてくれないかしら」

返事を聞いて笑顔になる衛理華がある物へと左手を向ける。

一夏がそれへと顔を向けると、そこには先程見たバラバラになったバイクと車輪が付いた装置があった。

「なんですか、これ？」

「ORB-40F、はバイクのことね。それとパワーダイザー。これらはフォーゼのアシストマシンとして製作してたのよ。」

フォーゼは本来この2台を連結した状態で搭乗することで変身することを前提にしてたの。

そうすることでコズミックエナジーを高め、フォーゼドライバーとアストロスイッチを起動状態にしようとしたわけ。

といっても、さっき言ってた問題のせいでこの2台とも起動すら出来なかつただけだね」

「そうなんですか」

人差し指を差ししながら問い掛ける一夏に衛理華は肩をすくめながら答える。

その話に声を漏らしながらバイクと装置に触れる一夏。するとバイクと装置から唸り音が響き始める。

「おわ！？」

「起動した……本当に織斑君に何かあるのかしら？」

そのことに驚き離れてしまっ一夏だが、衛理華はあごに手をやりながら考えていた。

コズミックエナジーの活性化に一夏が関わっているのは間違い無い。だからといって決めつける訳にもいかないが。

というのも確かに切っ掛けにはなってるだろうが、一夏自身に原因

がある」と判明したわけでもない。

これからはその理由を確かめる必要がある」と衛理華は考えていたのだ。

「んつと、これでよし。フォーゼドライバーとマシンを同期させたわ。

織斑君がフォーゼドライバーを持つてる限り、この状態は維持される。これでやっと研究が進むわね」

そんなことを考えつつもパソコンを操作していた衛理華は安堵のため息を漏らした。

理由はともかく、コズミックエナジーが活性化されたことで今まで出来なかつた研究も出来るようになる。

今まではコズミックエナジーの活性化すら出来なかつたので、これは大きな前進とも言えた。

むろん、活性化した理由も調べなければならないが、この状態なら調べやすくなる。

そのことに衛理華は嬉しくなり、思わず笑みがこぼれそうになっていた。

「そういうわけだから、フォーゼドライバーとアストロスイッチは織斑君が持つていてね」

「え？ いいんですか？」

「どのみち織斑君が持つてないと意味が無いし、私にとってもその方が都合がよいもの。」

ここでもフォーゼドライバーのことはある程度モニター出来るしねけど、このことは他の人に言っちゃダメよ。絶対に欲しがる人もいるだろうしね」

「確かにな」

言われたことに軽く驚く一夏に話していた衛理華が答え、川岸も同意するようにならずにいた。

一夏は良くわかっていないが、コズミックエナジーは使いようによってはISを超える物にもなりかねない。

もし、それが知られば激しい争奪戦が起きる可能性がある。

いや、それで済めば軽い方かもしれないが

「他のアストロスイッチも渡すから、それらの説明書を今作っておくわね」

「え？ アストロスイッチって、他にもあるんですか？」

「そうよ。ただ、どんなのが戦闘に役立つかわからなかったから、手当たり次第に40個も作っちゃったけど」

「よ、40個!？」

「ええ、けど今使える状態にあるのはフォーゼドライバーにセットしてるのを含めて8個だけだけどね」

説明を聞いて問い掛けた一夏は驚き、説明していた衛理華は思わず苦笑する。

元々研究者故に戦闘のことなど全くと言っていい程わからなかったその為、思いつく限りの物を作った結果、それだけの数になってしまったのだ。

ただし、スイッチ自体は作られたものの作った泰蔵教授が亡くなったことで大半が未調整状態のままであり、使えるのが衛理華が話していたその8個しかないのである。

「そうなんですか……ところでこのバイクって、すぐに乗れるんですか？」

「まあ、パーツごとに完成はしてるから後は組立と調整をするだけだけど、乗ってみたいの？」

「はい！ だって、仮面ライダーにはバイクは必須じゃないですか！」

「だから、仮面ライダーじゃないんだけどなあ……それに君、まだ免許取れないでしょ？」

目を輝かせて問われたことに答える一夏。

「一也の時もだが、都市伝説では仮面ライダーはバイクに乗っている話が出てくる。」

故に一夏としては仮面ライダーとしてバイクが欲しいと思っていた

のだ。

ただ、それは問い掛けた衛理華の冷や汗混じりに漏らした問題もあったが。

ちなみにフォーゼのデザインに衛理華は関わってはいない。

その前に泰蔵教授がシステムを完成させていたからだ。

なので、本音を言うとフォーゼのデザインに不満があったりする。

一夏はその辺りを気にしてはいないようではあるが。

「と、忘れる所だった。川岸君はなんであんな姿に？ スイッチがどうか言ってたけど」

「ん？ ああ……真っ黒なマントとフードみたいな物で全身を覆ってたから、どんな奴かはわからない。

ただ、なんか鎧のような物を付けた腕をしてたけど……」

「なんでそんな怪しい奴から受け取ったのよ」

「あ、いや、俺も最初はそう思ってたんだ。

でも、あいつの話の聞いてる内にその気になって 気が付いたら、スイッチを持っていて……」

返事を聞いて呆れた様子で更に問い掛ける衛理華に答えた川岸は困った顔をしながら更に答える。

川岸も話した通り、最初はそんな奴からスイッチを受け取るつもりはなかった。

しかし、その者の話を聞いている内にその気にさせられてしまい

後は衛理華や一夏にしたようなことをしてしまったのだ。

「なんなのかしら、そいつ？ それにスイッチか……あの時に破壊されたのかしら？

もしかして、そいつがおじいさまが言っていた」

「よし！ こいつの名前はマッシングラーだ！」

「はい？」

その話を聞いて思考に没頭しようとした衛理華だったが、一夏がいきなり叫んだ事に思わず顔を向けてしまう。

「えっと、織斑君？ マッシングラーって？」

「このバイクの名前ですよ！」

さっきのつてなんか呼びづらかったから、いい名前を付けようと思つて」

「思ったんだけど、織斑君のセンスって……」

笑顔で答える一夏の話に問い掛けた衛理華は顔を引きつらせていた。

ちなみに一夏は本来一般人と変わらないセンスを持っているのだが……
こと仮面ライダーが関わると興奮してなぜかこのようなセンスに走つてしまう。

そのことに衛理華は一抹の不安を感じてしまうのだった。

次の日、衛理華は研究室でコーヒーを飲みながらモニターを眺めていた。

そのモニターにはフォーゼドライバーから送られるデータが下から上へ流れるように映し出されている。

一夜明けただけなのに、目を見張るようなデータが集まっているのだ。

今までは何をやっても大して成果が出なかっただけに、このことは衛理華としては小躍りしそうなくらいに嬉しかった。

「ホント、織斑君には感謝しないとね。でも」

そのことで一夏に感謝しつつ、衛理華はふと考えてしまう。

昨日、川岸が変身した怪人。あれはいつたいたんだつたのかと。

話によれば、何かしらのスイッチを渡されたらしいのだが

「まさか、フォーゼドライバーやアストロスイッチ？ そんなわけ、無いわよね……」

ふと、そんな不安がよぎる。

フォーゼのスーツや武装はフォーゼドライバーやアストロスイッチを介してコズミックエナジーを物質化することで施される。

それと同じことで川岸を怪人にしたのではと思ったのだ。

「まさか、ね……」

苦笑しながら、衛理華はその考えを否定しようとする。

しかし、不安は消えない。なにしろ、コズミックエナジーは極論的にはどこにでもあるエネルギーだ。

だから、自分以外に誰かが存在に気付いていたとしてもおかしくは無い。

もし、自分以外に気付いた者がいて、コズミックエナジーを良からぬことに使おうとしているのでは

『次のニュースです。今日未明、ISを起動させた男性が見つかりました』

「あら、やっとなの?」

と、テレビから流れるニュースに衛理華はそんな感想を漏らす。

世間一般ではISは女性しか動かせないことになってるが、衛理華としてはなんでそんなことになっているかがわからない。

なにしろ、ISがなぜ女性にしか起動出来ないのかもわかっていないのだ。

なので、男性がISを動かせる可能性があるとなると衛理華は考えていたのである。

『起動させたのはIS学園の受験会場に来ていた織斑 一夏さんで

』

「ぶううううううううううううううう!!?」

そんなことを考えていたら、ニュースから思いがけない一言を聞いて飲んでいたコーヒーを吹き出してしまう。

しかし、衛理華はそんなことに構わずテレビにしがみついていた。そして、テレビを覗き込むと、そこには一夏の顔写真が映されていたのである。

「なにやってるのよ、織斑くううううんっ!!?」

その事実には衛理華は絶叫せずにはいらなかった。

確かに今日は高校受験とは聞いてはいる。しかし、受験先は藍越学

園のはずだ。

それがなぜIS学園の受験会場にいるのか理解出来ない。

「まさか、これがコズミックエナジーを活性化出来た理由じゃないわよね？」

色々と疑問に思うがニュースになっている以上、一夏が男性でありながらISを起動させたのは間違い無いだろう。

それがコズミックエナジーの活性化の理由に繋がるのでは？ と、衛理華は思わず考えてしまうのだった。

今日この時をもって一夏は運命のスイッチを押した。
その運命の先にあるのはいつたい

第2話『青春・ロックオン!』（後書き）

気分転換に書いたのが意外と早く出来てしまいました。

ダメじゃん、自分……仕事とかもあるのに

あ、後感想でこのSSと似た設定のが掲載されていたらしいという情報があったのですが、私はそちらは見たことはありません。

まあ、あまりにもありがちなネタですしね。先に掲載されてたのに気付ずにやってしまっても文句は言えません。

後、検索のタグにも付けてありましたが、コズミックエナジーなどの設定はこの作品用に改変しております。

ただ、完全オリジナルなスイッチなどは今のところは予定しておりません。

まあ、今後の原作フォーゼのストーリー次第になるとは思いますがどね。

さて、今回はすったもんだの騒ぎがあつてIS学園に入学することとなった一夏。

そこで姉にあつたり幼馴染みと再会したり、お嬢様に因縁を付けたりとテンプレ通りの展開に

と思いきや、怪人がIS学園に乱入？ 一夏は変身して戦いますがといった内容です。

次回、またお会いしましょう。

第3話『学園生活・セツトオン!』

「なるほどね……」

「なんていうか……すみません」

携帯電話越しに衛理華に謝る一夏。話しているのは一夏がISを起動させた経緯だ。

試験会場となっている多目的ホールにたどり着いた一夏だが、多目的ホールの構造が複雑だった為に迷ってしまう。

それで同じ多目的ホールで行われていたIS学園の試験会場に入っ
てしまい、そこにあつたISに興味本位で触れて

衛理華がテレビで見た騒ぎになってしまったのである。

そのおかげで一夏は衛理華の元に行くことはおるか連絡も取れない
状態に追い込まれてしまい、数日経ってようやく携帯電話越しに連
絡を取れたのだ。

「それでこれからのことなんですけど」

「そうね。しばらくはこっちに来ない方がいいわ。少なくとも騒ぎ
が落ち着くまでは」

すまなそうに問い掛ける一夏に衛理華はため息混じりに答えた。
もうしばらくはこの騒ぎが続くことになるだろう。

その状況でこちらに来ればコズミックエナジーのことも露見してし
まう。

そして、コズミックエナジーのことが知られば一夏を今以上の状
況に落としかねない。

それを避けるためにも騒ぎが落ち着くまではこちらに来ない方がい
いと衛理華は判断したのである。

「本当にすみません」

「確かに迂闊な所もあったけど、あなたが謝ることじゃないわ」

再び謝る一夏に衛理華はそう言い聞かせた。

一夏にも迂闊な所があったとはいえ、まさか自分がISを起動出来

るとは思ってもいなかっただろう。

男性はISを起動出来ないのは半ば常識になっていただけに、そう思い込んでいても仕方が無い。

かといって衛理華としては困ったことには違いなかったが。

なにしろ、一夏がいなければ出来ない実験もあつたのだ。

それがしばらく出来ないというのはある意味痛手にもなってしまう。

「とりあえず、騒ぎが落ち着いたら頃にまた連絡するから」

「はい、わかりました」

結局、今話し合っても解決策が見つかるわけでも無い。

なので、日を改めて衛理華の元へ向かう事になったのだった。

それから数週間後

一夏は今の状況にひどく居心地が悪い思いでいた。それはもう表情に出るくらいに。

なぜか？ 現在はSHRショートホームルームの時間なのだが、一夏は教室にいる生徒全員の注目を浴びていたのである。

まあ、男性でISを起動させるということをしたのだから、ある意味当然とも言えるかもしれない。

一夏もそれは自覚していた為、普通ならここまで居心地が悪くなることはなかった。

では、なぜそこまで居心地が悪くなっているか？

実は教室にいる生徒は自分を除き全員女生徒だったからである。

一夏は紆余曲折あつてIS学園に入学することとなった。

なぜ、そうなったのかは一夏には良くわかっていない。

というのも、あの騒ぎで政府や企業、研究機関のお偉いさんがひっきりなしに来たからだ。

それだけでも大変なのに一夏が知らない所で話が進んでしまい、気が付けばIS学園に入学させられていた。

そして、ISは基本的に女性にしか動かせない。なので、IS学園

に入学するのは女生徒ばかりであり結果として、今のような状況になってしまったのである。

男性諸君の中には一夏の状況をひどく羨ましがる人もいるかもしれない。

しかしである。あなたがもし数十人の外国人しかいない部屋に押し込められ、更にはその外国人全員から見られていたらどう思うだろうか？

一夏としてはそんな心境に近かったのだ。

「じゃ、じゃあ、自己紹介をお願いします」

しかも、女生徒全員が一夏を注目してるせいか、教室が重い雰囲気きふいに包まれてしまっている。

現に一夏のクラスの副担任である山田やまだ 真耶まやの話を一夏を含めて生徒全員聞いている様子が無い。

緑色のショートカットにメガネを掛けている可愛らしい顔立ちのせいか幼く見える真耶だが、この状況に表情を引きつらせてしまう。

一方、一夏は助けを求めるようにある女生徒へと視線を向けた。

その先にいたのは長い黒髪をポニーテールにした凛々しく整った顔立ちの少女がいる。

教室に入って一目見た時に一夏は気付いた。この女生徒は自分の知り合いだと。

しかし、その女生徒は一夏の視線に気付くと顔を背けてしまう。

（それが6年ぶりに再会した幼馴染みに対する態度か？ 俺、嫌われてるんじゃない）

その女生徒の態度に一夏は思わずそんなことを考えていた。

どうしたものかと一夏は悩んでいたが

「織斑 一夏君？」

「へ、は、はい！」

真耶に呼ばれていることに気付いて、慌てて立ち上がるはめになつてしまった。

「あの、大声出しちゃってごめんなさい。でも、自己紹介は織斑君

の番なんだけど」

「え、あ、すみません」

すまなそうにしている真耶に謝りつつ、一夏は答えてから軽く咳払いをする。

このやりとりに教室内に笑いが起きるが、そのおかげが一夏の気分は幾分楽になっていた。

「え」と、織斑 一夏です。目標は宇宙に行くことです。よろしくお願ひします」

まだ緊張していて堅い面もあったが、自分のもう一つの目標と共に自己紹介をすることが出来た。

その自己紹介を聞いてなにやら感心した声も聞こえてくるのでやり遂げたと思った一夏は座ろうとして

「ほお、大層な目標だな」

そんな声が聞こえてきた。しかも、すつごく聞き覚えがある。

そのことに一夏は恐る恐る声が出た方に顔を向け

「千冬姉！？ あだ！？」

黒い女性スーツを着込んだ女性の姿に驚いたと思ったら脳天にげんこつを落とされていた。

「学校では織斑先生だ」

女性としては高い身長に腰の辺りまで伸びる黒髪を途中で束ね、幼馴染みよりも凛々しく整った顔立ちをしている女性が怒った顔を見せている。

織斑 千冬。まごう事なき一夏の姉である。

その姉の登場にげんこつの痛みを耐えながら一夏は疑問に思った。なぜ、ここに姉がいるのか？と

実を言うと一夏は姉が何をしているのか知らない。

聞いてもなぜかはぐらかされてしまうからだ。

それに帰ってくるのが月に1度か2度。

先の騒ぎで週一で戻ってくるようになったが、それでも騒ぎもあって聞くことは出来なかった。

そんな姉がなぜここににいるのかと一夏は疑問に思ったのだが

「織斑先生、もう会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてしまつてすまなかつたな」

真耶とそんなやりとりをする千冬の言葉を聞いて一夏は顔を引きつらせる。

そういえば、さっきも自分のことを先生と言っていた。となると姉はIS学園の教師なのか？

まさかと思いつつも一夏は思わず顔を引きつらせていた。

確かに千冬は現役を引退したとはいえ、IS操縦者にして第1回モンド・グロツソの優勝者だ。

ある意味適材とも言えなくはないが、かといってこれは予想外すぎる。

教師はともかく、まさか自分のクラスの担任になるなんて

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。」

私の言う事はよく聞き、良く理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。

私の仕事は弱冠15才を16才までに鍛え抜く事だ。逆らつてもいいが、私の言う事は聞け。いいな」

凜とした態度で言い放つ千冬であったが、それに刺激されてかクラスメート達は騒がしくなった。

千冬はIS操縦者を目指す者の憧れの的だ。

先程も言ったが、第1回モンド・グロツソの優勝者の肩書きは伊達ではないのである。

「毎年、良くもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられるそれとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

そんなクラスメートの騒ぎに呆れる千冬だが、その仕草にクラスメート達は盛り上がる。

一方で一夏は一抹の不安を抱えていた。なにしろ、千冬には色々と

頭が上がらないのだ。

(俺、無事に高校生活送れるんだろうか?)

などと、冷や汗を流しながら　そんなことを考えていたせいか
気付かなかった。

一夏が幼馴染みと呼んでいた女生徒と姉である千冬に視線を向けら
れていたことに。

その後、最初の授業となったのだが、一夏はため息を漏らしてい
た。

理由は2つ。まず、授業が難しすぎるといっ点だ。

ここはIS学園なので当然ISに関することも学ばなければならな
い。

が、一夏は今までもくくISに関することに触れることが無かった
為にその手の知識は皆無と言っていい程無かった。

一応、読んでおくようにとISに関する参考書はもらっていたもの
の、電話帳並にありそうなページ数と先の騒ぎなどで時間が無かつ
た為に一通り読むしか出来ていない。

おかげでISの一般常識的な物は覚えたものの、その程度では授業
にはなんの役にも立たなかったのである。

ちなみにその参考書は必要になるだろうと思って持ち込んではい
るが。

もう1つが更に注目されているといっ点だ。

今は休憩時間なのだが、他のクラスどころか2年や3年の生徒まで
一夏を見に来てるのである。

しかも、話し掛けるわけでもなく遠巻きに女生徒同士で話し合いな
がらだ。

おかげで一夏はとても居心地が悪く、今なら動物園のパンダの気持
ちがわかりそうになっていた。

どうしたらいいのだろうか? と、一夏がそんなことを考えていた

時である。

「ちよつといいか？」

「え？」

幼馴染みの女生徒が声を掛けてきた。

「あ、ああ、いいよ」

一夏としてもこの状況から抜け出したかったので、渡りに船とばかりに話に乗ることにした。

そうして、女生徒 名を篠ノ之 箒と共に屋上に来たのだが 箒はなぜか手すりに両手を置きつつ恥ずかしそうに顔を背けるばかり。

これには一夏も困った様子で後頭部を掻いてしまう。

「6年ぶりにあつたんだ。何か話があるんだろ？ あ、そういえば去年の剣道の全国大会、優勝したんだよな？」

「え？ あ、なんで知っている！？」

話し掛けてからそのことを思い出した一夏に箒は驚いた様子で問い掛けてしまう。

そう、6年前。あることが切っ掛けで2人は離ればなれになってしまった。

箒はそのことを恨めしく思わなかったことはない。特にその原因を作った姉には

だから、今日まで会えなかったのに、なぜ一夏がそんなことを知っていたのか気になってしまったのだ。

「え？ ああ、新聞で偶然見かけてさ」

「なんで新聞なんか読んでるんだ！？」

「は？ いや、俺だって新聞くらいは読むぞ？ まあ、じっくりとつてわけでもないけどさ」

なぜか怒鳴る箒。しかし、その顔は真っ赤であったが。

一方、答えた一夏は後頭部を掻きつつ答えた。

ちなみに本人は新聞を読むと言っても普段はテレビ欄以外は流して読むタイプだ。

箒のことはその時に偶然見かけたにすぎない。

「あ、いや、その……と、所でなんなんだ、そのバックは？」

しかし、箒は恥ずかしかった。一夏がそのようなことを知っていたことに。

それでその恥ずかしさを紛らわそうと一夏が持っていた小さなスポーツバックを指摘する。

「ああ、これ？ これは俺のもう一つの目標を叶えてくれた物さ」
それに対し、一夏はバックに顔を向けつつ答えていた。

ちなみに中身はフォーゼドライバーだ。衛理華に言われて肌身離さぬようにしてるのである。

「もう一つ？ そういえば、自己紹介で宇宙に行くとか言っていたが……もう一つとはなんなんだ？」

「あゝ、それは……機会があったら話すよ」
気になって問い掛ける箒に一夏は苦笑混じりに答える。

フォーゼのことは秘密にと言われてるだけに、いくら幼馴染みでもここで話す訳にはいかなかったのだ。

それ以前に仮面ライダーになりましたと言えばどんな反応をされるか怖いのもあったが。

「それはそれとして6年ぶりに会ったけど、箒って会ってすぐにわかったぞ」

「あ、よ、良くも覚えているものだな？」
「ほら、髪型とか雰囲気とか一緒だし」

にこやかに話す一夏の言葉に箒は照れくさそうに、それでいて嬉しそうにしていた。

一方で、その光景を他の女生徒に見られていても気付かずになっていた。

「お、チャイムか。ほら、行こうぜ」
「あ……」

チャイムが鳴り、一夏は箒の手を引いて歩き出す。

そのことに箒は軽く驚きながらも、顔を赤くしつつ嬉しそうにして

いたのだった。

「はあああああ……」

次の授業が終わった休憩時間。一夏は深いため息を吐いていた。流石にマズイと感じた一夏はISの参考書も開いて授業を受けたのだが

それでも授業を聞くので手一杯で頭に入っていない。

真耶にこのことで慰められるが、その顔が引きつっていたのを一夏は見逃していなかった。

で、千冬に1週間で参考書の内容を覚えろと言われたことにどうしようかと悩んでしまう。

本音を言えば1週間では無理だ。せめて1ヶ月は欲しい所だが、授業に追い付くためにはそうしなければならぬだろう。

そのことは一夏もわかっていたので、どうしたものかと思ってしまうのだ。

なお、このやりとりで千冬を名前で呼んでしまったことで出席簿によるチョップを受けてしまい、クラスメートに千冬との関係に気付かれてしまったりする。

「ちよつとよろしくて？」

「はい？」

声を掛けられて振り返る一夏。その先にはクラスメートである女生徒が立っていた。

ブロンドの腰まで流れるように伸びる髪に白のフリルが付いた青いカチューシャを付け、やや垂れめ気味な青い瞳を見つ綺礼に整った顔立ち。

しかし、今はなぜか眉が上がっていたが。ちなみに女性としては平均的な身長に健康的な体型をIS学園の制服で包んでいる。

「まあ、なんですよ、そのお返事？」

「え？ あ、セルシア・オルコット……さんだったっけ？」

なぜか驚いた様子を見せる女生徒　セルシアに一夏が問い掛けた。

名前の方はS H Rシヨートホームルームの時に聞いて覚えてはいたが

「ええ、そうですね。入試主席にしてイギリスの代表候補生のセシリア・オルコットですわ」

「代表候補生？　そいつは凄いな」

胸を張ってそんなことを自慢するセシリアに一夏は感心していた。代表候補生とは国家を代表してIS操縦者となるべく選出された者を指す。

いわゆるエリートであり、ISの参考書を読みふけることでそのことを知っていた一夏は普通に感心していたのだ。

「ええ、本来なら私のような選ばれた人間とクラスを共にするだけでも奇跡。幸運なのよ！」

「いや、それはどうかかな？」

で、なぜかポーズを付けつつ浸ってる様子のセシリアに一夏は苦笑混じりにツツコミを入れてしまう。

まあ、セシリアの言葉もどうかと思うので、一夏の言いたいこともわからなくはないが。

「まあ、私は寛大ですから、わからないことがありましたら教えてあげてもよろしくてよ。」

あなたが泣いて頼むのでしたらね。なにしろ、私は入試で教官を倒したエリート中のエリートですから」

「そ、そいつは凄いな。俺、逃げてただけだし」

尊大な態度で話すセシリアに一夏は顔を引きつらせながら返事をする。

入試の際にISを使って教官と模擬戦を行うのだが、言葉通り一夏は逃げただけだった。

突っ込んできた教官から逃れる為に。

そしたら、そのことに驚いたのかどうかは知らないが、その教官は一夏の横を素通りし　そのまま壁に激突して気絶してしまったの

である。

なお、この時の教官が真耶だったのだが、その後の忙しさで一夏は教官が真耶であったことは忘れている。

それはともかく、倒したとは言えないのでそういう風に言うことにしたのだが。

余談だが、この時一夏は初めてISを操縦したが、その感想は結構簡単だったとのこと。

というのも、フォーゼはコントロールが色々と難しかったのだ。

それに比べれば思考制御が出来るISは一夏にとっては楽だったのである。

「それはそれとして、これからよろしくな」

「え？ あ、ええ……」

まあ、セシリアの態度には色々と考えさせられるが、それでも波風立てるようなことをすることもない。

それ故に一夏は笑顔で挨拶するのだが、セシリアはなぜか顔を赤らめてしまう。

一夏の笑顔がとても眩しく感じられたから

なお、その光景を筈はジト目で睨んでいた。

「ここか」

放課後となり、一夏は寮自室へと来ていた。

帰宅最中に女生徒達が後を付いてきた時にはどうしようかと思ったのだが、その時に真耶と千冬が一夏の元へとやってくる。

IS学園は全寮制であるが、男性が入ることは想定されていなかったために部屋が無い。

なので、準備が出来るまでは一夏は自宅からの通学になるはずだった。

しかし、諸々の事情でやはり寮住まいの方がいいと判断されて、急遽相部屋を用意したのだという。

なお、荷物の方は千冬が着替えと携帯の充電器を用意してくれたが、そのせいで一夏は別の不安を感じてしまう。というのも千冬は案外ズボラな面がある。自分の荷物を用意した際に自宅がどうなっているか不安だったのだ。なお、このことを指摘すれば間違い無くげんこつを落とされただろうが。

そんなわけで寮の自室となる部屋の前に来た一夏。

「失礼します。あれ？ いないのかな？」

ドアをノックするが返事が無い。

どうしたのかと思いドアノブをひねってみると簡単に開いてしまった。

「留守なのかな？ だとしたら不用心だとは思うけど」

「誰かいるのか？」

そんなことを思いながら部屋の中に入る一夏。

部屋の中を見回して、その豪華な作りに軽く驚いていると背後から声が聞こえてくる。

「え？ ええ!？」

「ああ、同室になった者か？ これから1年よろしく頼む」

どうやら別室にいたらしい同居人の声に一夏は慌ててしまう。

やましいことは無いはずなのだが、女性ばかりの所にいたのときなりのことに戸惑ったのだ。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之

箒

「あ、ああ……」

別室から出てくる少女 箒の姿に一夏の視線が釘付けとなる。

シャワー上がりの体をバスタオルを巻いただけの姿。

それ故に健康的な体付きや同世代の女性としては平均以上の胸が見て取れる。

それに上気した頬に濡れた髪にまだ水滴が残る体と、一夏としては今の箒は非常に魅力的な姿となっていたのだ。

「え？ あ、ああ……」

箒もそこで部屋にいるのが一夏だとわかって顔を赤くしながら固まる。

一方の一夏も動けない。箒の魅力に目が離せなかったのだ。

「あ、一夏……」

「あ……」

そして、アクシデントは重なる。

箒の体に巻かれていたバスタオルがほどけ、落ちてしまったのだ。

予想外のことと固まっついていて気付くのが遅れる箒だが、そのせいで

一夏は見てしまった。

箒の全てを

「あ、ああ……」

「あ！ あ、いや、その！？」

このことに顔を真っ赤にして固まったまま動かない箒。

そこでようやく一夏も事態に気付いて顔を背けたが、全てが遅すぎた。

なにしろ、箒の全てをちゃんと記憶してしまったのだから。

「きゃああああああああああああああああ！！？」

慌ててバスタオルを拾い上げて体を隠しつつ、しゃがみ込んで悲鳴を上げる箒。

しかし、次の瞬間にはベッド横に置いてあった自分の荷物に飛び付き

「どわあああああ！？」

取り出した物を一夏に振り落とした。

ちなみにそれは木刀であり、勢いから考えて怪我では済まない威力がある。

一夏は驚きながらも真剣白刃取りの要領で受け止めることが出来たが。

「な、なんで一夏がここにいる！？」

「い、いや、本当は自宅通いのはずだったんだけど、いきなり寮に

行くことになったんだって。

なんか、訳があったみたいで山田先生にさっき言われたんだよ」

片手でバスタオルを押さえつつ握る木刀に力を込めながら問い掛ける箒に一夏は顔を引きつらせながら答えた。

しかし、一夏としては非常にまずい状況にある。というのも、今の箒は扇情的すぎる。

男としての性が、視線がどうしてもそちらに向こうとしてしまう。そのことに気付いたのだろう。箒は顔を赤らめながらも怒りの形相を強めてる。

しかし、そのままではいられなかったらしく、箒の方から離れていったが。

「後ろを向いている」

「あ、はい!？」

荷物の元へ行く箒に言われて一夏は慌てて振り向くが……実はその前に見えていた。露わとなった箒のお尻も

そのことに真っ赤になりつつも冷静になろうとする一夏だが、聞こえてくる着ずれの音が逆に想像力をかき立てる結果になっていた。

「いいぞ」

「あ、ああ……」

箒に声を掛けられ、先程のことは悟られまいと考えつつも振り向く一夏。

箒は剣道着に着替えており、仁王立ちのような形で見据えていたが。「と、ところで、この部屋を希望したのはお前の意志なのか？」

「あ、いや、さっきも言ったけど、山田先生にいきなり言われたもんだから……」

その時に言われた部屋がここだったただけだし」

「そうか」

恐る恐るといった様子で答える一夏だが、問い掛けた箒は顔がほころんでいた。

偶然が重なったとはいえ一夏と同じクラスになれて、その上寮も同

室に

そこまで考えた所で先程のことを思い出し、恥ずかしさと怒りがまたこみ上げていたが。

「えっと、まあ……色々あったけどさ。これからよろしくな」

「あ、ああ……」

にこやかに右手を差し出す一夏に、箒は赤くなつて戸惑いつつも右手で一夏の右手を握りしめた。

その後、夕食の後に一夏がトイレのことで悩むこととなる。

寮の部屋には基本的にトイレは無く、代わりに各階に共同トイレがある。

しかし、IS学園の寮は女子寮のような物なので男子トイレが無かつた為だ。

そのことで箒に覗きでもする気かと睨まれ、慌てて釈明したりする場面があつたりしたが。

まあ、問題はそれくらいで就寝時間ともなつたので2人は寝ることにした。

一夏は初めての寮住まいや女性ばかりの所にいるという緊張の為に、箒は想い人が隣で寝ているという事実になんか寝付けずにいたのだが。

次の日、朝食の時にクラスメイトと話し合つてそのことでなぜか箒に睨まれたり、その後一冬が1年の寮長だと知つて中々帰つてこない理由を知つたり

「これより再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。クラス代表者とはそのままの意味だ。

対抗戦だけでなく生徒会の会議や委員会などへの出席　まあ、クラス長みたいなものだな」

ショートホームルーム
SHRの時間で一冬の話を一夏は聞き流していた。

クラス代表に自分になることは無いと思つていたからだが

「自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

「はい、織斑君を推薦します」

「へ!？」

「私もそれがいいと思います」

「ええ!？」

クラスメートに指名されて慌てふためくはめになった。

というか勘弁して欲しいというのが一夏の本音だ。

生徒会や委員会はともかくIS初心者自分にクラス対抗戦はいくらなんでも無茶すぎる。ISは入試の時に一度しか乗っていない。他のクラスはどうかはわからないが、そんな自分にクラス代表が務まるわけが無いと考えたのである。

それに時間を取られるようなことをしたくないというのも理由だ。ただでさえ、先の騒ぎのせいで今日まで衛理華の所に行けなかったのだ。

クラス代表がどのようなことをするかはわからないが、場合によっては衛理華の所へ行く時間が無くなる可能性がある。それを避けるためにも一夏としては断りたかったのだ。

「他にいないのか？」

「ちょ、ちよつとま」

「納得がいきませんわ!」

辺りを見回す千冬に断ろうと声を掛けようとする一夏だったが、それを遮る形で声を荒げる者が1人。

「そのような選出は認められません!」

一夏を含めたクラス全員が顔を向けると、セシリアが怒りの表情を見せながら立っていた。

「実力があるというのならともかく、物珍しさで男をクラス代表にするなど論外ですわ!」

代表という物はそんなに安っぽい物ではありませんのよ!

ならば、代表候補生の私がクラス代表になるのは当然ではなくて?」

「あ、ああ、そうだよな。俺、入試の時しかIS動かしたことないし……そんな奴がクラス代表ってのもおかしい話だしさ」

セシリアの意見はどうかとも思ったが、一夏は顔を引きつらせながらも渡りに船とばかりに話に乗ることにした。

そのおかげかクラスメート達も色々と話し合いを始めている。これなら断れるかも、と一夏は思っていたのだが

「あれ？ でも、織斑君は入試の時に私を倒してますよね？」

「「はい？」」

真耶の一言にセシリアと共に首を傾げる一夏。

なんのことだと思いついで入試の時の教官が真耶であることを思い出した。

「ええ、本当ですか！？」

「ちよ、ちよつと待つてください！ 俺は逃げてただけですよ！？」

その一言にクラスメートの1人が驚くが一夏は慌てて反論した。

「え、でも」

「あの時は山だ先生が自爆しただけでしょう！？」

なぜか首を傾げる真耶に一夏は思わずツツコミを入れる。

だが、真耶の発言にインパクトがあったらしく、クラスメート達は一夏に視線を向けていた。

そのことで流れがマズイ方向に来てると感じた一夏はなんとか反論しようとするのだが

「決闘ですわ！ 嘘を吐いて人を謀ろうとは許せません！」

「いや、嘘は言っていないんだけど！？」

「なんだ？ 男が売られたケンカから逃げるのか？」

「いや、人の話を聞こうよ千冬姉、つあだ！？」

「織斑先生だ」

セシリアの言葉に反論する一夏だが、千冬に余計な一言を付けて反論した為に出席簿チョップを脳天に喰らうはめとなった。

「ま、このままでは話しは平行線だろう。だから、2人にはクラス代表を賭けて次の月曜に勝負をしてもらう」

腕を組みつつ話を進めてしまう千冬。このことに一夏は頭を抱えそうになった。

こうなると断るのは無理だろう。この状況で千冬がそのことを聞き入れるとは思えなかったし。

本当にどうしようかと一夏が悩んでいた時

「きゃああああ！？」

「な、なに！？」

近くで轟音と共に何かが墜落し、衝撃が教室を襲った。

そのことにクラスメート達は騒がしくなりながらも窓から外を覗き込む。

その先にあつたのはISを纏った誰かが地面に大穴を空けて倒れている光景

そして、その者に近付こうとする者の姿が見える。

ただ、土煙のせいでその者の姿は隠されてしまっていたが。

「え？ なに？ 事故？」

「なんだ、あれは？」

その光景にクラスメート達は騒がしくなり、千冬も覗むかのようにその光景を見つめている。

その時、一夏は見た。土煙の合間から見える、倒れている者に近付こうとする者の姿を。

「くそ！」

「織斑！ どこに行く！」

「織斑君！？」

「一夏！？」

それを見た一夏は机の横に掛けてあつたバックをひったくるように取ると千冬や真耶、篝の呼び止めも聞かずに教室を飛び出していた。

「なんであの人がいるんだ！？」

そんなことを叫びつつ廊下を駆ける一夏。

そう、一夏は確かに見たのだ。フォーゼとなった自分と戦った怪人の姿を

「く、うう……」

一方、ISを纏っている者は苦痛の表情で立ち上がるうとしていた。

水色のショートヘアに同色のドレスのようなISを纏い、少女らしさを見せる綺麗に整った顔立ちをしている少女だ。

彼女の名は更識さらしき 楯無たてなし。IS学園2年生にして生徒会長を務めている。

その彼女がなぜこのようなことになっているのか？ それは今を遡ること数分前

楯無は自分専用のISを調整したので、学園に許可をもらってその試験運用をしていた。

その時にいきなり襲われたのである。衛理華を襲ったのと同じ怪人に。

いきなり怪人に襲われるというアクシデントに驚いたものの、楯無は最初の方こそ怪人と互角以上の戦いを繰り広げた。

ISの能力もあつたが、自他共に認める学園最強の実力は伊達ではなかつたのだ。

しかし、戦つてからしばらくして怪人から違和感を感じるようになる。

最初はそれがなんなのかわからなかつた。だが、戦っている内にその違和感は強まり

ある一撃を受けた時、違和感の正体に気付いて驚愕した。

その時、楯無が考えたのは否定。だって、あり得なかつた。

あの怪人の動きは、そのことに動揺したことで隙が出来た楯無は手痛い一撃を受け、今のような状況になつたのである。

楯無の状況は芳しくなかつた。

ISの残りエネルギーは少ない。先程の一撃で発動した絶対防御というバリアの為だ。

それに怪人を攻撃するのが躊躇われてしまう。ありえないと思うの

にあの動きは

「大丈夫ですか!?!」

そんな時だった。一夏が楯無に駆け寄ったのは。

「あまたは……なんでここに?」

そのことに楯無は驚く。

ある意味有名人な為に一夏のこととは知っていたが、その彼がなぜここにいるのかわからなかったのだ。

一方の一夏はその疑問には答えずに怪人を見据えていた。

楯無が危ない。それをなんとかしたくてここへと来たのだが

「お前は……お前のせいでえ!!」

「おわつと!?!」

いきなり怪人に襲われて慌てて逃げるはめとなった。

(なんか恨まれてる? でも)

怪人の一言が気になったが、バックからフォーゼドライバーを取り出しベルトとして装着して赤いスイッチを全て下ろし

《スリー ツー》

始まるカウントダウン。

その間に一夏は握りしめた左手を胸の前で構え、右手はフォーゼドライバーのレバーを握り

《ワン》

「変身!!」

カウントダウンが終わると同時にかけ声を挙げレバーを入れた。

そして、軽快な音楽と共に現れた頭上のリングに触れるかのように右手を差し伸ばす。

これらの動作は一夏が考えた変身の動作である。

あつた方がかつこいいかもという理由で考えられているが。

「うぐう!?!」

「きゃああ!?!」「な、なに!?!」

それによって起きた衝撃に怪人や教室にいて窓を開けて見ていたクラスメート達は顔を背けるが、楯無や千冬に真耶、箒やセシリア

は確かに見ていた。

一夏の姿が変わっていくところを

やがて、全てが収まると共に一夏はフォーゼへと変身を完了させる。

「なに、あれ……IS、なの？」

その姿に楯無は困惑する。

見ようによつてはISにも思えるが、ISは基本的に全身に纏うようなことはしない。

それ以前にフォーゼのデザインはIS的に無いとは思ったが

「なにあれ？」

「い、一夏？」

「織斑、君？」

クラスメートも困惑する中、箒や真耶に声こそ出さなかったが干冬やセシリアはただ呆然と一夏を見つめていた。

「なんだ、それは!？」

「仮面ライダーフォーゼだ!」

驚く怪人に一夏は答えるが、それと共に楯無の時とは違う違和感を感じる。

気にはなつたが、このままというわけにはいかずにすでに両手を構えていたが。

「仮面ライダー？ ふざけるな!」

「おっと! は!」

「くう!？」

その一夏の返事を聞いて怒りと共に襲いかかる怪人だったが、一夏はその振り回される腕をかくぐって腹部を殴り

「うおおおおおおお!」

「ぐう!？」

「ん？ なんだ？」

そのまま怪人を両手で殴ってから蹴り飛ばす一夏だったが、その直後に昔の電話のベル音が聞こえてくる。

そのことに疑問に思いながらも音のする方へ顔を向けてみると、フォーゼドライバーにある左端にあるスイッチが点滅しながら音を鳴らしていた。

《レーダー・オン》

なんだろうと思いつつそのスイッチのボタンを回すと、左腕に小さなパラボラアンテナが付いたモニターが装着される。

『一夏君、フォーゼになってるみたいだけど、なにかあったの？』

「衛理華さん？ ああ、あいつですよ！」

『あいつ？ って、ええ！？』

そのモニターに衛理華が映し出されて状況を話す一夏。

衛理華は首を傾げるが、怪人の姿が見えたことで驚くはめになった。

「織斑君、誰かと話してるのかな？」

「あ、織斑先生！」

その光景にクラスメートの1人が首を傾げるが、それを見ていた千冬が走り出していた。

そのことに気付いた真耶が追いかけて、箒とセシリアも追いかけてしまふ。

『なんで？ 川岸君はここにいるのに……』

「え？ って、本当だ！？」

衛理華の言葉に一夏は首を傾げるが、モニターに研究室で何かの作業をする川岸の姿を見て驚く。

「そっついえばあいつ……俺を見て驚いてたような」

『あ、川岸君が言ってたスイッチ！？ あれを別の誰かが使ったってことなの？』

そこ一夏は感じた違和感のことに気付き、衛理華もそれを聞くことでそのことを思い出した。

あの時は壊れたものだと思っていたのだが、川岸が変身した怪人がここにいるということは違ったのだらう。

『ともかく、レーダーであいつのデータを送って！ こっちで調べしてみるから！』

「はい！」

衛理華に言われてリーダーを向ける一夏。

そのことで衛理華のパソコンに怪人のデータが送られてくる。

「OK。調べてる間、一夏君はそいつをお願い！」

『わかりました！』

「まさか、あのスイッチを使う人がいたなんて……」

十分なデータが集まった所で指示を出す衛理華。

その彼女に川岸はいたたまれない表情でそんなことを漏らしていた。なお、川岸がここにいるのは、せめてもの罪滅ぼしにとマシンの組立を手伝っているからである。

「今はあいつをなんとかしないと……あれ？　そういえば、一夏君がいる場所って……」

そんな川岸に答えつつ、衛理華はあることを思い出す。

それが凄く嫌な予感を感じさせたが……

「くうう、はっ！」

「おわつと!？」

一方、一夏は怪人と取っ組み合いになっていたが、怪人の方から離れたと思うと光弾を乱射されていた。

それらは地面を転がることで避けたものの、怪人は光弾を乱射し続けていて迂闊に近付けなくなる。

「それならこつちも！」

《ランチャー・オン》

それに対抗しようとして一夏はフォーゼドライバーの右から2番目のスイッチのレバーを動かした。

すると電子音と共に右足に青色のミサイルランチャーが装着される。『一夏君、ランチャーを使う前にリーダーで捕捉して。その方が命中率が上がるから！』

「了解！　ロックオン！」

衛理華の指示に一夏はリーダーを怪人に向け

「いっけえ！」

右足のランチャーのミサイルを全弾発射する。

「きゃあああああ!?!」

「あ……」

「よっしゃ、次はこれだ!」

《チェンソー》

そのミサイルを全弾受けて吹き飛ばす怪人。

その時に出た悲鳴に気付かない一夏はランチャーのスイッチを切ると別のスイッチに交換するが、聞いていた楯無は驚愕していた。

なぜなら、今の声は

《チェンソー・オン》

スイッチを切ったことでランチャーが消えた右足に、交換したスイッチのレバーを上げることで違う物が装着された。

それは青色の……足首から斜め上に伸びるまんまチェンソーだった
が

「おおお!」

「せいやあ!」

「があ!?!」

立ち上がって襲いかかる怪人に一夏は右足を伸ばして高速回転するチェンソーで胸を切り裂き

「でえい!」

「きゃあ!?!」

更に背中への噴射も使って跳び上がり、宙返りをしてかかと落としの要領で怪人を更に切り裂いた。

それによって怪人は悲鳴と共に倒れてしまう。

「なによ、これ……」

「どうした? ん? これは……」

一方、衛理華は怪人のデータを調べていて驚愕する。

川岸も衛理華の様子が気になってデータを見て、同じように驚愕してしまっただが。

なぜなら、怪人は

「よっし、とどめ」

「ちよつと待って！」

「え？」

その頃、チャンスとばかりに怪人とどめを刺そうとする一夏だったが、楯無に呼び止められて顔を向けてしまいう。

一方で楯無は必死の形相をしていた。先程の怪人の悲鳴で確信してしまつたのだ。

あの怪人は

「くう……あああああ！！」

「おわあ！？」

「きやあ！？」

その隙に怪人は立ち上がって光弾を乱射してきて、そのことに一夏と楯無は顔を背けてしまう。

それでも少しして光弾がやみ、2人は顔を向けてみるが 怪人の姿はどこにも無かつた。

『どうかしたの？』

「あ、すみません。逃げられちゃいました」

問い掛ける衛理華に一夏は頭を下げながら謝る。

その一方である時呼び止めてきた楯無のことが気になって、彼女にも顔を向けていたが。

『そう……まあ、しょうがないか。こっちはちよつと困つたことがわかつたんだけど」

「困つたこと？」

『後で話すわ。ところで織斑君。そこ、IS学園よね？』

「え？ そうですけど？」

衛理華の話に首を傾げた一夏は問われたことに答えつつ更に首を傾げる。

それがどうかしたのかと思つたのだが

『誰かに見られてないわよね？』

「……あ」

衛理華の一言で思い出す。フォーゼのことは秘密にしなければならぬことを。

しかし、楯無を助けようと必死になって、そのことをすっかり忘れていたのだ。

「え？つて、千冬姉！？」

「失礼。私はIS学園教員の織斑 千冬だ。これはどういうことなのか説明してもらえるか？」

『……織斑君？』

「ごめんなさい……」

左腕をつかまれたと思つたら、それをしているのが千冬であることに気付いて驚く一夏。

そして、モニター越しに映る千冬を見てジト目になる衛理華に一夏は頭を下げるはめになったが。

「一夏……」

「織斑君……」

そんな一夏を心配そうに見守る篤と真耶。

一方でセシリアは複雑そうな表情で一夏を見ていた。なぜ、そう思うのかはわからないままで

「彼は……それにフォーゼ？ あれっていったい……」

楯無もまた一夏を見つめていた。色々な疑問を交えながら

第3話『学園生活・セツトオン!』（後書き）

というわけで今回のお話はいかがだったでしょうか？

というか、いくら筆が進んだとはいえ、こればかり書いてるのは問題だよなあ^^；

自重しないとダメだよねえ……

さて、次回は千冬達はフォーゼの説明を受けます。

そこで怪人に関して新たな事実が

それと共に楯無は怪人の正体に確信を持ち、その者を止めようと思いますが

そんなわけで次回またお会いしましょう。

第4話『学園生活・テイクオフ!』

その後、授業中でもあったので一旦教室に戻った一夏であったが先の戦いを見ていたクラスメートから昨日とは違う視線を向けられる。

当然フォーゼのことも聞かれたが、詳しく話せないと誤魔化すことにした。

そして放課後。一夏は千冬と真耶、なぜか付いてくる箒とセシリアと楯無と共に衛理華の研究室へ来ていた。

「まったく、緊急事態だったのはしょうがないにしても、やりようがあったでしょうに」

「はあ、すいません……」

衛理華のため息混じりの小言に一夏はすまなそうに頭を下げた。

まあ、緊急事態だったとはいえ人前で変身してしまったのだ。

少なくともIS学園にいた者達にはフォーゼの存在を知られたと見ていい。

幸い、コズミックエナジーのことまで知られた訳では無いので誤魔化すことは可能だが、それもいつまで保つかはわからない。

そのことに衛理華は頭を痛めていた。

「それであれば……フォーゼだったか？ あれはなんなのだ？」

「そういえば、仮面ライダーとか言っていましたね」

「そっちは織斑君が勝手に言ってるだけなんだけど……」

千冬の問い掛けに楯無は意味ありげな視線を向けるが、衛理華は楯無の問い掛けをため息混じりに否定すると共にどう説明したものかと悩んでしまう。

というのも、フォーゼがISとは別物だとは彼女達は気付いている可能性が高い。

そうなるコズミックエナジーのことは秘密のまま説明するのは

難しくなるからだ。

「そうね、ここでのことは他言無用。それで良いのなら話すけど？」

「どういうことですか？」

「今から話す事は場合によっては一夏君を窮地に追い込むかもしれないからよ」

「なんだと？」

話を聞いて首を傾げる真耶に話していた衛理華が答えると千冬が睨み付けてきた。

そのことに疑問に衛理華は思うが、すぐにあることに気付く。

「そういえば、あなたも織斑だったわよね？　ということは」

「一夏は私の弟だ」

「なるほど」

千冬の返事に問い掛けた衛理華は納得する。

となれば、全てを秘密にしたままでとはいかないだろう。

千冬は一夏^弟を大事にしてるのだろうから

「それじゃあ、さつきも言ったように他言無用でお願いするわ。フ

オーゼとは」

そのことに頭を痛めながらもフォーゼやコズミックエナジーのことを話し始める衛理華。

千冬達は真剣な眼差しで聞いているが、話を聞く内にみると驚愕の表情へと変わっていった。

「馬鹿な……そんなエネルギーはありえん！」

「まあ、普通はそうよね。でも、実際に存在した。フォーゼはその証拠よ。」

そして、そのフォーゼを使えるのは今のところ織斑君だけね」

「どういうことなんですか？」

「コズミックエナジーは採取出来る量はわずかな上にその力も小さいのよ。」

実用レベルで使うためには活性化させるしかないのだけど、織斑君はそれが出るわ。」

といつても、どのように行われてるかまではわからないんだけど」

怒鳴る千冬に肩をすくめながら答える衛理華。

その話に真耶が首を傾げるが、衛理華はそれにも肩をすくめながら答える。

しかし、聞いていた千冬達の目はジト目になっていたが。

「わかっていないとは？」

「言葉通りよ。コズミックエナジーに関してはまだわかっていない所もあって……というか、そっちの方が多いんだけど」

「な！？ そんなの使つて大丈夫なのか！？」

「人体に影響が無いのは確認済みよ。少なくともフォーゼに使われているのはね」

「え？ それつてどういうことなんですか？」

「そっちに関しては後で話すわ」

セシリアの問い掛けに衛理華は肩をすくめながら答えると筈がうるたえるが、それにはため息混じりに答えた。

そのことに一夏は疑問に思うものの、後で全てを話すために今は割愛したが。

「それで一夏にこんな物を持たせ、あんな奴と戦わせようとしているのか？」

「そのことに関しては否定させてもらうわ。

さつきも話したけど、おじいさまはコズミックエナジーを研究することでも何らかの災い起きると予見してフォーゼを作ったの。

けど、あんな奴らが現れるかどうかまで予見してたかは今となっては確かめようが無いけどね」

「え？ なぜです？」

「去年に……ね」

「あ……」

睨んでくる千冬に衛理華は瞳を閉じながら答えた。

そのことに真耶は疑問に思うが衛理華の一言に察してしまい、しまったという顔をしてしまつた。

「ま、おじいさまはもしかしたら考えていたかもしれないけど、私
はあんな奴が現れるとは思ってもいなかった。」

それだけは言わせてもらおうわ」

「じゃあ、なぜ一夏は戦っているんだ？」

「ん……最初は私も襲われてね。」

その時に居合わせた織斑君がフォーゼドライバーを起動出来たから、
なんとかしてもらおうと思ったのは否定しない。

でも、IS学園に現れたのと戦ったのは織斑君の意志よ。

私は研究の手伝いはしてもらおうとは思ってるけど、それ以上のこ
とを強要するつもりは無いわ」

「まあ、俺もあの時はなんとかしたかったしな」

箒の問い掛けに衛理華が答えると一夏も同意するようにならずく。
この時、衛理華を除くこの場にいた全員が見入っていた。一夏の真
剣な眼差しに。

「ともかく、織斑君にフォーゼドライバーを渡したのは今後の研究
の為に答えさせてもらおうわ」

「む……しかし、こんな物がISを超えるかもしれない物とは」

衛理華の言葉に箒は納得いかないものの、気になってフォーゼド
ライバーを持ち

「え？」 「な、なに？」

フォーゼドライバーが低い唸り音を出したことに衛理華と共に驚
くはめとなった。

「こ、これはいつたい」

「ちょっと待って。コズミックエナジーが活性化してる……活性化
レベルが低すぎてフォーゼドライバーは使えないけど」

うるたえる箒をなだめ、モニターに映るデータを確認する衛理華。
そのモニターには箒が持つことによってフォーゼドライバー内のコ
ズミックエナジーが活性化されているデータが映し出されていた。

「人が持つ何か要素になってるのかしら？ 悪いんだけど、あな
達もフォーゼドライバーを持つてくれない？」

そのことを確認するために指示を出す衛理華。

千冬達は戸惑いを見せるが、言われたとおりフォーゼドライバーを持ってみる。結果は全員筭と同じようなことが起きた。

ただ、活性化のレベルは個人差があり、筭が一番高く次いで千冬、セシリア、楯無、真耶の順となっている。

もともと、一番高い筭でも一夏と比べたら低すぎる物ではあったのだが。

「ISが関係してるのかしら？　ここの辺のデータも取るべきかしらね？」

「ん、どうかしたのか？」

「ああ、ちよつとね。それでマシンの方は？」

「組立は終わったよ。後は調整を終えれば、いつでも動かせる」

「マツシグラーに乗れるんですか！」

「織斑君、あなた免許無いでしょうが」

その結果に衛理華はあごに手をやりながら考えていると川岸がやってきて、そのことに首を傾げていた。

そのことは誤魔化しつつ問い掛ける衛理華に川岸は笑顔で答える。

話しを聞いていた一夏は期待の眼差しを向けるものの、衛理華はやんわりと断っておいたが。

「マツシグラー？」

「その名前は織斑君が勝手に付けたただけなんだけど……まあ、簡単に言うとフォーゼをアシストするためのマシンよ。」

バイクともう1台あって、そっちは多目的車両かしらね？　研究も

兼ねたもしもの場合に備えて組み立ててるわ」

「もしもの為とは？」

首を傾げる楯無に苦笑混じりにそのことは否定しつつ説明する衛理華。

しかし、それを聞いた千冬の目つきが鋭い物へと変わったが。

「そうね。これは織斑君にも話そうと思っていたことだから

まず、IS学園で織斑君が戦った相手だけど、中身は間違い無く人

問よ」

「ええ！？ に、人間！？」

「なぜ、そうだと言えるのですか？」

衛理華の説明に真耶が驚く中、楯無が疑惑の眼差しを向ける。

しかし、内心としてはあつて欲しくないことだった。もし、それが本当ならば、あの怪人の正体は

それに対し、衛理華はため息を吐いていたが。

「理由は2つ。1つはあの時に織斑君にあいつのデータを送ってもらつて調べただけ……」

あいつの体の構成はフォーゼとほぼ一緒だということがわかったの

「フォーゼと一緒に？ て、それって」

「そう、あいつの体はコズミックエナジーよつて作られた物よ」

「……な！？」「」「」

説明を聞いてそのことに思い当たる一夏に説明していた衛理華はうなづく。

それを聞いた川岸を除く全員が驚いていたが。

「まあ、コズミックエナジーは大雑把に言えばどこにでもあるエネルギーだから、私やおじいさま以外の誰かが見つけていてもおかしくはない。

問題なのは、そいつがどんな風に使つか保証が出来ないことね」

「それで……もう1つの理由とは？」

「前例があるからよ」

話を聞いて困惑するセシリアの問い掛けにため息混じりに説明していた衛理華は静かに答える。

それと共に川岸はうつむいてしまったが。

「前例とはもしや」

「ああ、俺だ……変な奴にそそのかされて、変なスイッチを持たされてね。

気が付いたら、君達が見たあの姿になって彼女を襲っていたんだ」

「それは済んだことだし川岸君も反省してるようだからいいんだけ

ど。ただ、その時にスイッチを落としたりしくてそのスイッチを誰かが拾ったのか、もしくは川岸君に渡した変な奴が回収して他の誰かに渡したのかはわからないけど。

けど、間違い無くそのスイッチを誰かが使ってIS学園でのことをしでかしたのは間違い無いわね」

睨んでくる千冬に川岸はすまなそうに答える。

衛理華は気にした様子も無く答えていたが、その一方で楯無の瞳は揺れていた。

今の話で楯無には怪人が誰なのか確信を持ち、その上自分を襲った理由にも心当たりがあつたからだ。

「でも、いったい誰があんなことを？」

「さあね。でも、どのみち止めなきゃならないわ。

フォーゼでは安全性は確認してるけど、あいつが使ったスイッチがどうなるかは調べてみなければなんとも言えないもの」

「しかし、どうやって止めるのです？」

「倒すしかないわね」

「倒すって……大丈夫なんですか？」

セシリアの問い掛けに衛理華は肩をすくめながら答え、箒の問いかけにはあつさりと答える。

そのことに楯無が体を震わせるが、真耶はそのことに気付かずに恐る恐る問い掛けた。

「川岸君の時もそうだったから、たぶん大丈夫だとは思っわ。

まあ、本当は話し合いで解決するのが一番なんでしょうけどね」

それに対して衛理華はため息混じりに答えつつも内心はそれが難しいと考えていた。

川岸の時も正気を失っていたとしか思えないような行動を取っていたのだ。

IS学園に現れた怪人もその可能性があるが、それを言えば不安がらせるだけなのであえて言わなかった。

一方、楯無がうつむきながらも思い詰めた表情をしていることに一

夏だけが気付いていたが。

「でも、そういうのって警察のお仕事じゃないんですか？」

「それは無理ね」

「え？ なぜです？」

恐る恐る自分の意見を言ってみる真耶だが、衛理華の返事に首を傾げる。

普通は警察がこういうのに対処するのではと思ったのだが

「怪しい奴が出た。だから、なんとかしてください。じゃ、警察はまともに動かないでしょうね。」

例え動いたとしてもISとも戦える奴に警察が相手出来ると思う？」

「あ……」

衛理華の指摘に真耶はそうだとばかりに目を見開く。

確かに話しだけを聞けば怪しいことこの上ないので警察がまともに取り合うか怪しい。

一応、IS学園内で起きたこともあって映像を残すことは出来ているので警察を動かす材料にはなるだろう。

しかし、怪人はISと戦えるだけの力がある。その怪人を相手にするのは警察では厳しいとしか言いようがない。

「それにISで相手するのも難しいでしょうしね」

「なぜですか？」

「アラスカ条約か」

衛理華の言葉にセシリアは疑問に思うが、千冬がそのことに思い当たる。

アラスカ条約とはIS運用協定とも言うのだが、IS技術を独占的に保有していた日本への情報開示とその共有を定めた協定を指す。

また、軍事転用可能なISの取引などを規制する為の条約とも言える。

ちなみにIS学園はこの協定の元に設置されているのだが、詳しい説明は機会があった時にしよう。

ともかく、この条約によりISで怪人と戦闘を行った場合、軍事転

用と見なされる可能性があった。

そうなると色々と不都合なことが起きかねないし、許可を取るにしてもやはり色々と面倒になる。

「ま、今回は織斑君にがんばってもらうしかないわね」

「しかし」

「もちろん、私達も何もしいってわけじゃないわ。

けど、さっきも話した通り、あいつと今戦えるのは織斑君だけなの」

その一言を聞いて反論しようとした筈だったが、話していた衛理華はため息混じりに答えた。

衛理華とて一夏にこんなことをさせたくはない。

しかし、怪人との戦闘を考えると今現在制約を受けていないフォーゼしかないのだ。

そして、そのフォーゼを使えるのは一夏のみ。他に手が無いわけではないが、すぐに動けるのはそうなってしまう。

この事実^第に千冬は両手を握りしめていた。一夏を守るために色々としてきた。

しかし、今は一夏を戦いに送り出さなければならなくなるかもしれない。その事実を千冬としては認められるものでは無かったが、理屈では

そうしなければならぬとわかる故に思い悩んでしまう。

「どっちにしろ、対策は必要になるわ。それをどうするべきかなんだけど」

「あら？ そついえば楯無さんは？」

そのことを話そうとする衛理華だったが、それを遮る形で真耶がそんなことを言い出す。

確かに楯無の姿が無い。そのことに誰もが疑問に思うが

「く！」

「一夏！」

先程の楯無の表情を思い出した一夏は千冬の静止も聞かずにフォーゼドライバーを持って走り去ってしまう。

「どうしたんでしょうか？」

「何かに気付いたのかもしれない。追いかけるぞ！」

そのことに真耶は疑問に思うが、千冬はただならぬことが起きていると感じて追いかけることにした。

そのことに真耶だけでなく冨とセシリアも戸惑いながらもその後を追う。

「私も行くわ。気になることもあるしね。川岸君はマシンの調整を簡単でもいいからお願い」

「構わないが、いいのか？」

「どうも嫌な予感がするのよね。もしかしたら、マシンが必要になるかもしれないわ」

「わかった。大急ぎでやるよ」

アタツシケースのようなモバイルPCを手にする衛理華の話に最初は困惑していた川岸はうなずく。

それを見た衛理華は急ぎ千冬達の後を追うのだった。

一方、楯無はIS学園に戻っていた。

衛理華の所で話していたことで持ってしまった確信。

状況証拠しかない故に否定したかった。でも、ほぼ間違い無いだろうとも思っている。

だからこそ、自分が止めようとしてここへと戻ってきたのだ。

「あ………」

「あなたは」

そこで楯無は1人の少女と出くわした。

背中に掛かる長さの栗色の髪を左右に一房ずつ結び上げ、おっとりとした垂れ目がちの可愛らしく整った顔立ち。

しかし、今は不安そうな顔で何かを探すかのように辺りを見回していたが。

この袖の長いIS学園の制服を着た少女の名前は布のほとけ本ほんね音。

楯無とは幼馴染みであり、一夏のクラスメートでもある。

「あ、あの…… かんちゃんがどこに行ったかわかりませんか？」

「あ、えっと…… いない、の？」

「うん…… なんか、今日一日学校に来てなかったみたいなの……」
不安そうに問い掛ける本音の言葉に楯無はピクリと反応してしま
う。

それでも一縷の望みを掛けて問い掛けるが、本音の返事に絶望へと
落とされてしまった。

やはり、あの時の怪人は……

「そう…… 私の方でも探してみるから、何かわかったら」

「あなたに何がわかるのかしら？」

それでもなんとか笑顔を作って答えようとする楯無だったが、聞
こえてきた声に本音と共に顔を向けてしまう。

そこにいたのは楯無を少し幼くしたようなメガネを掛けた少女が1
人、無表情で立っていた。

更識さいきし 簪かんざし。名前でわかるとおり、楯無の妹である。

「あ、朝のあれは…… あなた…… なの？」

「え？」

「そうだと言ったら、姉さんはどうするのかしら？」

問い掛ける楯無に本音は思わず顔を向ける。

朝のあれと言われて思い出すのは楯無が怪人に襲われた時のこと。

本音はまさかと思いたかった。それは楯無も同じだ。

だが、それを裏切るかのように簪はくすりと笑みを浮かべる。

「なんで？ なんで、あんなことしたの？」

「決まっているわ。私が姉さんを超えたという証明をする為よ」

何があったのかを察し、それでも疑問が消えずに悲しそうな顔で
問い掛ける本音に簪はどこか壊れた笑みを浮かべながら答える。

そのことで楯無は全てを察した。同時に自分の責任だとも

楯無は簪がどこへ行っても『楯無の妹』としか見てもらえないという
状況に憤っていたことに気付いてはいた。

楯無もその状況はなんとかしたかった。しかし、家や周りの事情で安易に手を出すことが出来ない。

それ以前に自分が手を出すことを簪は嫌うだろうから言い訳にしかならないのはわかっている。

でも、その理由で機会があったらと後回しにしていたツケがここに来たのだとも楯無は理解していた。

「どうです、姉さん？ 無様に負けた気持ちは？」

「かんちゃん……」

「て、いたあ！」

「え？ おりむー？」

壊れたような笑みを浮かべる簪。楯無はその言葉に何も言えなかった。

悔しいからではない。掛ける言葉がわからないのだ。何を言ってもダメなような気がして。

一方で簪を心配そうに見守る本音であったが、一夏が駆け寄って来たことと思わず顔を向けてしまう。

「良かった。無事だったんだ」

「あなたは！」

「は？ え？ あ、あれ？ さら、しき、さん？」

駆け寄って来た一夏は楯無が無事なことにほっとするが、彼を見て怒りの形相になった簪を見て戸惑った。

楯無と簪が似ていたのもあるが、なぜ怒りの形相を向けられるのがわからなかったこともある。

その間に衛理華や千冬達も楯無達の元へ駆け寄っていた。

「あなたのせいで……あなたのせいでえ！」

「え？ あ、あの人誰？ ていうか、俺、あの人になんかしたっけ？」

「彼女は私の妹の簪……怒っているのは……たぶん、ISのことだと思っ」

「へ？」

怒りの形相の簪に戸惑う一夏だが、楯無の説明に首を傾げる。

というのもまったく身に覚えの無いことだったからだ。

「言っただけだったが、お前には専用機が用意されることになっていないんだ。」

初の男性IS操縦者として様々なデータを取る意味でな」

「けど、そのせいであの子の専用機となるはずだったISの製作が後回しにされてしまったの」

「え、そうなの？」

千冬や楯無の初めて聞く話に一夏は顔を引きつらせる。

自分が悪いのかと思っただけだったが、一夏が悪いのかと言えば微妙な所だ。

警の専用ISの開発が後回しにされた要因が一夏にあるのは否定出来ない。

しかし、それは一夏が全く知らない所で話が進んでいたのだから、彼だけを責めるのも酷というものだろう。

「でも、もうISなんて必要無い！ 私は、私は力をもらえたんだから！」

先程とは打って変わって壊れた笑みを浮かべる簪は懐からある物を取り出す。

それは表面に異様な銀装飾が施された黒い円柱系の物で上部には銀の半円があり、その頂点に赤いスイッチがあった。

見ようによつては少しいびつなチェスの駒の1つであるポーンに見えるかもしれない。

《ラスト・ワン》

しかし、そのスイッチが電子音と共に闇としか言いようのない何かを発したかと思うと、その形を一変させていた。

基本的な所は変わって無いが表面に無数のトゲが現れ、銀の半円も眼球のような模様へと変わっている。

赤いスイッチも頂点から斜めの位置に変わっており、見ようによつては人の目にも見えた。

「あれが川岸君やあなたをあんな姿に変えたスイッチ……やめなさい！」

それがどんな物かわかってないのよ！ ていうか、今絶対ヤバイ変化したって!？」

それを見て衛理華は叫ぶが、最後の方は悲鳴に近かった。

確かに見た目的にも危険に見える故に衛理華の反応も当たり前とも言える。

声こそ出さなかったが真耶は明らかに怯えていたのだし。

「うるさい！ 私は、私は姉さんを、ISを超えるんだ！」

しかし、簪は忠告を拒否するとスイッチを押し

「う」

「簪ちゃん!？」 「かんちゃん!？」

体中にクモの糸のような物がびっしりと巻き付いて気を失って倒れ、そのことに楯無と本音が思わず悲鳴を上げた。

その光景を見ていた者達も驚く中、変化は終わっていない。

簪が押したスイッチが宙に浮いたかと思うと怪人の姿となった。

しかも、右手には両刃ののこぎりのような剣を持ち、左腕には盾が装着されている。

「まったく、嫌な予感的中ね。織斑君、お願い出来る?」

「ええ……あのままじゃダメでしょうしね」

顔をしかめる衛理華の言葉に一夏はうなずきながらフォーゼドライバーを取り出す。

詳しいことまではわからなかったが、簪に深い事情があったことはわかった。

かといって他人を傷付けていい理由にはならない。

それを止めるために一夏はフォーゼドライバーを装着する。

「一夏、あいつは力に溺れて見失っている。一発ぶん殴ってやれ！」

「それはどうかと思うけど、わかった！」

千冬の言葉に苦笑しつつも一夏は離れると赤いスイッチを全て下ろし

《スリー ツー ワン》

「変身！」

カウントダウンが終わると共にレバーを動かし、現れたリング状の装置に触れるかのように右手を伸ばす。

その時に起きた衝撃に衛理華達は顔を両腕で覆いながらも、その光景を見逃さないと視線を外さなかった。

「よっしゃ！」

やがて、フォーゼへと変身した一夏は右腕を振り落とし、構えてから怪人へと駆けだした。

それと共に衛理華は持っていたモバイルPCを広げ、キーボードの端にボールペンの頭のような黒いスイッチを差し込むとモニターの上にあつた小型カメラを怪人へと向ける。

「それは？」

「カメラスイッチ。レーダー程じゃないけど、サーチシステムを搭載してるの。」

ま、織斑君がいなかったら単体で使うことは出来ないんだけどね」

箒の問い掛けに答えつつ、衛理華は映し出した怪人の解析を始めた。

どうにも嫌な予感がするのだ。それを確かめるべく解析しようとしたのである。

「ふん！」

「ぐう！？ く、こいつ前より強くなってる！」

一方で一夏は苦戦を強いられていた。

怪人が武器を持っているのもあるが、前よりも頑丈な上に力も強くなっていたのだ。

今も怪人の左腕の一振りで突き飛ばされそうになっている。

「これだ！ この力だ！ この力があれば、私はなんだって出来る！」

「だからって！ 何をしてもいいわけないだろ！」

「うるさい！ じゃあ、お前はなんだ！ その力はなんの為に使っ

ている！」

止めようとする一夏の言葉に、最初は喜んでいた怪人は怒りだして反論してきた。

この時、怪人は 簪は一夏が自分と同じ理由でフォーゼになっていると思っていたのだ。

だが

「俺は昔、仮面ライダーに助けられた！ だから、仮面ライダーになろうと思った！俺が目指す仮面ライダーに！」

「くー！」

一夏は叫びながら怪人を殴る。

実を言えば、都市伝説程度にしか仮面ライダーのことは知らない。

それでも一夏は自分を助けてくれた一也の話を聞くことで憧れたのだ。

だから、目指した。自分が思い描く仮面ライダーに。

その彼の言葉に怪人は 簪は思わずたじろいだ。一夏の今の言葉が強く心に響いた気がして。

それは衛理華以外の全員も同じで、思わず一夏に見入ってしまう。

「まずいわね……」

しかし、一方で衛理華は顔をしかめる。

当たって欲しくなかった嫌な予感的中してしまった為だ。いや、状況はそれよりも最悪だった。

「ん？ どうしたんだ？」

「マシンを発進させるわ。準備して」

「え？ し、しかし、まだ調整が」

「時間が無いの！ぶっつけ本番は私だって嫌だけど、今は必要なのよー！」

「わ、わかった！」

その為の対処をするべく川岸と通信をするのだが、そのやりとりで大声を出した為に千冬達は気になって顔を向けてしまう。

その間に衛理華はあること一夏と通信するべくモバイルPCを操

衛理華の通信にうなずいてから一夏は怪人へと向かう。

その一方で衛理華は必死にモバイルPCを操作していた。

「本当にそんな方法があるのですか？」

「ほとんど賭けだけど、今はそれに頼るしかないわ」

「そんな!？」

箒の問い掛けに衛理華は操作を続けながら答えるが、それを聞いたセシリアは思わず顔を強ばらせた。

だが、無理もない。下手をすればIS学園に大きな被害をもたらすかもしれないのに、賭けに頼るなんてのは無謀以外にしか思えなかつたのだ。

「そ、そうだ。ISを使つて」

「無理だな。あれを拘束出来ればいいが、その装備があるISは学園には無い。」

装備を用意するにしても時間がかかるし、上空に連れていくにしても操縦者が危険にさらされる」

その方法を思いつく真耶だったが千冬によって却下された。

千冬が言ったとおり、拘束する為の装備に時間が掛かりすぎるのが大きい。

それにISで怪人を運ぶにしても密着、もしくはかなり接近することになる。

運んでいる最中に攻撃を受ければ、そのIS操縦者が危険であった。時間があれば方法はあったかもしれないが、今は衛理華が言う方法に頼るしかない。

「うおお!？」

そんな中、一夏は怪人と一進一退の攻防を繰り返していた。

わずかに押され気味になるものの、なんとか蹴り飛ばして距離を空ける。

そんな時、エンジン音らしき物が聞こえてくる。

「ん? あれつて」

それに顔を向ける一夏が見た物はまるでスペースシャトルのよう

なフォルムを持つオンロードバイク

一夏命名のマシン、マツシグラー。そして、バギーのような形で走ってくるパワーダイザーだった。

「来たわね。織斑君、ランチャーをオンしたらロックオンして。」

その後に合図するから、したらあいつにランチャーを撃って、すぐにマシンに乗り込んで!」

『は、はい!』

《ランチャー・オン》

《タワーモード　マシンセット》

衛理華に言われ、うなずきながらランチャースイッチを入れて左腕のパラボラアンテナを向ける一夏。

指示を出した衛理華もモバイルPCを操作し、パワーダイザーを平べったい土台のような形へと変形させる。

その変形直後、マツシグラーがパワーダイザーの上にセットされた。

「今よ!」

「いつけえ!」

そして、衛理華のかけ声と共に一夏の右足に装着されたランチャー

ーから数発のミサイルが発射され

「きゃああああああああああ!?!」

「よつと」

発射されたミサイルは衛理華の誘導によって順番があるかのようになり、怪人を上空へと撃ち上げた。

その間に一夏はランチャーを解除し、マツシグラーへと乗り込む。

それと共に気分が高揚してきた。なにしろ、待ち望んでいたマシンに乗れたのだから。

「なけなしのミサイル、全弾持っていきなさい!」

「おわあ!?!」

「きゃああ!?!」

衛理華も操作を続けパワーダイザーの左右の後輪パーツからミサイルランチャーを出し、いくつものミサイルを発射させる。

「おりゃ！」

一方、一夏はマツシグラーの噴射を止めると怪人は突き飛ばされたかのように離れていく。

その直後に一夏はマツシグラーから跳び上がり

《ロケット・ドリル・オン》

ロケットとドリルのスイッチを入れて右腕にロケットを左足にドリルを装着し

《ロケット・ドリル・レーダー・リミットブレイク》

フォーゼドライバーのレバーを入れ、ドリルが付いた左足を突き出し

「ライダーロケットドリル宇宙キック！！」

「きゃああああああああああああああああ！！？」

ロケットの噴射で突っ込み、高速回転するドリルで怪人の胸を砕き貫いた。

それによって大爆発を起こす怪人。その間に一夏はロケットとドリルを解除し、振り向いて飛んできた物を受け止める。

それは簷が持っていたスイッチであり、それを見た一夏は別の方向へと顔を向ける。

そこに広がるのは漆黒の闇とその中できらめく星々

「は、はは、ははは……宇宙にキターー！！」

そのことに一夏は両手足を広げて喜んでいた。

地上では味わえない浮遊感。それが一夏に宇宙に来たのだと実感させていた。

「織斑君、喜んでますね」

「ああ、予想外だったとはいえ、目標だった宇宙に行けたんだからな」

そんな一夏の様子に嬉しそうな真耶の言葉に千冬も笑みもを漏らす。

「一夏……」

「おりむー……」

箒や本音も一夏の様子に嬉しそうな顔をしていた。一方でセシリアと楯無は真剣な眼差しを向けている。

セシリアは無謀だと思われたことを成し遂げた一夏のことを考えながら。

楯無は妹がどうなるのかという不安を含めながら。

「あゝ、織斑君。喜んでるところ悪いんだけど……落ちるわよ?」

「……………」

が、衛理華の一言に誰もが理解出来ずに呆然として

「て、うわあああああ!?!」

一夏は本当に落ちてしまう。

「な、なんでですかあ!?!」

「大気圏を出たといつても、まだ衛星軌道内だもの。何もしなければ地球の引力に引かれて落ちるわね」

「落ち着いてる場合じゃ無いですよ。おりむーが燃えちゃう」

「大気圏脱出の時も大丈夫なら燃えちゃうことは無いでしょ」

「……………」

混乱する真耶に衛理華はあくまで冷静に答えていた。額に汗は浮かんでたけど。

それでも珍しく慌てる本音の疑問にも衛理華は冷静に答えていたが周りはそうはいかず、千冬と箒に至っては絶叫している。

『なんか無いのか!?! なんか!?!』

「はいはい落ち着いて。織斑君、レーダースイッチを7番のと交換しなさい」

慌てる一夏。大気圏に突入して激しく燃えているが、どうやらそちらの影響は無いようだった。

そんな中、通信越しに衛理華はアドバイスをし

「7番つて、こいつか!」

《パラシュート》

慌てながらもレーダーのスイッチを言われたスイッチと交換し

《パラシュート・オン》

「うおお!？」

アンテナが消えた左腕に何か装着されたかと思うと共に何か飛び出す。

それは3つのパラシュートで、一夏の落下速度を急激に落とすのだった。

「もぉ〜……ビックリさせないでよ、おりむー」

「まったくだ!」

そのことをデータで知った本音は頬を膨らまし、筈も機嫌が悪そうにしている。

その背後では千冬達が皆一様にほっとしていたりするが。

「やれやれ……でも」

衛理華も無事に終わったことにほっとしつつ、疑問の眼差しをモバイルPCに向け

「大気圏突破したのにほぼダメージ無し。しかも、燃料は3割しか使っていないって……どうということよ」

映し出されているデータに頭を抱えていた。

マッシグラーとパワーダイザーが行ったのは緊急跳躍システムという物だ。

簡単に言つとマッシグラーの搭乗者を目的地へ文字通り跳ばす為のシステムである。

緊急で目的地に向かうために造られたシステムで、衛理華はそれを利用して怪人を上空へと打ち上げようとしたのだ。

そして、それは上手く行った。上手く行ったが……行きすぎてしまう。

衛理華の考えではマッシグラーの燃料いっぱいまで2万m近くまで打ち上げることが出来ると思っていた。

しかし、結果はそれを大きく上回って大気圏を脱出させてしまうというもの。

更にその際に起きる衝撃などを受けているにも関わらず、マッシグラーにダメージはほとんど無し。

それどころか燃料もかなり余裕があり、今は噴射飛行でこちらに戻ってきている最中のはずだ。

衛理華にしてみればあまりにも予想外。そのせいか冷静でいられたが

「まさか、これもコズミックエナジーによるもののかしら？」
思わず、そんな疑問が出てしまうのだった。

しばらくして、一夏は背中中の噴射機構も使ってIS学園に戻ってきていた。

「さてと、織斑君。そのスイッチを切ってみて」

「あ、はい」

衛理華に言われ、フォーゼのままの一夏は簪が持っていたスイッチを押してみる。

するとスイッチは黒い渦のような物に飲み込まれる形で消えてしま
い

「あ、うん……」

「かんちゃん」

「簪ちゃん」

それと共に簪が目を覚まし、本音と楯無は嬉しそうな顔をした。

「スイッチを切ったからかしら？ スwitchの方を調べる事が出来れば良かったんだけど……仕方が無いか」

このことにあごに手をやりながら衛理華は複雑そうな顔で考える。スイッチが消えて調べることが出来なくて残念と思う一方、人の命が関わっているだけに良かったと思ってもいたからだ。

「え？ あ、ああ……」

一方、簪は辺りを見回してから事態を理解したらしく、怯えた様子を見せていたが

「あ……」

不意に楯無に抱きしめられていた。

「ごめんね……わかっていたのに……何も出来なくて……ごめん、ね……」

その楯無は涙を流しながら簪を抱きしめていた。

簪の状況がわかっていたのに何もしなかった自分。その自分がこの事態を起こしてしまったのだから。

だから、謝罪なんて出来る立場で無いことは理解してる。それでも謝りたかったのだ。

「お姉……ちゃん……」

その簪も恐る恐る楯無を抱きしめ、安心からか涙を流していた。

「2人とも良かった」

「これで一件落着ですね」

「そうでもないわね」

その様子に喜ぶ本音と真耶。しかし、衛理華はため息混じりにそれを否定した。

「なぜですか？」

「簪さんだったわね？ あなたさっき、スイッチをもらったようなことを言ってたかった？」

「え、ええ……マントとフードで全身を隠した人から……」

そのことにセシリアは疑問に思うが、衛理華はそれに答えるかのように問い掛ける。

その問い掛けに簪は困惑気味に答えるが、それを聞いた衛理華は再びため息を吐いていた。

「あの、もしかして」

「川岸君の時と同じね。目的はわからないけど、スイッチを渡してる奴がいる。」

そっとう奴がいるってことは同じことが起きるかもしれないわ」

「ま、まさか……」

「ありえない話じゃないわ。第一、そいつが持つてるスイッチが1つだけとは限らないもの」

その返事を聞いて困惑する一夏に衛理華は頭痛を感じながら答え

る。

そのことに真耶は否定しようとしたが、衛理華はため息混じりに言い返していた。

その一言に場に重い雰囲気は漂ってしまふ。

「だったら、なんとかかしないといけないよな」

変身を解きながら言い放つ一夏。

その目は真剣そのものであり、衛理華以外の誰もがその表情に見入っていた。

「確かに、そうなんだけど……ねえ……」

「どうかしたのですの？」

が、なぜか衛理華は深いため息を吐く。

彼女も言った手前、なんとかしなければならぬのはわかっているのだ。

その衛理華の反応に誰もが疑問に思い、セシリアが代表する形で問い掛けたのだが

「お金がね、無いのよ」

「……………は？」

衛理華の一言に誰もが呆然としてしまふ。

衛理華はとうとうつむきながら盛大にため息を吐き

「正確には研究予算なんだけど、マツシグラーとパワーデザイナー完成させるのに使い切っちゃって……」

「なんでそんなことを？」

「織斑君が来るまで研究成果なんてあつて無かつたような状態だったから、研究予算が削りに削られちゃってね。」

それにさっきは研究用ともしもの場合に備えてって言ったけど、どちらかという和研究用の意味合いの方が強かつたのよ。

わかる形で研究成果を見せて、それで予算の追加申請をするつもりだったの」

「だったら、大丈夫じゃないんですか？」

「申請したからってすぐにもらえる訳じゃないし、もらえたとして

も雀の涙位の物でしょうしね。

マシンの整備とか考えたらすぐに無くなっちゃうと思っわ」

話を聞いて疑問に思った千冬が問い掛けると衛理華は落ち込んだ様子で答え、それを聞いた真耶はそう思うものの衛理華は更に落ち込みながら答えた。

衛理華としても今回の事が早々起こるとは考えていなかったのだ。見積もりが甘かったのは否定出来ないが、衛理華もこういつた事態がすぐに起こると考えていなかったのもある意味仕方が無い。なにしろ、非常識なのだ。人が怪人になって襲うという事態は。ちなみにパワーダイザーからミサイルを撃つ際に衛理華が言っていたなけなしとはそのままの意味で、パワーダイザー用のミサイルは撃ってしまった数しかないのである。

「それじゃあ、どうするんですか？」

「どうしようかしらねえ」

「なら、いい方法がありませんわよ」

一夏の問い掛けに悩む衛理華。

そんな時に聞こえた声に誰もが振り向くと、その先には立ち上がった閉じた扇子を持ちつつ不敵な笑みを浮かべる楯無がいた。

この時、簪は思った。いつもの姉だと。同時にその姿に安心感を感じているのだった。

それから数日後

「私はなんでここににいるのかしら？」

衛理華はなぜか自問していた。

というのも今いるのがいつもの大学の研究室では無く、IS学園内にある倉庫の1つなのだから。

ただ、IS学園内ということもあってか中々立派な造りの倉庫であり、大学の研究室よりも良い環境だったりする。

そして、その倉庫内に衛理華が大学の研究室で使っていた物の全て

がそろっていた。

余談だが、機材の搬入に一夏達は手伝っていたりする。

「あら、当然の措置かと思われますわよ？」

そう言っただけで現れたのは閉じた扇子を口元に当てる楯無。その横には簪と本音にもう1人の姿もある。

茶色がかった長い髪を結び上げてポニーテールのようにし、メガネを掛けた可愛らしく整った顔立ちはどこか本音に似ている。

彼女の名は布のほとけ虚うつほ。IS学園3年生であり、本音の姉でもあり、生徒会会計でもあったりする。

「コズミックエナジーの性質を考えれば、その存在を知った者達によつて大きな争いが起きかねない。

そうなれば、コズミックエナジーの大きな力を引き出せる織斑君に危険が及ぶ可能性もあります。

そうさせない為にも抑止力を含めた研究は不可欠。その為にここに来てもらったのです。

表向きはISに関する研究の一環としておりますので、余程のことがない限りは大きな干渉は無いでしょう。

それに資金の方も私達更識家から提供いたしますしね」

「それはありがたいんだけど……あれは何？」

楯無の説明に一応の納得はしつつも衛理華は呆れた様子である方へと指を差した。

その先にあるのは大きな垂れ幕。一夏に箒、セシリアや千冬に真耶も見ている垂れ幕にはフォーゼの顔が大きく描かれている。

その顔の左側には仮面ライダー部と書かれ、顔の下にはKRCと大きな文字が書かれていたが。

「見ての通り、仮面ライダー部です」

「いや、それだけでは何がなんだかかわからんぞ」

笑顔で答える楯無だが、千冬が鋭いツツコミを入れる。

まあ、千冬という言葉通りであり、衛理華も同意するようにうなずいている。

「いわゆるカモフラージュですね。」

表向きは都市伝説となっている仮面ライダーに関する研究などをする部活としています。

まあ、フォーゼとして活動する為の言い訳ですが。

それと星野先生は研究の為だけにここにいるというのも問題ですの
で、それを避けるためにこの部の顧問となっていたいただきます」

「大丈夫なのかしら、それ？」

「むろん、ちゃんとした対策はいたしますが、それには少々時間が掛かります。」

今回の事はその時間稼ぎとと思ってください」

呆れた顔で疑問を漏らす衛理華だが、説明していた楯無は笑顔のまま答える。

ただ、実は他にもあるのだが、ここでは話せない故にあえて話さなかった。

「そう……まあ、ここまでしてもらってるから文句は言わないでおくわ。」

それにここなら気兼ねなく研究が出来そうだしね」

ため息を吐きながらも衛理華は笑顔で答える。

確かにここなら一夏などをいちいち呼び出す必要も無い。

それに大学は上層部の無言の圧力などで居心地が悪くなっていた所でもあったし。

まあ、大学の方は今まで大した研究成果を出せなかったので当然の反応とも言えるのだが。

大学側も衛理華がこちらに行くを知って、大手を振って喜んでいたのでし。

後日、大学側はこのことで大きな後悔をすることになるのだが

「色々あったけど、みんなこれからよろしくね」

「はい！」

衛理華の挨拶に元気良く返事をする一夏。

そのことにその場にいる者達で笑顔が出るが虚は首を傾げていた。

まあ、彼女は今回の経緯を詳しく知らないのでしょうが、
しかし、もう一人。セシリアは複雑そうな顔を一夏に向けるのであ
った。

第4話『学園生活・テイクオフ!』（後書き）

そんなわけで駆け足でしたが事件も無事解決……とはならず。

新たな懸念や実は忘れていたりすることもある。学園生活編はまだまだ続きます。

というわけで次回はクラス代表戦。一夏対セシリアのIS戦となります。

果たして勝敗の行方は IS、魔改造しちゃダメかな？（おい）
そんなわけで次回をお楽しみに！

第5話『学園生活・ロックオン!』

それから更に数日後

「そついや、あつたんだよなあ……」

とある場所でうなだれている一夏の姿があった。

さて、まずは一夏がどこにいるかだが、IS学園内にある第3アリーナ　まあ、ISの競技が行われる場所だ。

その中にあるAピットというIS発着場所にいた。

で、なんでこんな所にいるかというと、クラス代表を決める模擬戦を行うためだ。

そう、先週のSHRショートホームルームで話し合わせ、その際のごたごたでセシリアと模擬戦を行うことになっていたので。

まあ、それを千冬が強引に決めた拳句、怪人騒ぎやら衛理華がIS学園に来る作業やらで一夏は今日千冬に話を聞くまでスツカリ忘れていたのだが。

「決まったことだ。仕方があるまい」

そんな一夏に箒は腕を組みながら声を掛ける。

その後ろには簪や本音もあり、同意するようにならずにうなずいていた。

「それよりも、おりむーのISはまだなのかな?」

ふと、本音はそんな疑問を漏らした。そう、一夏のISがまだ来ないのである。

ただ、一夏のISは急遽造られることになっただけに間に合わない可能性もあった。

そのことは千冬に告げられていたので、場合によっては学園で使われているISで行うことも考えてはいたが。

まあ、どちらにしるISを装着しなければならぬので、今の一夏は体にフィットしたセパレートタイプの紺色半袖と半ズボンタイプのISスーツを纏っている。

ISスーツとはISの下に着る、いわゆる下着のような物と思って

くれると良い。

なお、ISスーツの中には特殊な物もあるのだが、そちらは機会があったら説明しよう。

余談だが、本音の言葉に簪はわずかに動揺していたが、表情には出なかった。

どうやら自分なりに決着を着けたらしく、どちらかという気にするような視線を一夏に向けていた。

『織斑君　織斑君！』

そんな中、設置されてるスピーカーから真耶の声が響き、誰もがそちらへと顔を向けた。

『来ましたよ、織斑君の専用IS！』

『織斑、アリーナの使用時間は限られている。つまり時間が無い。初期化と最適化は実戦でやれ』

「む、無茶な」

嬉しそうな真耶とは対照的に厳しい口調の千冬は言葉に簪は顔を引きつらせていた。

初期化と最適化とは専用機となるISのコアにパイロットの特性を入力する為の行程である。

通常は専用端末と繋ぐなどして行われる物であり、実戦で行われるような物ではなかった。

また、初期化と最適化に処理を取られる為、ISの動きが鈍る可能性が高い。

簪が顔を引きつらせたのはそういった理由があったからである。

その間にピット内の奥にあるハッチが開き、そこから白く鈍い輝きを放つ待機状態のISが姿を見せる。

余談となるが、ISは両手足とスラスタ以外は装甲は部分的なものしかない。

これはISにバリアー機構があるおかげで必要以上に装甲を施す必要が無いというもある。

そのISに一夏は触れ、そこで違和感を感じる。違ったのだ。入試

試験会場で触れたISとは感覚が。でも、馴染んでいく。このISがなんなのか、なんの為に存在しているのか、理解出来ていくのだ。

『織斑君？』

「あ、大丈夫です」

『そうか。早く装着を済ませろ』

様子が気になった真耶が声を掛けるが、一夏は返事をしてから千冬の指示通りにISを装着していく。

ISを装着していくことでISと一体になったという感じを受けた。フォーゼも似たような感じを受けたが、ISの方が一体感はより強かった。

でも、フォーゼと同じ感覚もある。それは力強さ。その力強さが一夏に安心感を与えていた。

「白式……これがこのISの名前か」

目の前に浮かぶ空間投影の映像から装着しているISの情報を読み取る一夏。

それと共に真耶から模擬戦のルール等が説明された。

模擬戦は相手のシールドエネルギー残量を0にした時点で勝ちとなる方式となる。

シールドエネルギーとはISのバリアーに使われるエネルギーを指す。

当然ながら攻撃を受け続けたりすれば、それだけシールドエネルギーが早く無くなるのだ。

また、例えばバリアーを破られても絶対防御というもう一つのバリアーによって操縦者を守る機構が存在する。

ただ、この機構はシールドエネルギーを大量に消費するという欠点もあったが。

『織斑、どうだ？ 行けそうか？』

「ああ、大丈夫」

「行ってこい、一夏」

「がんばってねえ」

「行ってくる！」

千冬の問い掛けにうなずき箒や本音に答えると、一夏はアリーナへと向かい飛び去っていく。

その後ろ姿を見送る箒と本音。簪も声こそ掛けなかったが静かに見送っていた。

「来ましたか」

その一夏が飛んでいった先で待ち構えるように青いISを装着したセシリアがいた。

ただ、その顔付きはどこか険しさを感じさせていたが。

「まずは良く来ましたと言っておきますわ」

「俺としては勘弁して欲しかったんだけどね」

両手で自身の身長よりも長いライフルを構えながら声を掛けるセシリアに一夏は苦笑しながら答える。

一夏としてはクラス代表に興味は無い。ISの実力不足もあるが、フォーゼとして戦う事を決意しただけにクラス代表は枷にしか感じなかったからだ。

それでも今は集中しようと表情を引き締める一夏だったが、それを見たセシリアは頬にわずかに赤く染まってしまう。

「ふざけてますわね。でも、わたくしは確かめねばなりませんの！」

「へ？ 確かめるって、おわあ！？」

それでもすぐさま表情を引き締めてライフルからレーザーを撃つセシリア。

彼女の言葉に疑問を感じつつも一夏は飛んできたレーザーから逃れる為に横に滑るような形で飛び去ろうとした。

そのおかげか1発はまともに当たってバリアーが発動したが、続けざまに撃たれたレーザーは避けることが出来た。

「まだですわ！」

「く、くそお！」

かといってそれでセシリアは攻撃を止めるわけでもなく、続けざ

まにレーザーを連射してくる。

一夏は飛び回りながら回避をしようとするが、ISの動きが自分の意志よりも一步遅れた感じで動く為か避け切ることが出来なかった。直撃こそ最初の1発以外に無いものの、どうしてもかすってしまつてバリアヤーが発動してしまうのだ。

「やりますわね」

そのことにセシリアは険しい顔付きをしながらも内心は少しばかり感心してもいた。

ISが登場する前の男尊女卑の頃から貴族であつた実家の発展に尽力してきた母親。

そんな母親に対し、女尊男卑という世論と婿養子という負い目からか父親は卑屈な態度を取つていた。

そのことでセシリアは父親に憤りを覚え 他にも理由はあるが、それが男性への印象となつてしまふ。

だが、一夏はそんな男性の印象とはまるで違う。故にセシリアは一夏がどんな男性なのかを確かめたかつたのだ。

だからこそ、油断するつもりは無い。フォーゼとして戦っている姿を見ているだけに。

今だつて一気に落とすつもりで攻撃している。しかし、一夏は直撃を受けてはいない。

そのことは感心せざるおえなかつたが

「では、これはどうですか！」

かといつて手をゆるめる理由にもならない。

それを実行する為、セシリアは左右に浮いているサイドバインダーから伸びる4枚の青い羽根を切り離し、それらを一夏に向けて飛ばしていく。

「踊りなさい！ ブルー・ティアーズが奏でるワルツに！」

「おわつと!？」

その4枚の羽根の先端からそれぞれレーザーが撃たれ、一夏は慌てて回避した。

ブルー・ティアーズ。セシリアのISの名前ともなっている遠隔誘導型射撃兵器である。

その4枚の羽根　ビットから放たれるレーザーに一夏は抑え込まれそうになっていた。

何しろ多方向から攻撃が来るのだ。かろうじて直撃は無いものの、このままでは避けきれなくなるのは目に見えている。

それ以前に直撃が無いだけでかすめる数は増えており、シールドエネルギーはすでに700を切る寸前まで減っていた。

この調子で受け続ければ、シールドエネルギー0となって負けとなってしまう

「くそ！　何か武器はないのか！」

セシリアの攻撃を避け続ける一夏は白式のデータを目の前に投影する。

それでわかったのは白式の装備は名称未設定の近接ブレード1本のみということだった。

「無いよりはマシか！」

思わずぼやいてしまうが、それでもと一夏は近接ブレードを実体化させ手に持ち

「おおお！」

「な！？」

当たりそうな物は近接ブレードで防ぎながら回避を続ける。

このことにセシリアは思わず驚きを漏らしていた。

近接ブレードは日本刀に似た形をしていて一夏の身長程の長さはあるが、その幅は一夏の腕が隠れる程でしかない。

そんな物でレーザーに当てるのは不可能では無いが、やれと言われ出来るような事でもない。

だからこそ、セシリアは驚いてしまったのだが。

「凄いですね、織斑君。これが2回目とは思えませんね」

その様子をアリーナの管制室からモニター越しに見ていた真耶が感心した様子を見せていた。

真耶にしてみれば一夏の動きがISの初心者には見えない。どうすればあんな動きが出来るのかと思ってしまうほどだ。

「たぶん、経験が生きてるんだろうな」

「経験ですか？　ですが、織斑君のIS搭乗時間は」

「そっちではない。フォーゼとしての経験だ」

話を聞いて首を傾げる真耶に同じく管制室にいた千冬はそう答える。

だが、真耶は更に首を傾げるはめとなった。というの

「ISとフォーゼは別物だと思うんですけど？」

「確かにそうだ。だが、私が言ってる経験は操作のことではなく戦いのことだ。

あの戦いを経験したことで一夏は冷静に対処することが出来ているんだろう」

疑問に思っている真耶に千冬は腕を組みながら答えた。

一夏は自覚していないが千冬の指摘通り一夏は冷静に戦う事が出来ている。

なまじ、フォーゼでぶっ飛んだ戦いをしているだけに早々驚くことも無かったのだ。

が、それで勝てるかと言えば話は別だが、千冬の見立てでは今の段階で一夏が落とされると考えていた。

しかし、シールドエネルギーは大きく減らしてはいるものの、未だに落とされてはいない。

これがどのような結果になるか、千冬としては内心楽しみにせずにはいられなかった。

「一夏……」

「おりむー……」

一方、ピット内でモニター越しに試合を見守る箒、本音、簪。

箒と本音は心配そうな様子で見守っていたが、簪は真剣な眼差しで見ている。

そんな中、試合で動きが起きる。

「ん？」

回避を続ける一夏はセシリアがサイドバインダーにビットを戻し、ライフルで攻撃する光景を見てあることに気付いた。

「そういえばあいつ、小さいのを出してる時は自分で攻撃しないよな？」

思わず声に出してしまうが、今までのセシリアの行動を思い出すとそうなのだ。

セシリアはビットを使っている間、ライフルで攻撃してこない。それどころかろくに動かないような

「やってみるか」

セシリアが戻したビットを再び射出したのを見て、疑問を確かめるべく一夏は飛び出していく。

「無駄ですわ！」

セシリアもさせじとビットを操作し、一夏の行く手を阻もうとするが

「おりゃあああ！」

「な!？」

何発かのレーザーをかすめながらも一夏はビットの1つを切り裂き、その事実にはセシリアは思わず驚く。

だが、すぐさま正気に戻って攻撃を続けようとするが

「やっぱり! あの小さいのを出してる時は動けないのか!」

「くー!」

ライフルを構えずにビットの操作に集中するセシリアを見て、一夏は自分の考えが当たっていたことを確信する。

セシリアが使っているビットは彼女の思考制御によって多角複数攻撃を可能としていた。

並のIS操縦者なら何も出来ないまま落とされてもおかしくない攻撃方法である。

一見すると敵無しように思えるが、一方で4つのビットをそれぞれ別の動きをさせる為に制御が非常に難しいという欠点もあった。

みなさまには両手で別々の文字を書く以上に難しいと言えばある程度理解出来るかもしれない。

それ故にビットの制御中はセシリア自身ほとんど動けなくなり、無防備状態になる。

一夏はセシリアからの攻撃が来ないことを見越してビットを破壊したのだ。

そのことに気付かれたと理解したセシリアは更にビットを操作して攻撃を続けるのだが

「はあ！」

「そんな！ でも！」

「うお！？」

攻撃はかすめるだけで直撃が出来ず、一夏にもう1つのビットを破壊された上に接近されてしまった。

その為、セシリアはビットの制御を中断してサイドバインダーに戻しながら後退しつつライフルによる射撃を行う。

その攻撃に驚きつつも一夏はなんとかブレードで受け止め、一端離れることとなったが。

距離を取りつつらみ合う両者。セシリアは一夏がここまで出来るとは思っていなかったために軽い戸惑いを起こしていた為。

一夏は先程のセシリアの攻撃で自分の迂闊さを反省し、どのように攻めるかを考え直す為。

それ故に軽い降着状態に陥った……と思った時、息を整えたセシリアが再度ビットを切り離れた。

「来る……なら！」

それを見た一夏が再び動き出す。この時、一夏が考えたのは残りのビットの破壊だった。

そうすればセシリアはライフルのみの攻撃となり、遙かに攻めやすくなると思ったのだ。

シールドエネルギーの残量は400を切るうとしてるが、今ならやれると判断し

「おおお！」

ビットの1つを切り裂き

「掛かりましたわね！ ブルーティアーズは4機だけではありませんのよ！」

そこでセシリアは腰の後ろにあった2機の円筒状のカノン砲を前に稼働させ、そこからミサイルを2機発射する。

「いい！？」

このことに一夏は慌てて飛び去るが、ミサイルは後を追いかけるように追尾してきた。

そう、セシリアはビットの1つを犠牲にすることで一夏に隙を作り、今まで出さなかったブルーティアーズの残り2機である誘導ミサイルで攻撃しようと考えたのだ。

そして、それは成功して一夏を追い詰めていく。

「なるお！」

白式の今の動きでは逃げ切れない。そう判断した一夏は止まりながら反転する。

自分を追尾するミサイルを切り裂く為に

「だああ！」

そして、それは成功した。見事に2発のミサイルを一気に切り裂いて 直後に爆発に包まれてしまう。

「一夏！？」

「おりむー！？」

この様子を見ていた篤と本音は思わず叫んでしまい、簪は眼を細めた。

「織斑君……」

真耶もその様子に息を呑むが

「ふん、機体に助けられたな、馬鹿者め」

千冬はそのことに気付き、思わず笑みを漏らしてしまう。

一方、セシリアはただ静かに、でも油断せずに見守っていた。

今で終わったか、そうでなくてもその寸前までダメージを与えた

はず。そう思つて

「え？」

だが、爆発の煙が晴れたことで見えてきた物にセシリアは自分の目を疑つた。

そこには先程とは違うISを纏つた一夏の姿があつた。いや、基本的な形は先程のISとは変りない。

代わりに鈍い光沢を放つていた装甲は名を示す通り白く輝く物へと変わり、背中の2機のウイングバインダーも翼を広げたような形へと変わつていたので。

「これつて……」

呆然とする一夏の目の前で初期化と最適化が終了したことを示す映像が投影される。

「まさか、一次移行！」

つていたというの！？」

セシリアも目の前に投影されるデータを見ながら、その事実を驚愕している。

専用機とはいえ、初期化と最適化が済んでいないISで戦うのはどれ程の無茶なのか

それ以前にセオリーから外れた一夏のやり方にセシリアは驚愕したのである。

一方で一夏は白式を改めて見回していた。それと共に白式が自分に良く馴染んでいることに気付く。

それで理解した。今、この時をもって白式は本当の意味で自分のISになつたのだと。

同時に武装の表示にも変化が起きる。名称未設定だった近接ブレードが雪片二型と表示されたのだ。

「雪片？ 確か、千冬姉が使つていた武器の名前じゃ」

その表示を見ていた一夏は思わず首を傾げそうになる。

そう、雪片とは千冬がISを使う際に使つていた武器の名前だ。

それが自分のISに搭載されている。そのことがどこか嬉しくて

「なら、がんばらなきゃな。今まで守ってくれた千冬姉の為に俺は、俺が目指す仮面ライダーになる！」

「え？ あ、何を言ってる」
決意を口にする一夏の姿にセシリアはその言葉の意味が理解出来ずに戸惑いを見せる。

一夏はフリーストシフト一次移行を終えた白式を感じたことで気付いたのだ。

今まで守ってくれた千冬に感謝しつつも、自分は本当の意味で仮面ライダーになってはいないと。

なぜ、そう思ったのかはわからない。それに自分がどんな仮面ライダーを目指そうとしているのかもわからない。

でも、だからこそ目指そうとしたのだ。今まで守ってくれた千冬に応える為に自分がこれだと思っ仮面ライダーになろうと。

「ふ、あの馬鹿者は……」

そんな一夏の姿をモニター越しに見ていた千冬は思わず笑みを漏らす。それは箒や本音も同じであったが。

「ああもう！ 面倒ですわ！」

一方でそんな一夏を見て困惑を強めたセシリアはすぐに終わらせようと4機の誘導ミサイルを発射した。

しかし、一夏はすでに気付き顔を向けると呼応するかのように雪片の刀身が割れるように変形し、代わりに青白いレーザー光の刀身が生まれる。

「はあ！……」

そして、一気に飛び出したかと思うと誘導ミサイルを瞬く間に全て切り落とす。

先程までとは違い自分の動きにISが合わせてくれる。動きも確実に速くなっていた。

「でりゃああ！……」

「あ、きゃあああああ！……？」

先程とは違う速さに戸惑ったセシリアが一夏に一気に距離を詰められた拳を斬られ、思わず悲鳴を上げた。

幸いにも絶対防御が発動した為セシリア自身にダメージは無いものの、そのせいでセシリアのISのシールドエネルギーは大幅に奪われてしまう。

「おおおおおー!!」

そのことでセシリアがひるんでいる隙に一夏は宙返りの要領でUターンし、再びセシリアに迫り

「でええい!!」

「ああああああ!!??」

更にもう一太刀によってバリアーが切り裂かれ、セシリアは更に悲鳴を上げた。

それと共にアリーナ内にブザーが鳴り響き

《試合終了。両者ドロ》

「へ?」

アナウンスの言葉に一夏やセシリアだけでなく、見ていた誰もが呆然とする。

どう見たって一夏の勝ちなのに、なぜドロなのか?

ただ1人、理由がわかった千冬はかすかに笑みを漏らしていたが。

「なんで引き分けになったんだ?」

試合が終わり、ピットに戻りISを解除した一夏とセシリア。

そこで思わず疑問を口にした一夏であったが

「バリア無効化攻撃を使ったからだ」

「バリア無効化攻撃?」

千冬の返事に一夏は首を傾げる。その言葉の意味が理解出来なかったからだか

「相手のバリアを無力化し、本体を直接攻撃することで絶対防御を発動させる。

それが雪片の特殊能力であり、私が第1回のモンド・グロツソで優勝出来たのもこの能力による物が大きい。

ただし、使用には自分のシールドエネルギーを転化しなければならない諸刃の剣でもある。

お前が引き分けで終わったのも、その特性も考えずに無闇に使ってシールドエネルギーを失ったからだ」

「ちょ、ちよつと待ってくれ」

千冬の説明を聞いて思わず待ったを掛ける一夏。

説明がわからなかったからでは無い。あることが気になり、そのことを考える為であった。

「なんだ？ 何か言い訳でもあるのか？」

「いや、言い訳というか……俺、使った覚えが無いんだけど」

「なに？」

睨み付ける千冬だが、一夏の返事に思わず眼を細めた。

しかし、一夏は気付いていないのか、その時のことを思い出そうとしていたが。

「うん、データはちゃんと見なかったけど……でも、使うように操作した覚えは無いんだ」

しかし、いくら思い出しても雪片の特殊能力を使うような操作をした覚えが無い。

確かに雪片二型のデータをちゃんと見なかったり試合に集中していたのもあるが、どう考えても特殊能力を使うような操作はしていなかった。

「大方、無意識に使ったのだろ。まったく、お前という奴は」

「それは流石にひどすぎると思っけど？」

そうしたのだろうと判断した千冬は戒めの言葉を掛けようとした所で聞こえてきた声に阻まれてしまう。

その声に誰もが顔を向けると

「衛理華さん？ なんでここに？」

「データ取りを兼ねた観戦、のつもりだったんだけどね。仕事が長引いちゃって、今来たばかりなの。」

にしても、手放しに褒めろとは言わないけど、言い方が少しきつす

ぎないかしら？

初めて使うISに武装がどんなのかもわからなかったんでしょ？

それで引き分けたんなら、それなりにやった方じゃないの？」

「それに初期化フォーマットと最適化フィッティングも終わっていないISで、代表候補生にあそこまで戦えるものじゃないと思います」

「む……」

一夏の疑問に答えつつそう言い放つ衛理華。簪も同意するようにうなずくと千冬は思わず軽く呻いてしまう。

一夏のIS搭乗時間は1時間も満たない初心者。その上、ISは初期化フォーマットと最適化フィッティング終わっていない為、動きが鈍い。

その状態で代表候補生として訓練を重ねたセシリア相手にケアレスミスが無ければ勝利出来たかもしれない引き分けなのだ。

それだけでも大した物なのだが、千冬としてはそれを言うで一夏が図に乗りそうな気がして厳しい言葉になってしまったのである。

「ともかく、お前のISは欠陥機……いや、言い方が悪いな。」

お前の機体は他よりも攻撃に特化しているということだ」

「は、はあ……」

「でも、それも調整次第で変わってくると思うよ」

「え？ そうなの？」

「うん」

千冬 of 言葉に顔をしかめてしまった一夏だが、簪の言葉に思わず顔を向けてしまう。

この時の一夏は知らなかったのだが、専用機となったISは調整が必要となる。

そうすることでISをより自分に適した物にすることが出来るからだ。

「今の内に言っておきますけど、今ISは待機状態になっています。織斑君が呼び出せばすぐに展開出来ますけど規則がありますので、その辺りはちゃんと確認しておいてくださいね」

「あ、わかりました」

真耶の指摘に一夏は右の手首に白く大きい腕輪のようになっていた。待機状態の白式を見てから思わず頭を下げる。それと共にまた参考書を読まなければならないという事実のため息を漏らしていたが。

そんな一夏を見てか微笑む箒と本音。一方で少し離れた所で様子をつかがっていたセシリアは真剣な眼差しを向ける。

そして、簪もまた含みがある視線を一夏に向けていた。

そんな一夏を見ていた千冬だが、この時は一夏の言っていたことをさほど重要視していなかった。

気になることもあったが、一夏が無意識に使ったのだらうと決めつけて、それが違うことに気付くのはまだ先の話である。

「ん……疲れたなあ」

模擬戦が終わり、一夏は箒と本音と共に寮へと戻ろうとしていた。クラス代表は両者が引き分けた為、改めて選考を行うこととなったが。

そのことをどうしようかと考えていた一夏だが、そこで箒が自分を見ている事に気付く。

「どうか、したのか？」

「いや、その……引き分けて、悔しいとか思わないのか？」

「悔しい、のかな？」

どこか恥ずかしそうにしながら問い掛ける箒だが、一夏はというと首を傾げる。

別に悔しいとは思わない。今回の模擬戦に乗り気では無かったものもあるが、やはりあの決意があったからだと考える。

自分が目指す仮面ライダーになるという決意に。

「あ、いや、だ、だが、訓練は必要になると思うぞ！」

「確かにな」

なぜかどもる箒であったが、その言葉を聞いて一夏は思わず考え

込んでしまう。

ISにしろフォーゼにしろ、これからは訓練は必要になるとは感じていた。

ただ、フォーゼは衛理華の指示の元となるが、ISはどうやって行うかが問題だった。

千冬や真耶は教師の仕事がある為、頼むのは難しそうだったし。

「な、なら、私と一緒に訓練をしないか？」

「箒と？ うん、なるほど。それはいいかもな」

顔を赤らめながら言い出す箒だが、一夏はそれを聞いて思わずうなずいてしまう。

箒となら幼馴染みなので他の女子よりも気安く話せるし、箒の姉はISを開発した人でもある。

ならば、それなりに詳しいと考えると

「じゃあ、これからよろしく頼むな」

「あ、ああ……」

「私も私も」

「あ、こら！？」

微笑む一夏に箒は赤面しながらうつむいてしまうが、そこに割って入ってきた本音に思わず戸惑うはめとなってしまった。

ただ、本音は自分がなぜそんなことをしてしまったのか、気付かずにやっていたが。

そんな彼女達を見て思わず微笑む一夏。その時、待機状態の白式が鈍い輝きを放っていたことに気付くことは無かったが。

「姉さん、模擬戦のデータを持ってきました」

「ありがとう、簪ちゃん」

IS学園生徒会室。なぜか、薄暗い広い室内で簪は楯無にメモリーチップを渡す。

今、ここにいるのは2人のみ。だからこそ、簪は疑問に思っていた。

別にデータを渡さなくても模擬戦自体はここにいっても見れるはずなのに。

「気になってるようね。まあ、私も気に掛かってるだけで、何かあると確信してる訳じゃないんだけどね」

「そうなのですか？」

「そうよ。あなたも知ってるとおり、織斑君は様々なことに関わっている。

男性で唯一のIS操縦者であり、同時に唯一コズミックエンジンの高い活性化も出来る人物。

それがどのようなことになるのが私は気に掛かってるのよ」

首を傾げる簪は苦笑混じりに応えた。

確かに一夏はISやフォーゼといった事に関わっている。

特にフォーゼ 正確にはコズミックエンジンだが、かなり特異なことに関わっていると云ってもいい。

それなら楯無が気にするのもわかるかも思いつつ、簪はそんなことを考える自分に苦笑しそうになった。

前の自分だったらこんなことを考えなかったかもしれない。

だからこそ、直接的では無いとはいえ楯無との仲を取り戻してくれたい一夏には感謝していたが。

「さてと……これからある人と通信をするのだけど、このことは誰にも言っちゃダメよ」

「え、なぜです？」

「そうね。更識家の裏に関わるから……とだけ、今は言っておくわ」「え？」

首を傾げながら問い掛ける簪だったが、話し出した楯無の返事に思わず訝しげな顔をした。

詳しく話すと長くなるが、更識家は日本の裏に関わってきた一族でもある。

その話は簪も知ってはいたが、それをなぜここでという疑問が出てくる。

実を言えば、楯無としては簪をこのようなことに関わらせたくはなかった。

それが自分のわがままだとはわかっている。でも、簪には普通の女性として過ごして欲しいと思っていた。

しかし、自分と関わってしまっただけでそうはいかなくなるだろう。

だからこそ、楯無は覚悟を決めて簪にそういったことを少しずつ伝える事にしたのだ。

そんなことを考えながら楯無は端末を操作すると少し離れた空間に映像が投影された。

『ん？ 更識のお姫様か。何かご用かな？』

その映像には男性の姿が映し出される。

少しばかり皺が刻まれた厳しくも整った顔立ちにオールバックの黒髪。

背は高く、スラリとした体型を背広で包んでいた。

「はい、実はあなた方に後輩が出来るかもしれないとお伝えしようと思ひまして」

『後輩？ どういうことかな？』

話を聞いて訝しげな顔をする男性に楯無は端末を操作してあるデータを送る。

それはコスミックエナジーを含めたフォーゼのデータと一夏のデータである。

その送られたデータを見た男性の目が開かれる。

『これは』

「まだ何もわかってはいませんが、何かが起ころうとしています。

そして、織斑君はその事態の中心人物になる。私はそう予測しておりますの」

『ふむ……』

楯無の話を聞いて、送られたデータを見ていた男性はあごに手をやりながら考え込んでいた。

確かに一夏が遭遇した事態の数こそ少ないが、それで終わりとなら

ないのは男性も経験から感じている。

それはわかるのだが

『それでは君は私達に何をして欲しいのかな?』

「協力をお願いしたいのもありますが、彼の……織斑君の道しるべになって欲しいのです」

男性の問い掛けに楯無は真剣な顔で答えた。

一夏が言っていた自分が目指す仮面ライダーになる。それが簡単なことでは無いのは楯無も感じていた。

もしかしたら、一夏はそのことで迷走するかもしれない。そうなくてもいいように彼らにお願いしていたのだ。

『なるほど。私達もいくつかの案件を抱えているから、すぐに協力は出来ないが いずれ誰かを送ろう』

「ありがとうございます」

男性の返事に楯無は微笑みつつも内心はほっとしていた。

彼女としては万全な態勢を整えただけだが、彼らにもやらなければならぬことがある。

だから、この返事をもらえただけでも御の字だと思うことにした。

『こちらでも出来るだけ調べておこう。何かわかったら連絡する』

「はい、お願いいたします」

男性の言葉に楯無が頭を下げると映像が消えた。

それを感じて、楯無は頭を上げるとほっと一息吐いてしまっていたが。

「あの、あの人はいつたい……」

「そうねえ……誰も知らない所で日本を いえ、世界を守っている人達よ」

「はい?」

微笑みながら答える楯無であったが、問い掛けた簪はそれを聞いて思わず首を傾げてしまうのだった。

「ふう……仮面ライダーフォーゼ……か……」

一方、楯無と通信を終えた男性はため息混じりにそんなことを漏らす。

仮面ライダーは男性にとって特別な意味を持っている。なぜなら、仮面ライダーは様々な苦悩と戦わねばならないからだ。

一夏はその苦悩の1つが無いことは幸いだが、それでもこれからのことを考えると心配になる。

「何かあったのか？」

「ん？ 本郷か。戻ってきたんだな」

「ああ、なんとか片付いてな。ん？ これは」

そんな時、やってきた青年に男性は気付いた。

その本郷と呼ばれた青年と一緒にいた青年と共に男性が見ていた映像に気付く。

それは一夏がフォーゼに変身する物と怪人を倒した際の映像であった。

「これは……まさか、彼も」

「安心したまえ。彼の変身はベルトの力による物だそうだ」

「そうか……」

男性の返事にしかめた顔で問い掛けた本郷は安堵する。

仮面ライダーはその姿とは裏腹にある非業を抱えている。

本郷もそうなのだが、一夏がそれを抱えていないことに本郷は安堵したのだ。

「彼は……」

「ん？ そうか、沖君は彼に会っているのだったな」

映像を見つめるもう一人の沖と呼ばれた青年を見て男性はそのことに気付いた。

そう、その青年は沖 一也。かつて誘拐された一夏は助けた人物である。

「彼に何があったかは後ほど話すが、彼は仮面ライダーフォーゼと名乗って新たに現れた謎の集団と戦う事を決意したらしい。」

その際に自分が目指す仮面ライダーになるとも言っていたそうだ」
「そうか。ということは俺達は彼に協力を？」

「いや、君達も知っているかもしれないが、彼は世界で初めて男性でISを動かした人物でもある。」

そのせいで不穏な動きを見せる所がいくつか出ているからな。君達にはそちらの対処をしてもらいたい。

いずれ彼に会わなければならぬが、今は彼への負担を減らすことが先決になる」

「わかりました」

本郷の問い掛けに男性が笑顔を交えながら答えると、それを聞いた一也がうなずいていた。

男性の言うとおり一夏は初の男性でISを動かした人物だ。

一夏自身はその自覚は薄いですが、それ故に様々な方面で注目されている。

中にはそのことで良からぬことを考えている所もあるくらいだ。彼らは以前からその対処に回っていたが、一夏の今後の為に対処の強化をすることにしたのだ。

「一夏君……」

そんな中、一也は心配そうに一夏が映される映像を見つめる。

まさか、彼が仮面ライダーになるとは……もしか、自分のせいなのかと一也は考えてしまう。

だが、悩んでばかりはいられないこともわかっていた。

だからこそ、一也は自分がすべきことをして、改めて一夏に会おうと決意するのだった。

とある場所。様々な装置に囲まれた中にその女性はいた。

可愛らしく整った顔立ちに垂れ目気味の穏やかな表情をしていて、童話『不思議の国のアリス』に出てくるアリスの衣装に似たワンピースドレスを纏い

そのせいか女性としては高い身長にモデル並のスタイルと豊満な胸が強調されているが。

そして、腰まで伸びる紫の髪に頭には機械仕掛けのウサ耳が乗っている。

その女性の顔だが、どこことなく箒に似ている印象があったのも述べておこう。

「ん……」

その女性は目の前の空間に投影されたモニターに映るデータに首を傾げていた。

そのデータとは白式だったりする。なんでこの女性がそんなデータを見ているかと言えば、彼女は白式の開発に関わっているからだ。正確には違うのだがその辺りの話は機会があった時にするとして、その関係で白式のデータを見ていたのだ。

「なんか、おつかしいなあ」

なのだが、その女性はそのデータとにらめっこしながら首を傾げるばかり。

データ上で白式におかしな所は無い。想定よりも若干高い能力を出しているが、それも許容範囲内だ。

そう、おかしな所は無い、はずなのだが

「やっぱり、いつくんが命令してないのに零落白夜が発動してる」
白式の操作ログを見ると彼女がいつくんと呼ぶ一夏が操作して
いないのに動いている箇所があることがわかる。

女性の言う『零落白夜』。千冬が話していたバリア無効化攻撃の発動である。

千冬は一夏が無意識の内に操作したのではと思っていたが、一夏に
関してはそれはありえなかった。

熟練のIS操縦者ならまだしも初心者の一夏はそれは出来ないし、
それ以前に一夏は『零落白夜』の存在を知らない。

女性はそのことには気付いていないが、知らない物を使えるはずが
無いのである。

「勝手に動いてる？ あはははは、まさかあゝ」
そのことに思い当たるものの、女性はありえないと笑い飛ばす。
そう、この時はそうだと思っていた。しかし、彼女は知らない。
自分すらも及ばない事態が起きようとしていることに

ある薄暗い場所にその人物はいた。整えた黒髪の髪型に皺が刻まれた顔で背広を着た初老の男性。

卵の形をしている大きなイスに座り、手には簪が使ったあのスイツチが握られている。

そんな男性の前にマントとフードを纏った者が現れ、フードを脱いでから跪いてしまう。

しかし、フードの下にあったのは人の顔ではなく、どこかサソリを思わせる仮面のような顔であったが。

「そうか、フォーゼか……」

そのサソリの仮面の者が話しているわけでもないのに初老の男性は聞いているかのようにうなづく。

良く見ればサソリの仮面の者以外にも数名の人影が見えるが、薄暗くて姿が良く見えない。

しかし、そのシルエットは明らかに普通の人には見えなかったのだが。

「ふむ、『亡霊』が我らに気付いたか。そちらは邪魔になるような潰せ」

一方で初老の男性は忌々しそうな顔でそんなことを言い出す。
実際、男性にしてみれば『亡霊』と呼ぶ存在は邪魔でしかなかったのだが。

「フォーゼ……確かめねばなるまいな……私達の今後の為に」
先程とは違って不敵な笑みを浮かべながら呟く初老の男性。
その瞳はなぜか赤く不気味に輝くのだった。

その日の夜。セシリアはシャワーを浴びながらあることを考えていた。

それは一夏のこと。というか、一夏のことばかり考えてしまっ
フォーゼとIS。一夏の戦いを見て思うのは、やはり今まで見てき
た男性とは違うということ。

それに今日の模擬戦では途中まで一次移行を終えていない機体で戦
ったこともセシリアとしては感心せざるおえない。

初期化と最適化しながら戦闘するというのはセオリーから外れてる
上に非常に難しくなるのは想像出来る。

それでも一夏は弱音を吐くこともなく戦い抜いたのだ。

故に感じるのは一夏が自分の理想の男性像に近いということか

「織斑、一夏……やはり、わたくしは」

呟くセシリア。その名を呟くと自覚してしまっ。一夏のことか
つと知りたいたい。

それに模擬戦で見た一夏の強い意志を宿す眼差しを思い出すと胸が
熱く嬉しくなるから。

そんな彼女の表情は恋する乙女の物であった。

次の日

「まず始めに、クラス代表は織斑 一夏君に決定しました」

「へ？」

朝のSHRでの真耶の発言に一夏は顔を引きつらせた。

確か改めてクラス代表を決めることになっていたのに、なぜに自分
がなっていたのか理解が出来なかったからだ。

「ちょ、ちよつと待ってくれ！ なんて俺がクラス代表になつて
んだ！」

「それはわたくしが辞退したからですわ」

戸惑いながらも怒鳴るような形で問い掛ける一夏に答えたのはセ

シリアであった。

「先日の模擬戦で私は思ったのです。一夏様は私以上の才能を持っていると」

「は？ 一夏、様？」

で、両手を組みつつ乙女な仕草で事情を話すセシリアだが、その一言に一夏は更に顔を引きつらせる。

同時に箒と千冬、本音は一夏を睨んでいたが。一方で一夏は混乱している。

確かに最初こそ傲慢な態度を取っていたが、それもクラス代表を決める模擬戦までは不機嫌そうながらも普通の態度で接していた。

なのに、なんでいきなり様付けで呼ばれるのかがわからない。更になんで憧れの人を見るような目で見られるのかもわからない。

模擬戦の方は引き分けだし、それ以降も何かをした覚えも無い。

なので、一夏としては訳がわからず困惑するばかりだったのである。「それにクラス代表になれば実戦を多く出来ますから、一夏様にはですから、一夏様にクラス代表をお譲りすることにしましたのです。これからがんばってくださいね」

「は、はは……」

満面の笑みで答えるセシリアだが、一夏は顔を引きつらせるしかなかった。

何をどうすれば自分にクラス代表を譲ることになるのかわからないかといって理由を聞こうとすると怖い返事が返ってきてそうで聞けなかった。

故に顔を引きつらせるしかなかったのである。

一方でクラスメイト達はそんなセシリアを見て騒がしくなっていたりする。

箒、本音、千冬の一夏を見る目は鋭くなるばかりであったが。

こうして、一夏の学園生活は本格的に始まる。だが、この時は誰

も考えることはなかった。

ISとコズミックエナジー　この2つが出会った時にどうなるのかを。

この時はまだ、誰もその事に気付く者はいなかった。

第5話『学園生活・ロックオン!』（後書き）

というわけでようやく学園生活編は終了。

というか、最後がはしより気味になるのはどうにかしないと……
ちなみにISの魔改造は……今のところ保留中です。

いや、やりたいんですけどね。どんなのがいいか思いつかない^
^ ;

さて、次回からは新たなお話に突入。

ついにやってきたセカンド幼馴染み。しかし、彼女の行動が事件を生む事に。

というようなお話です。とりあえず、ISとフォーゼの3・4話が半々になったようなお話かな？

そんなわけで次回またお会いしましょう。

第6話 『幼馴染み・セカンドオン!』

「へへ、見ててね」

そう言いながら本音が取り出したのはハンバーガーだった。

しかし、見た目的には食べ物では無いのは一目瞭然であったが。

そのハンバーガーのサイドカバーの一部を開き、そこに何かを差し込む。

それはカメラスイッチであったが、それを差し込んでボタンを押した瞬間ハンバーガーが飛び上がったかと思うと小型のロボットに変形してしまった。

ちなみにパンズが車輪になっており、中身の具が両手。更に真ん中から双眼鏡のような目が出ている。

「あらら」「へえ」

「バガミールって言うんだ。かわいいでしょう?」

「あれは良いのか?」

「逆にあっちの方が偵察とかに使えると思うわ。フォーゼに使わせるには色々と問題もあったしね」

バガミールと呼ばれた小型ロボを感心した様子で見ているセシリアと簪に本音は嬉しそうに見せていた。

一方、その様子を見て問い掛ける千冬に衛理華は苦笑混じりに答える。カメラスイッチは基本的には撮影機能しかない。

一応、撮影した物の解析も行えるが、その為には衛理華が持つモバイルPCにデータを送らなければならないという手間がある。

リーダーでも似たようなことが出来るのと活用出来る場面が少ないと思われることが前回の騒動で推測出来た為、衛理華はカメラスイッチをお蔵入りにしようとしたのだ。

が、それを知った本音はいい方法があると言い出し、その結果がバガミール開発となったのである。

ちなみにバガミールはほぼ本音の手によって造られていたりするの

を述べておこう。

さて、随分と遅れたが、現在衛理華達がいるのは授業にも使われるアリーナ内。

なんでここにいるかというところ、少し離れた所から聞こえる地響きが理由であった。

その地響きの元は手足が車輪になっている、ちよつと不格好な人型のロボットが動き回っているからである。

大きさは人の2倍以上はあるだろうか？ そのロボットがある程度走り回ってから千冬達の元へとやってきた。

で、たどり着いてひざまずくと頭部が後ろに倒れて胸が開き、そこから筭の姿を見せていた。

「それで、動かしてみてもどうかしら？」

「はい……操作自体はさほど難しくないのですが、負担が体に来ますね」

衛理華の問い掛けに額に汗を浮かべる筭は息を整えてから答えた。さて、筭が何に乗っているかということ、実はパワーダイザーだったりする。

パワーダイザーにはダイザーモードと呼ばれる限定的にはあるが格闘戦を行える人型形態になる機構もあった。

ただ、調整不足もあって今日までダイザーモードを使えなかったのだが。

で、コズミックエナジーの活性化も出来るということで筭が操縦者選ばれたのである。

「しょうがないかも。だってえ、使われてるパーツってジャンクパーツばかりだったし」

「あ……元からそんなにお金があった訳じゃ無いからね」

本音としては珍しく呆れた様子でそのことを告げると、衛理華はすまなそうな顔をしながら頬を指で搔いていた。

まあ、フォーゼドライバーやアストロスイッチ、マッシグラを造った上でパワーダイザーまで造ろうとしたのだ。

当然というか研究費という名の資金は無くなり、仕方なくパワーダイザーは重要箇所以外はジャンクパーツをレストアして使うという形で製作したのである。

そのことと衛理華や泰蔵教授はその専門で無かったというのもあったが、パワーダイザーの操作には操縦者に負担を掛けるという欠点が出てしまったようだった。

それでもパワーダイザーは必要となる。というのも、怪人との戦闘にISを使うのは困難だからである。

先日言っていたアラスカ条約なども含めて制約が大きすぎるからだ。かといって一夏だけに戦わせるわけにもいけないので、パワーダイザーは必要となる。

なので、欠点の原因を探りつつも少しずつ進めていくべきかと衛理華は考えた。

いくら更識家の支援があるといってもお金を湯水の様に使えるわけではないのだし。

ちなみに本音がなぜそんなことを指摘出来たかと言えば、パワーダイザーの調整と整備をやっていたからだったりする。

どうやら本音は整備の腕は高いようで、楯無に頼まれて姉の虚と共にやっていたのだ。

その虚は生徒会の仕事で楯無と共にここにはいなかったが。

さて、話が外れてしまったが、千冬達がこのアリーナにいるのはパワーダイザーの起動テストともう一つの目的の為である。

ちなみにこのアリーナの使用許可をもらう関係で千冬がここにいるのだが。

「遅れてごめん」

「あ、おりむー」「一夏様」

そんな時に一夏が真耶と共にやってきて、そのことに本音とセシリアが嬉しそうな顔をする。

本当は一夏はすでにここにいなければならなかったのだが、真耶に急な用事を頼まれてしまって今になって来たのだ。

「それで何をやるんだ？ フォーゼの訓練？」

「それもあるけど、今日はこれを試すのが目的」

「おっと。これって、アストロスイッチ？」

問い掛けてみる一夏。実は今日までフォーゼの訓練どころか変身もしていなかった。

いくら学園にフォーゼの存在を知られたといっても早々変身していいわけでもない。

なので、フォーゼに関しては今日まで何もしていないに等しかったのだ。

で、その問い掛けに答える形で衛理華は何かを投げ渡し、一夏がそれを受け止める。

受け止めた物は見たこともないアストロスイッチであったが。

「長かったわ。織斑君のおかげでコズミックエナジーの研究が進み、更識家の支援のおかげでアストロスイッチの調整が出来るようになったのよ。」

そういうわけで新しいアストロスイッチ。 ナンバーナイン NO・9のホッピングス

イッチよ。試してみて」

「わかりました」

《スリー ツー ワン》

「変身！」

「それはどうにかならんのか？」

「あはは……」

《ホッピング》

どこか感動した仕草を見せながら語る衛理華にうなずいてから、かけ声とポーズと共に変身する一夏。

本音とセシリアはその光景に目を輝かせていたが千冬は呆れたようにため息を吐き、真耶はそのことに苦笑してたりする。

ちなみに簪も良く見ると一夏を注目していたりするが。

で、千冬がなんで呆れているかというところ、ISの実機授業でISを装着する際に一夏は同じことをしたのだ。

本人としてはイメージしやすいからというが、千冬に色々と問題だからかけ声無しで出来るようになれと言われてしまう。

余談だが今日もISの実機授業があり、一夏はそこで急降下と完全停止をやるように言われ、完璧というわけではないがやり通していた。

一夏にしてみるとISの方が動かしやすいのだ。

例えるならフォーゼがマニュアル車でISがオートマ車。一夏にとつてはそのような感覚なのである。

まあ、それはそれとして、一夏はドリルスイッチを逆三角形のボタンが付いたホッピングに入れ替えた。

すでに気付いた方もいると思うが、このアリーナで行われるもう一つの目的というのがホッピングスイッチの起動テストである。

「そういえば、あれはどんなスイッチなのだ？」

「フォーゼドライバーとアストロスイッチに関してはおじいさまがほぼ1人で開発してたから詳しくはわからないのよね。」

確か、ジャンプ力強化機能だったと思ったんだけど

ふと気になった千冬の間い掛けに衛理華は腕を組み、あごに手をやりながら考えつつ答える。

先日も少し触れたが、フォーゼドライバーとアストロスイッチに関しては泰蔵博士がほぼ1人で開発を行っていた。

なので、衛理華も把握していない部分もあるのだ。

《ホッピング・オン》

そうこうしてる間に一夏はホッピングスイッチを押し、左足に車に付いているような紫色のサスペンションが装着される。

みなさまにはおもちゃのホッピングと聞けば想像しやすいかもしれないが。

で、装着することでホッピングで片足立ちの状態になってホッピングのバネが縮まり

「おわあ!？」

おもちゃのホッピングの如く跳び上がってしまう。一夏の意志と

は関係無く。

「お！？ てえ！？ うわ！？ おお！？」

一夏はなんとか着地しようとするのだが、慌ててしまってホッピングがある足が先に地面に付いてしまう。

それでまた跳び上がってしまい、それでも着地しようとして慌てたせいでホッピングがある足が地面についてという繰り返し起きるはめになっていた。

「あははは、おりむーおもしろい」

その光景に大笑いする本音。セシリアと真耶は苦笑し、箒は呆れた様子でため息を吐いていたが。

「思うのだが、あれは使えないと思うぞ」

「うん、私もそう思う」

千冬も呆れたようにため息を吐きながら指摘し、衛理華は苦笑しながら答える。

まあ、どう見たってジャンプ力強化というより、ただ跳び回っているようにしか見えなかったし。

「おわ！？」

で、一夏は尻餅を付く形でようやく止まっていたが。

「まったく。今日はフォーゼで一通りの動きを試してみる。その後はISの訓練だ」

「は、はい……」

近付いてきた千冬に一夏は疲れた様子で返事をするのだった。

一方でフォーゼのスーツの中で待機状態の白式が鈍い輝きを放っていたりするが。

さて、それからしばらくして、IS学園の敷地内に1人の少女がいた。

小柄な体型に肩を大きくさらした状態に改造されたIS学園の制服を纏い

やや茶色がかった長い髪を黄色のリボンで結い上げたツインテールにし、幼いながらも整った顔立ちは勝ち気な表情を見せている。

そんな少女がポストンバック片手にある場所を探して歩き回っていたのだが

「と言われてもなあ」

そんな時、青年の声が聞こえ、少女は思わず振り返ってしまう。

このIS学園で青年と言えは一夏ぐらいだが、少女はなぜか期待の眼差しを浮かべていた。

というのもこの少女、実は一夏と親友だったりする。

ある事情から離ればなれになってしまったが、一夏のことを忘れたことは無い。

だから、振り返って声を掛けようとした。胸の高鳴りと共に自分のことを覚えているか不安に思いながらも。

「だから、なぜあれであんな動きが出来るのだ？」

「いや、前にも言ったけど、フォーゼと比べたら動かしやすいんだって」

が、聞き覚えの無い少女の声と親しげに話す一夏の声を聞いた時、少女の表情が固まる。

それと共に少女は胸の高鳴りがやみ、心が冷えていくのを感じていた。

振り返ってみれば、一夏が3人の少女達と話しながら歩いている光景がある。

この時、少女が思ったのはあの3人は何者なのか？ということであった。

なぜ、ああまでも親しげに話しているのか。やはりあれか？ 胸なのか？

などと邪推してしまう。なまじ、自分のは貧しいと感じてしまっている為に。

結局、少女は声を掛けずに一夏達を見送るしかなかった。

その後、少女は目的の場所である事務室にたどり着き、ある手続き

をするのだが

「はい、これで手続きは終了ですよ、ふあん 凰 りんいん 鈴音さん」

「あの、織斑 一夏って何組ですか？」

「ああ、あの噂の子？ 彼なら一組よ。凰 鈴音は二組だからお隣になるわね。」

そういえば織斑君ってクラス代表に選ばれたそうよ。あの織斑先生の弟さんだけはあるわね」

笑みを浮かべる事務員の女性に構わずに凰 鈴音と呼ばれた少女はそんなことを問い掛ける。

問い掛けられて首を傾げながらも事務員は聞かれてないことまで話してしまった。

それを聞いた凰 鈴音は眉を跳ね上げ

「あの、二組のクラス代表って誰ですか？」

「え？ えくと、確か 如月 きつひつ 未 み 来 き さんね。」

まあ、この時期だからクラス代表が決まっているのは当然だけど、それがどうかしたの？」

凰 鈴音の問い掛けに事務員はやはり首を傾げながらも答え、気になって問い掛ける。

それに対し凰 鈴音は笑顔になり

「はい、クラス代表を私に譲ってもらえるよう、お願いしようかと思っ

などと答えるのだがその笑顔はなぜか引きつっており、額には青筋まで見えている。

それを見た事務員は顔を引きつらせつつ嫌な予感を感じたとか。

そして、その嫌な予感は斜め上な感じで当たることになる。

あることを決意していた凰 鈴音は当然というか、感じていた事務員もそのことに気付くことは無かったのだが。

さて、次の日の朝

「もうすぐ、クラス対抗戦だね」

クラスメートに囲まれて話し合っていた一夏だったが、1人が不意にそんなことを言い出す。

クラス対抗戦とは各クラスの代表がISにて競い合う文字通りの試合である。

ただ、1年の場合は代表候補生が専用機持ちでもない限りは現段階のレベルを見るという意味合いが強かったりするが。

それが来週に控えており、一組代表である一夏は当然出場しなければならぬ。

「織斑君、がんばってね」

「そうそう、フリーパスの為に」

などと笑顔で言うてくるクラスメート達。

なお、フリーパスとは学食で半年間デザートがただになるという物であり、クラス対抗戦の優勝クラスに配られるのだ。

一夏はそれほど興味は無いが、他のクラスメートとしてはぜひとも欲しい一品なのである。

「ああ、そういえば二組の代表が代わったのって知ってる？」

「確か中国から来た転校生だっけ？」

「転校生？ 今の時期に？」

と、クラスメートが話し合う事に一夏は首を傾げる。

まあ、入学式が終わってまだそれ程日が経ってない時期での転入なので疑問に思っただけなのだが。

「あら、今更ながらわたくしの存在を危ぶんでの転入かしら？」

「それは無いな」

「なんですって？」

「あはは……」

なぜか勝ち気な顔でそんなことを言い出すセシリアだが、篝のツッコミで睨み合いになってしまう。

このことに一夏は顔を引きつらせるが、実は2人はことあることにいがみ合っていたりする。

昨日のIS授業でも、一夏との訓練を巡っていがみ合っていたし。このことに一夏はなんで2人は仲が悪いのかと思ってしまうが、実は自分が原因の一端だとは気付いていなかったりする。

「でもまあ、どんな奴なのかな？ クラス代表代わったくらいだから、強いのかな？」

「今のところ専用機持ちは一組と四組だけだから、余裕だよ」

とりあえず、話題を変えようとそんな疑問を漏らす一夏にクラスメートの1人が答えた。

ちなみに四組の専用機持ちは簪のことだが、彼女の専用機は未だに未完成である。

このままでいつ完成するかわからないため簪は自分で組むことにし、一夏達は出来る限りの協力をする事となった。

ただ、今からではクラス対抗戦に間に合わないのは目に見えているので、今回は授業用に使われるISを使うことになるだろうが。

「その情報古いよ」

が、その時にそんな声が聞こえ、一夏を含めてクラスメイト達は顔を向けた。

そこにいたのは不敵な笑みを浮かべる凰 鈴音である。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝は出来ないから」

「あ、え？ 鈴^{りん}？ お前、鈴か？」

胸を張って言い放つ凰 鈴音 鈴だったが、その彼女を見て一夏は目を見開く。

なぜなら、一夏にとって鈴は親友に他ならないからだ。

「そうよ。中国代表候補生の凰 鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ！」

で、鈴はといえば相変わらず胸を張って自己紹介してたりするが。そのことでクラスが少しばかり騒がしくなる。

「だ、誰ですか？ 一夏様と親しそうに……」

一方でセシリアは鈴を思わず睨んでしまう。

まあ、一夏と親しそうに見えるので気になってしまっただけだが。ただ、それは篤も同じらしく、静かに睨んでいたりする。

「転校生って鈴だったのか……でも、どうして今頃IS学園に？」

「あ、それは、あいたっ!？」

鈴の姿に嬉しそうにしながらもそんなことを問い掛ける一夏。

鈴は赤くなりながら戸惑うが、不意に頭を叩かれてうつむいてしまふ。

「つゝ、なにする、の!?!？」

「何をしている? ショートホームルーム S H R の時間だぞ?」

「ち、千冬さん?」

「織斑先生だ。さっさと自分のクラスに戻れ」

それでもなんとなく振り返るものの、頭を叩いたのが千冬だとわかって怖じ氣づいてしまふ鈴。

まあ、彼女は千冬の怖さは身に染みているからなのだが。

「あ、はい。また後で来るからね」

なので、大人しく従い 一夏にそう言い放ってから、鈴は自分の教室へと戻っていった。

「あいつ……代表候補生になったのか……」

そんな鈴を一夏はどこか感心しながら見送っていた。

篤、セシリア、本音、千冬に注目されてるとも気付かずに。

で、時間は過ぎてお昼休み。

一夏達は待ち構えていた鈴に連れられる形で食堂へと来ていたのだつた。

「まさか、鈴もIS学園に来るとはな。なんで連絡してくれなかったんだ?」

「それじゃあ、劇的な再会にならないじゃないの」

「劇的って」

なぜか不満そうに返す鈴の言葉に問い掛けた一夏は思わず苦笑す

る。

そんな2人を一夏のクラスメイト達は注目していた。特に箒、セシリア、本音が睨むように見てたりする。

ちなみに簪も来ていて、一夏と鈴に気付いて箒達と同じ状態になっていたが。

「そういえば、丸1年になるのか？　いつ代表候補生になったんだ？」

「あんだこそ、ニュースで見た時はビックリしたわよ」

で、相席しつつ親しげに話す一夏と鈴。それに注目するクラスメイト&簪。

「そうそう。あんだって、まだ仮面ライダーになるとか言ってるの？」

そんな時、鈴は笑いながらそんなことを聞いてきた。

実は一夏、鈴ともう1人の親友とその親友の妹に目標の1つである仮面ライダーになるというのを話していたのだ。

まあ、その時はなんでそんな冗談をと笑われてしまったのだが。

「ああ、それか？　それなら、もごー!？」

それに対し一夏は笑顔で答えようとして、箒、セシリア、本音、簪に口をふさがれてしまったが。

「な、なによ？」

「ああ、気にしないで」

「馬鹿者！　そのことは安易に話してはいけないと言われていただろうが！」

「そうですよー！」

いきなりのことに戸惑う鈴。食堂にいた生徒達もいきなりのことに戸惑ったが、簪が無表情に右手を振りながらなだめる。

一方、箒とセシリアは小声で一夏に怒鳴っていたりする。

仮面ライダー部内の話し合いで、フォーゼのことはIS学園内では開発中のISということにすることにした。

むろん、見る者が見れば違うとすぐにわかってしまうが、かといっ

て真実を話すわけにもいかない。

なので、話題が沈静化するまではこの嘘で押し通すことにしたのだ。しかし、一夏は鈴とは親友だった為に話そうとして、それに勘付いた篤達に止められたのである。

「おほん。それでそろそろ説明して欲しいのだが？」

「そうですね。もしかして、こちらの方とつ、つつつ、付き合っておりますの？」

で、先程とは打って変わって詰め寄る篤とセシリア。その後ろには何気に簪と本音もいたりする。

「え？ あ、いや、私は」

「あ、ああ、そついやまだ話してなかったな。鈴とは幼馴染みなんだよ」

セシリアの言葉に赤くなる鈴であったが、先程のことで顔を引きつらせながらも一夏は素直に答える。

そのことなぜか鈴に睨まれてしまったが。

「幼馴染み？」

「そうか、篤はわからないよな。ちょうど篤と入れ違いで転校してきたから。」

こつちは前に話してた篠ノ之 篤。篤はファースト幼馴染みで、鈴はセカンド幼馴染みだな」

「ファースト」

そのことに気付いて紹介しつつそんなことを言い出す一夏。

それを聞いて問い掛けた篤は思わず嬉しそうな顔をしてしまうが。

「ふーん、そうなんだ？ 初めまして。これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

と、挨拶する鈴に篤も返事をする。なぜか睨み合って。

気付いたのだ。篤が、いや彼女だけじゃなくセシリアや本音、簪が一夏にどんな想いを抱いているのか。

「おほん。わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。」

わたくしの名前はセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生で、

先日一夏様とはクラス代表の座を賭けて

「あ、私、布仏 本音。よろしくねえ」

「更識 簪……」

で、なぜか自己紹介の後にあれこと話し出すセシリア。

そんな彼女を無視して本音と簪はさり気なく自己紹介してたりするのだが。

「そう。そういえば、あんたって一組の代表になったんだって？」

「ああ、まあ成り行きでな」

「ふうん。なら、私がISの操縦の練習見てあげようか？」

鈴も未だに話すセシリアを無視して一夏とそんなことを話し合っていたりするが

「ちよつと！ 聞いていらっしやるの!？」

「ごめん、私興味ないから」

「言ってくれますわね」

「というか、一夏に教えるのは私の役目だ！」

興味がないと言った様子で答える鈴に問い掛けたセシリアは思わず怒鳴ってしまい、それに箒まで加わってしまう。

その後、箒、セシリア、鈴の間で言い争いとなり、鈴が一夏とはいつも一緒にご飯を食べていたという話の真相を一夏が話した所でチャイムが鳴り、お開きとなった。

その時に一夏が思ったことは、この3人つてもしかして仲が悪いのか？と、自分が原因の一端だとは気付かずそんなことを考えてしまっただった。

「というわけだから、部屋を代わって」

「ふざけるな！ なぜ私が！」

夜、一夏と箒の部屋に来た鈴が両手を合わせつつそんなことを頼んできて、箒は怒った様子で断っていたが。

で、なんで鈴はこんなことを言い出したかということ

放課後、フォーゼとISの訓練を終えた一夏の元に鈴が訪ねてきたのである。

余談だが、篤達が来るまでの間に一夏はホッピングスイッチの練習をしてたりするが。

ともかく、そこで一夏は鈴に篤と同室であることを話してしまい、そのことに嫉妬した鈴がこんなことをしだしたのである。

一夏のことを想う身としてはライバルに負けてられるかという考えでの行動であったが。

「いや、篠ノ之さんも男と同室だと嫌でしょ？」

「べ、別に嫌では」

愛想笑いを浮かべつつそんなことを言う鈴に、篤はなぜか赤くなりながら答える。

このことにむつとする鈴だが、ふとあることを思いつき

「ところで一夏。約束覚えてる？」

「約束？」

「そう、小学校の頃のね」

赤くなりながら問い掛ける鈴の言葉に一夏は思い出そうとする。

その様子に篤はただならぬ気配を感じていたが。

「もしかしてあれか？ 鈴の料理の腕が上がったら」

「う、うん」

「毎日酢豚をおごってくれるってことだよな？」

「え？」

最初は期待の眼差しを向けていた鈴であったが、思い出そうとしていた一夏の言葉に顔をしかめる。

「だから、毎日俺に飯をごちそうしてくれるって約束だろ？ いや

、1人暮らしの身には、ってあた！？」

思い出せたと喜ぶ一夏であったが、直後に頬を叩かれてしまう。

で、叩いた鈴はといえば一夏を睨み

「最低！ 女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて！」

「あ、えつと、鈴……あのだな……」

鈴に言われて一夏は戸惑いつつも謝ろうとする。

「どうやら、間違ってるって覚えていたと感じたからなのだが」

「知らない！ 今度のクラス対抗戦で覚えてなさいよ！ けちよんけちよんに叩きのめしてやるから！」

鈴はといえば聞く耳持たずと言った様子で部屋を去ってしまうのだった。

まあ、昨日の事や今日のこともあるって、嫉妬心が爆発してしまったのもあるのだが。

「ええと……俺、やっぱり間違えて覚えてたのかな？」

「知らん……」

一方の一夏は気まずそうに問い掛けるものの、箒は呆れた様子でそう返すだけであった。

次の日の放課後。鈴は1人IS学園内を歩いていた。

あの後、一夏は謝りに来たのだが、鈴は徹底的に無視していた。

約束の意味を理解していなかった一夏に憤りを感じていたからだが。

「ん？ あれって」

そんな時、鈴は箒とセシリアがどこかへ行こうとするのを見かける。

気になった鈴は2人の後を追いつ、仮面ライダー部の部室となっている倉庫に来た。

「仮面ライダー部？ なによこれ？」

ドアの横の看板に書かれていた文字に首を傾げるが、直後に話し声が聞こえてきたので気付かれぬように様子をうかがうことにした。倉庫の中には箒とセシリアに本音と簪、それと鈴の見知らぬ女性とと衛理華がいるの見える。

「というわけなのだ」

「どうやら、箒は昨夜のことを話しているらしい。」

その話してる箒を見ると、昨夜の一夏のことにも呆れているよう

に見える。

このことに鈴は同意するようにならずにいたが。

「それはどうかしらね？」

「どういうことですか？」

が、衛理華は別のことで呆れているようだった。

鈴はこのことにむっとし、セシリアは疑問で首を傾げていたが。

「大抵の女の子って漫画やドラマみたいに告白に夢見てたりするけど、現実には甘くはないわよ。」

自分がそのつもりでも相手に告白してるって意志が伝わらないと、時には虚しいことになるしね」

「……え？」

衛理華の話に鈴は少しの間を置いて間抜けな声を漏らす。

一瞬、その話の意味を理解出来なかったからだが

「どういうことですか？」

「その鳳って子がどんな状況で告白したかはわからないけど、織斑君にはいつものように思えたんじゃないの？」

男の子は女の子とは感じ方がまるで違うもの。だから、告白してるって思わなかったんでしょね」

「あの……もしかして、経験があるんですか？」

気になった本音の問い掛けに衛理華はなぜか遠い目をしながら答える。

それを見た簪はそう思ったのだが、言われた衛理華はなぜか固まった。

まるで映像の一時停止のように

「ほ、星野先生？」

「あ、だい、じょうぶ、よ……ま、まあ、経験があるといえはああるわね。」

中学の時に……でも織斑君と同じで、相手は告白されてるって全然気付かなかったんだけど

「それって、相手が鈍感だったってことですかあ？」

「それもあるかもしれないけど……ある意味鳳さんと似たようなこと状況かもしれないわね。」

後から考えたら告白になってないようなものだったし……だから、あなた達も気を付けなさいね？

自分だけ盛り上がりつても相手に告白してるんだってわかってもらえないと……こういうことになるから……」

その様子に篤は戸惑うものの衛理華はなんとか気を取り直して説明し、本音の問い掛けにも顔を引きつらせながら答える。

衛理華が思い出すのは同窓会の時。その時に告白した男性は別の女性と結婚していた。

その時は告白したのにと憤ったものだが直後にその男性に告白の時のことを聞かれ、そのことに気付かされたのである。

以来、このことは衛理華の中では軽いトラウマになっており、男性とこれといった付き合いが出来なくなったのだった。

そんな衛理華を見て、篤達は沈痛な面持ちで見守るしか出来なかった。

一方、話を聞いていた鈴は呆然としながらその場から離れていた。そんなはずは無い。だって、あれは夕暮れ時の小学校の教室での告白。

シチュエーション的には漫画やドラマなどで良くある光景だ。

それであること言われたら告白だと思うはず。少なくとも鈴はそう考えていた。

でも、先程の話であることを思い出す。一夏の鈍感さに。それで告白されると気付かれなかったのでは？

そう思ってしまったのだが、ある意味当たっていたりする。まあ、それプラスに幼すぎたというのがあるだろう。

小学生、それに男の子となればそういったことに疎くてもおかしくない。

鈴はそのことまで思い至らなかったが、考えられることにどうしようかと思ってしまう。

「あ」

そんなことを考えていたためだろうか？ 鈴は足をもつらせて転びそうになった。

それでも運動神経の良さからなんとか倒れずに済んだが

「へ！？」

直後に自分の横にあった街路樹が凄いい音と共に砕け折れたことに驚いてしまう。

「な、なに！？」

鈴は慌てながらもその場から逃げ出して辺りを見回すが、自分以外に誰かがいる様子が無い。

なんだかわからないけどマズイ。そう思った鈴は更に逃げだそうとするが

「あぐ！？」

殴られたような衝撃を受けたと思った瞬間には飛ばされるような形で地面に倒れていた。

幸いというか、逃げだそうとした時に衝撃を受けたので大して怪我をしなかったのだが

「く、あ……」

痛みがひどくて立ち上がるのも困難であった。そんな中、鈴は見失ってしまう。

まるで景色から染み出すように姿を現す、カメレオンの姿をした怪人を

「な、なによ……あなた……」

問い掛けながら逃げようとする鈴だが、痛みで体がまともに動かない。

怪人はいえ、無言のまま右手を構えつつ鈴に近付こうとしていた。

「う」

「鈴！」

このことに鈴が恐怖を感じた時、一夏が駆け付けてくる。

一夏は訓練の為にアリーナに向かっていたのだが、その際に街路樹が碎ける音を聞いて駆け付けたのだ。

「一夏……馬鹿、逃げなさい！ こいつは私が」

なんとか立てた鈴はISを発動させようとする。

何者かはわからないが、襲ってくるなら対応しようとしたのだが

「あ、ちよつと!?!」

一夏は鈴の言葉を見無視して、フォーゼドライバーを装着しながら彼女の前に立っていた。

鈴はそのことに驚くが、一夏はすでに赤いスイッチを全て下ろしており

《スリー ツー ワン》

「変身!」

「きゃ!?!」「うむ!?!」

ポーズと共に変身し、その衝撃に鈴と怪人は顔を背けてしまう。その衝撃が収まったことで鈴と怪人は再び顔を向け、そこでフォーゼへと変身した一夏の姿に目を見開くはめとなった。

「い、一夏?」

「なんだ、貴様は!?!」

戸惑う鈴と怪人。そんな怪人に一夏は握りしめた右手を向ける。

「仮面ライダーフォーゼだ!」

「か、仮面ライダー? ふざけるな!」

名乗る一夏だが、怪人は馬鹿にされたと思って襲いかかってきた。

「くう! うおおおお!」

「ぐう!?!」

そのままつかみ合いとなって牽制し合う一夏と怪人だったが、それをふりほどいた一夏が怪人を殴る。

「仮面ライダーって、あれってISじゃないの?」

「大丈夫か?」

その光景を見つめる鈴はそんな疑問を感じながらも、同時にあることを思い出す。

中学の時に一夏が話していた目標のことを。まさか、本当に叶えたのかと思つた所で箒達が駆け寄つてきた。

一夏が変身したことを衛理華が機器で感知し、状況を確かめる為に来たのである。

「おりゃ！」

「くう！？」

一方、一夏と怪人との戦闘は一進一退の攻防を繰り返していた。殴られたら殴り返す。そんな様相になっていたのだが

「ううう」

「え？ 消えた？ って、おわ！？」

怪人の姿がいきなり消えたかと思うと、一夏はまるで殴られたかのように地面に倒れた。

「な、なんだ、って、うわ！？」

戸惑いながらも立ち上がろうとする一夏だが、今度は突き飛ばされたような衝撃を受けて吹っ飛んでしまう。

「く、うわ！？」

「ど、どうなってますの！？」

「まさか、姿を消してる？」

「くー！」

その後もまるで殴られているかのようにふらつく一夏。

そのことにセシリアは戸惑うが、簪が怪人の姿を思い出してそのことに思い至つた。

一方、それを聞いた箒はなぜかどこかへと走り去つてしまう。

「くそ！ どこにいるのかわかれば！」

ただいいように攻撃を受け続けながらも一夏は耐えていた。

でも、今の状況では相手の位置がわからず、どうすることも出来ない。

「そうだ！」

その時、何かを思いついた本音はバガミールを取り出し、カメラスイッチをセットして変形させる。

「バガミール、お願い！」

本音の願いにバガミールはうなずくと一夏の方へとカメラを向け、少ししてから赤いレーザー光を発射する。

そのレーザーはまっすぐに伸びていくが、一夏の横でそこに壁でもあるかのように止まってしまった。

「おりむー！ そこにいるよ！」

「サンキュー、のほほんさん！ おりゃあ！」

「ぐわあ!？」

本音の言葉に礼を言いながら握りしめた右の拳を突き出す一夏。

突き出す先はレーザーの先端がある場所。そこに右の拳が当たると、怪人が姿を現しながら吹っ飛んでいった。

説明するとバガミールはカメラスイッチの能力であらゆる方法で撮影が出来る。

その能力で撮影したことで普通ではわからない変化を捉え、怪人を見つけ出したのだ。

それとこれは余談だが本音のおっとりとした性格からか、一夏は彼女のことをのほほんさんと呼ぶようになった。

そのことで衛理華と真耶を除く仮面ライダー部の面々に睨まれていたりしたが。

「くおおおお！」

「く！ うお!？ ちょこまかと！」

と、怪人は姿を消すのは無駄だと悟ったのか、今度は跳び回りながら襲いかかってきた。

その動きに翻弄された一夏は殴られながらも耐え、ある物を取り出す。

「あれは……ダメ！ そのスイッチは」

それを見た簪は思わず叫んでしまう。

なぜなら、一夏が取り出したのはホッピングスイッチ。

その能力を見た千冬が役に立たないと判断して使用するなど言っていたのだ。

「でも、これじゃなきゃあいつに追いつけない！」

《ホッピング》

しかし、一夏はそう言い返しながらドリルとスイッチを入れ替え

《ホッピング・オン》

ホッピングのスイッチを入れ、左足にホッピングを装着する。

そのことに怪人は身構えるが

「よ！　っと！　は！　っと！」

「く、くう！　ぐあ！？」

縦横無尽に跳び回る一夏に逆に翻弄された怪人は戸惑い、更にはホッピングが装着された足で蹴り飛ばされていた。

「まさか、使いこなしてるの？　あのスイッチを」

「て、ていうか、なによあれ？」

その光景に簪は目を見開いていた。

使えなかった物を使いこなしている。それが簡単ではないことを簪は知っている。

知っているからこそ驚き　心に熱い物を感じてしまう。

一方で鈴は別の意味で目を見開いていた。

明らかにISとは違う戦闘にISらしくないフォーゼ。

というか、あれは本当にISなのかと思えてくる。

なぜなら、ISならバリアー機構があり、それが働くはずなのだ。

でも、フォーゼはそれが動いているようには見えない。

「おおおおお、うわ！？」

「おりむー！？」「一夏様！？」「織斑君！？」「一夏！？」

そんな中、怪人を攻撃しようとした一夏であったが、不意に飛んできた人影に襲われて体勢を崩してしまう。

そのことに鈴達は驚くが、一夏は背中への噴射を使いホッピングのスイッチを切りながらなんとか着地した。

その間に人影が怪人の横に降り立つが

「なに、あいつ」

「あれは」

その姿を見て鈴は戸惑う。なぜなら、その人影はサソリを象った仮面の怪人だったからだ。

一方で簪はそのサソリの怪人を真剣な眼差しで見ている。

なぜなら、そのサソリの怪人が纏うマントに見覚えがあるからだ。

あの時、自分にスイッチを渡した者と同じマント。ということは

「くそ、仲間か」

「行け……」

「く、わかった……」

サソリの怪人を見て構える一夏。

一方、サソリの怪人の言葉にカメレオンの怪人は戸惑いを見せるものの、すぐにどこかへと行ってしまふ。

「あ、待て！ って、うわっと!?!」

一夏はそれを追いかけようとするが、サソリの怪人がマントを脱ぎ捨てたことと思わず足を止めてしまふ。

サソリの怪人はいえば、星座のように並ぶ体にあるレンズ状の物を輝かせながら構えていた。

「くそ、やるつてのか!」

そのことに一夏はそう判断して立ち向かうが

「く! うお!? くう!」

「はあ!」

「うわあ!?!」

カメレオンの怪人よりも巧みに動くサソリの怪人の動きに翻弄され、一方的に攻撃を受けてしまふ。

「くっそ、さっきの奴よりも速い! てりゃあ!」

「ふん!」

「うわああああ!?!」

「一夏あゝ!?!」

それでもなんとか耐えて立ち向かおうとするのだが、サソリの怪人が頭にあるサソリのしっぽを伸ばして一夏を大きく突き飛ばして

しまつ。

そのことにセシリア達は息を呑み、鈴は叫ばずにはいらなかった。

「くう！」

「一夏！」「一夏様！」

そのまま地面に倒れる一夏。その彼にサソリの怪人は近付こうとする。

それを見て鈴とセシリアは自身のISを起動させようとするのだが

「うおおおおおおお！！！」

「む！」

叫びと共に振り落とされる何かに気付いたサソリの怪人が跳び退く。

直後に地面に振り落とされたのはパワーダイザーの拳であった。

「大丈夫か、一夏？」

「箒か……助かった……」

そのパワーダイザーから聞こえる箒の声に一夏は素直に礼を漏らした。

そう、先程箒が走り出したのはパワーダイザーを取りに行くためだったのだ。

ただまあ、少々時間が掛かって今頃になってしまったのだが。

「ふむ、こんなものか……」

と、サソリの怪人は小声で呟いたかと思うと、どこかへと行くこうとしてしまつ。

「待て！ く……」

「おりむー！？」「一夏様！？」「一夏！？」

一夏はそれを追いかけてようとするが、ダメージを受けすぎたせいかよるめいて地面に膝を付いてしまつ。

そのことに本音やセシリア、箒が驚いて慌てて駆け寄る。簪も驚きを隠さずに駆け寄っていたが。

「何よこれ……何が起きてるの？」

「話してやる。だが、これは他言無用だ」

「え？ 千冬さん!？」

一方、終わったと実感した途端に異常な事態であると気付いて困惑する鈴。

そんな時に真耶と共に横にいた千冬の言葉に思わず驚いてしまうが。

「やれやれ、これは思った以上に深刻かもしれないな」

そして、状況を見てそう思わずにはいられなかった千冬は深いため息を吐く。

それは確実に何かが起きているということを感じさせ、これからどうすべきかと悩まずにはいられない。

そんな悩みを抱えながら、千冬は天を仰いでいたのだった。

第6話『幼馴染み・セカンドオン!』（後書き）

そんなわけでセカンド幼馴染み襲来編の始まりです。

そして、今回もはしより気味……うん、この癖なんかしないダメだよね^^;

それはそれとして、少しずつ力を蓄えていく一夏達。

そんな中でセカンド幼馴染みが来たり、強敵が現れたり大変だったりしますが。

今回は今回の怪人の真相に近付いたり、ゾディアーツと名前が付いたりとなお話です。

では、次回またお会いしましょう。

第7話『幼馴染・アタックオン!』

「つまり人をあんな風にしちゃう奴らがいて、一夏はそいつらと戦ってるってこと?」

「まあ、そういうことになるかな?」

その後、鈴への事情説明や状況確認の為に仮面ライダー部の部室となっている衛理華の研究室に来た一夏達。

そこには連絡を受けた楯無と虚の姿もあった。で、鈴は一夏からこれまで話を聞いていたりする。

「凄い……なんて動きなの……」

「ああ、もしかしたらIS以上かもしれないな」

一方で千冬、真耶、楯無らはバガミールに記録されていた先程の戦闘を見ていた。

そして、真耶のようにサソリの怪人の動きに思わず感嘆してしまう。なにしろ、ISでは出来ないような曲芸的な動きが出来るくらいに自由度が高すぎる。

地上戦に限定すればISを圧倒出来るかもしれないと千冬が思えるくらいの物だった。

「にしても、何者なんでしょう?」

「ゾディアーツ……」

「え?」

事情は聞いてはいたものの、初めて見るフォーゼと怪人との戦いに戸惑いつつもそんな疑問を漏らす虚。

そんな彼女の疑問に答えるように聞こえてきた声に虚は思わず振り向いてしまう。

その先にいたのは閉じた扇子を持った手であごに当てている楯無の姿であった。

「ああ、前に出た奴の体やあのサソリみたいな奴の体にあるレンズ状の物が星座のように並んでるでしょ?」

その星座　ゾディアックをもじってみただけど、どうかしら？」
「まあ、奴らのことは何もわかってないしね。暫定的に呼んでも問題は無いか……」

にしても、思った以上に早く動き出したわね」

苦笑混じりに説明する楯無の話聞いた衛理華はため息を吐きながらそんなことを考える。

奴らがまた動くとは思ってはいた。しかし、数日で動くとは思っていなかっただけに頭が痛いことではあったが。

「こうなると、あいつらが持つてるスイッチが1つや2つじゃない可能性が高いわね」

「あの……多分だけど、このサソリみたいなからスイッチを受け取ったと思う」

「本当か？」

「うん……あのマントとか見覚えがあつたし」

ため息混じりにそんなことを考える衛理華の横で、簪は右手を軽く挙げながらそんなことを言い出す。

それ聞いた千冬が確認の為に問い掛けると、簪はうなずきながらそう答えた。

「となると、この人が黒幕なんでしょうか？」

「そうとは限らないだろうが、少なくともただ者ではない。まったく、せめてISが自由に使えればな」

それを聞いて真耶はそう考えるが、千冬は否定しつつもそんな考えに苦虫を潰したような顔になる。

怪人　ゾディアーツとの戦闘でISが使えないのは以前も話したが、そのせいで一夏が戦わなければならぬ。

実を言えば自衛などを理由にしてISを使うことは出来なくはない。ただ、そうなるというつかの問題も出てくる。

例えば、ゾディアーツの扱いをどのようにするかということ。このことは下手をすれば国家間の問題にもなりかねない。

もう1つがコズミックエナジーの早期露見の危険性。今回のゾディ

アーツ騒ぎでコズミックエナジーがいずれ世間に知られる可能性は十二分にあった。

これは様子を見て必要と感じたら対策を講じるつもりではいるが、対策が成されないままに知られるのは大きな混乱が起きる可能性が高くなる。

それを避けるためにはISでの戦闘は可能な限り避けたいという目論見があるのだ。

後1つは被害の軽減だ。ISは使われる機体にもよるが、多くは火器、重火器を装備している。

そんな物を使えば当然公共施設などが破壊されるのは目に見えていた。

むろん、場合にもよるが、それを避けるためにもISの使用を極力避ける必要があったのだ。

他にもあるがこれらがネックになっているせいで、ゾディアーツとの戦闘にISを出したくても出せないのである。

千冬もなんとかしようとしてはいるが、今は一教師でしかない彼女では簡単に解決出来ることもなかった。

「ま、今確実にわかることはあいつらが格上の相手だったことでしょうかね」

「どういうことですか？」

「同じコズミックエナジーを用いながら、あいつらはスイッチ1つであそこまでの力を出している。」

機能を限定してのもあるんでしょうけど、コズミックエナジーに関する理解力と技術力はあちらの方が上でしようね」

話を聞いて疑問に感じた篤に衛理華はため息を交えながら答えた。相手は確実にコズミックエナジーの活性化方法がわかっている。そう思う理由は簪であった。

あの事件後、簪にフォーゼドライバーを持ってもらったが、コズミックエナジーは活性化したものの篤よりも低いレベルでしかなかった。

最初にゾディアーツになった川岸にいたっては反応すらしない。

このことで衛理華はコスミックエナジーの活性化には人のなんらかの感情がキーになっているのではと推測を立てていたりする。

そう考える理由としては川岸や簪がなんらかの形で憎悪を抱いていたという事実があるからだ。

しかし、推測止まりなのは一夏の存在だ。一夏は憎悪といった物は持っていない。

それなのに一夏はフォーゼドライバー単独でフォーゼに変身出来るほどにコスミックエナジーを活性化出来る。

この違いがわからない為に推測でしかないのである。

「そちらの方は後で考えよう。今は今回襲ってきた奴　ゾディアーツがどうしてくるかを考えることだ。」

なにしろ、目的がまったくもってわからないからな」

「でも、あの後から誰かが襲われたりとかの報告は無いんですよ腕を組みながら話す千冬であったが、真耶は考えた様子を見せながらそんなことを言い出す。

あれからまだ数十分しか経ってないが、今のところ誰かが襲われたりしたなどの報告は無い。

その事実にも誰かが考え込んでしまうが

「様子を見ているということか？」

「もしくは、最初から鈴さんが狙いだったということでしょうか？」

「わ、私!？」

「それもありえなくはないわね」

篝の意見の後にセシリアはそんなことを言い出した為に、鈴は自分を指差しながら驚いてしまう。

それに対し、衛理華は納得といった顔をしていたが。

「まあ、まだ事例が少ないから断定するのは早計だけど、これまでこのことを考えるとありえなくはないもの」

「ということは、凰に恨みを持つ者の犯行ということか？」

「可能性としてはね。もしそうだとしても、問題は誰がやったかに

なるけど」

「そ、そんなことを言われても」

千冬の考えに話していた衛理華は肩をすくめながら答える。

確かに今までゾディアーツになった者は何かしらの恨みや憎しみなどの感情に囚われていた。

それを考えるとありえなくもないが、かといって事例が少ないので断定するわけにもいかない。

ただ、恨みなどによるものだとすると誰がということになるのだが、鈴が戸惑ったように誰がそうなのかという断定が難しい。

情報が無いというのもあるが、可能性としてありえる数が多くなる場合もあるからだ。

「今の所は様子を見るしかあるまい。今日の訓練は休みとするからお前達は寮に戻れ。」

ただし、何かあったらすぐに連絡するんだぞ」

「ああ、わかったよ」

千冬の言葉にうなずく一夏。確かに現状では調べようにも情報が少なすぎる。

だから、また現れてもいいようにしようと思ったのだ。

そんなことを考える一夏を鈴はただ静かに見守っているのだった。

で、寮に戻った鈴だが、これからのことを話そう一夏の部屋に行ってみたものの幕と共に部屋にはいなかった。

どこに行ったのだろうかと探し回って屋上に来て

「あれ？ どうしたの？」

「あ、一夏に用があつて、ってあいつは」

そこにいた簪に聞かれた鈴は少し困った様子を見せながら答えようととして、その光景を見て呆れてしまう。

屋上には本音や篝、セシリアに一夏もいたのだが
ぜに変身してホッピングで屋上を跳び回っていた。

一夏はフォー

「いつ戦いになってもいいように慣れておこうと思ったんだけど」「なるほど……一夏も相変わらずねえ」

「ん？ いたのか。で、相変わらずとは？」

簪の言葉に呆れる鈴であったが、鈴がいたことに気付いた簪が問い掛ける。

その問い掛けに鈴はどこか遠い目をしながら一夏を見つめ

「私が中国に戻る少し前だったかな？」

なんでかわからないけど、一夏つてばいきなり仮面ライダーになるつて言い出して、体を鍛え始めたのよ。

理由を聞いたら仮面ライダーに助けてもらったとかなんとか言ってたわね。

その時は何言ってるんだかって思ったものだけど

「そうなんだ」

どこか楽しそうにしながら話す鈴。

ある事情から中国に戻るようになった鈴だが、その数ヶ月前に一夏は先程話していたようなことを言い出し、その時は一夏の親友と共に呆れたものだが、

だが、その頃から一夏なりに体を鍛えるなどの努力をしていたのと今回のことで仮面ライダーになるのが本気だと知り、少し複雑な気分でもあったが。

それを聞いていた簪は一夏を見つめながら返事をし、簪達も釣られるような形で一夏を見守っていた。

未だにホッピングで跳び回ったり、時には着地してバランスを取ったり。

今でもその努力を怠っていないことに鈴は安心するが、その一方で不安も感じてしまう。

「あいつ、本当に仮面ライダーになるつもりなのかな？」

「不満、なのか？」

「不満というか……さっきだって、かなり危ない目にあってたのに

……」

首を傾げる筈に思わず漏らした鈴は不安そうにそんなことを告げる。

先程の戦いで一夏はサソリ姿のゾディアーツに圧倒されていた。もしかしたら、命の危険さえあったかもしれない。でも、今の一夏を見ているとやめる気が無いように思える。

それが鈴を不安にさせていた。もし、このまま戦ったら一夏は「織斑君に何があつたかはわからないけど……でも、きっと大切なことだつたんだと思う。」

仮面ライダーになるのを目標にする位に　だから、簡単にはやめないと思うよ」

一夏を見つめながら簪は思ったことを口にしていった。

こんな時に言うのもなんだが、簪は勸善懲悪のヒーロー物が好きだったりする。

だから、一夏と一緒にいるのかといえは少し違う。

一夏を見てるとそういうヒーローとは違うような気がするのだ。それがなんなのかを確かめる為に一夏と一緒にいたりするのだが。

「目標……か」

そんな話を聞いていた筈はうつむきながら考えてしまう。

自分にとっての目標。筈はそんなことを考えたことが無かった。

ある事情から筈は家族と共にあちこちを転々とし、いつの間にか家族とも離ればなれになってしまった。

その原因を作った姉を恨めしく思わなかったこともないが、そんなことをあつて考えたことも無かったのだ。

だから、話を聞いて思ってしまう。自分にとっての目標はなんなのかを。

「よつと。あれ、鈴？　来てたのか？」

「お疲れ、おりむー」

「お疲れ様です、一夏様」

そんな時、ホッピングを解除してやってきた一夏に本音とセシリアが笑顔で声を掛ける。

その後、鈴や簪を交えて雑談をする一夏であったが、そんな彼を簪は羨ましそうに見つめるのであった。

次の日のSHR。ショートホームルーム鈴は頼杖をしつつぼんやりとしていたのだが

「如月 未来さん？ お休みかしら？ 連絡は受けていないんだけど」

首を傾げながらも不安そうにしている女性教師の姿を見て、まさかという考えが浮かんでしまう。

なぜなら如月は鈴が代わる前のクラス代表だったのだから

「つまり、その如月さんって人が昨日のゾディアーツかもしれないってことか？」

「たぶん……なんか今日は連絡が取れないみたいだし……」

で、昼休み。食堂でそのことを聞いて問い掛ける一夏に鈴がうなずく。

あの後、気になった鈴は担任に話を聞いたりしたのだが、結果は未来がゾディアーツの可能性が高いというものだった。

「なぜそう思うのだ？ 二組の前のクラス代表とは聞いてはいるがまさか、強引にクラス代表の座を奪ったのか？」

「強引というか……その時は頭を下げてお願いしたんだけど……考えてみたら、そうかも……しれない……」

視線を向けながら問い掛ける筈だったが、鈴は落ち込んでいきながら答えていく。

未来にクラス代表を代わってもらおうようお願いしに行った時、鈴は何度も頭を下げながらお願いしていた。

その時はそんなこともあって気にも止めなかったが、その様子を見ていたクラス中が未来よりも鈴の方がクラス代表にいいという流れになってしまったのだ。

ただ

「でも、先生はそれとは別の理由で私をクラス代表にしたみたいなんだけど」

「別の理由とは？」

「うん、なんでもね」

訝しげな顔をするセシリアに話していた鈴はうなずいてから担任と話していた時のことを話し始める。

それはS H Rショートホームルームが終わった後、なぜ自分をクラス代表にしたのかを問い掛けた。

確かにあの時はクラス中があのよう流れになっていたのは確かだ。でも、最終的に鈴をクラス代表にしたのは担任の鶴の一声だったのである。

「最初はクラス全員がI Sを動かしてみて、その中で見込みがある人にクラス代表を務めてもらおうと思ってたの。」

それで見込みがあつた如月さんをお願いしたんだけど」

最初はにこやかに話していた担任であつたが、次第に表情が曇ってしまう。

どうしたのかと鈴は気になっていたのだが

「そのせいなのかはわからないんだけど、如月さんは無茶な訓練をするようになってしまったの。」

言つて止めようとはしたんだけど、如月さんは聞く耳持たずで感じて……

このままだと体を壊すだけじゃ済まなくなりそうで、どうしようかと思つてた時に凰さんが言い出してくれたから」

苦笑混じりに話す担任であるが、聞いていた鈴は胸が痛む思ひだつた。なぜなら

「それで鈴ちゃんにバトンタッチしたつてわけかあ」

「でも、如月さんには鈴さんにクラス代表を奪われたと思つてしまつた」

「恨みを抱くには十分ではありませんわね」

うなずく本音ではあつたが、簪とセシリアの言葉に鈴はつらそう

にうなずく。

理由はなんであれ、クラス代表の座を奪われたようにも見えなくはない。それで未来が鈴に恨みを抱いたとしてもおかしくはないだろう。

「でも、だからといって襲ってもいい理由にはならないよな」

「確かに」

しかし、真剣な顔の一夏の言葉に箒は同意するようにならず。自業自得はともかくとしても、襲われた方はたまったものではない。それにゾディアーツの力で襲われようものなら、ケガだけで済まなくなる可能性もある。

といつても一夏はそこまで考えていたわけではないが、どのみちゾディアーツを止めなければと思っていた。

「ともかく、学校が終わったら千冬姉達にこのことを話して、その如月さんって人を探してみよう」

「私も姉さんに話しておく」

故に一夏はそんなことを言い出し、簪も同意しながらそんなことを漏らす。

箒達もうなずく中、鈴はどこか決意を秘めた眼差しをしているのだ。

そして放課後。鈴は1人でIS学園内を歩いていた。

本当は仮面ライダー部に集まることになっていたのだが、鈴なりに責任を感じて解決しようと考えたのである。

「あぐ!?!」

そして校舎の屋上に来た時、鈴は痛みを伴う衝撃を受けて吹っ飛び、そのまま床に倒れてしまった。

「う、いつ……う、なに、が……あ」

なんとか痛みに耐えながら鈴は顔を上げる。

そして、その先で何も無い風景から姿を現すカメレオン姿のゾディ

アーツがいたことに気付いた。

「く、あなた……如月、未来……さん、なの？」

まだ痛む体に耐えながら、鈴は体を起こしつつ問い掛ける。

それが聞こえた為か黒い渦のようなものがゾディアーツを包み、それが消えるとIS学園の制服を着た背中まで伸びる黒髪を持つ生徒の姿へと変わっていた。

「良くわかったわね？」

「そりゃま……心当たりはあったしね」

睨みながら問い掛ける生徒に鈴は痛みを耐えながらなんとか立ち上がる。

そう、この生徒が如月 未来なのだが、睨んでくる彼女を見て鈴は心を痛めた。

やはり、自分がクラス代表を奪ってしまったから、こんなことをしてるんだと思つて。

「なんで、こんなことを？ やっぱ、私がクラス代表になったから？」

だから、鈴は確認の為に改めて問い掛けるが、未来はそれを聞いて憎悪を露わにしたことに思わず目を見開いてしまう。

「そんなのは関係無い！ あなたは……あなたは私の努力を踏みこじった！」

「え？」

未来の叫びを鈴は理解出来なかった。

だが、少しして担任の話の思い出しではつとすることとなったが。

「努力つて、あの訓練」

「いつもそうだ！ 私はいつだって努力してきた！なのに……なのにいつも一歩足りなくて……結果を出せなかった……」

「え？ それって」

そうなのだろうと鈴は思ったのだが、未来が悔しさを爆発させるように叫び、最後の方では涙まで流してしまう。

その様子に鈴はわからずに戸惑うだけであった。

如月 未来はいわゆる努力型の人間だ。才能が無いのを自覚し、それでもなお勉強や運動を努力して良い結果を残そうとした。

そう、残そうとしたのだ。だが、これまでその結果が出る事が無かった。

未来はそのことに努力が足りないと思い、より一層の努力を重ねたのである。

そして、未来自身がついにその努力が実を結んだと感じた時がきた。IS学園の入学とクラス代表の選定だった。

そのことに手応えを感じた未来はクラス対抗戦で優勝を目指すべく更なる努力を重ねたのだが

「やっと、今までの努力が報われる……そう思っていたのに……なのに、あなたはそれを邪魔をした!」

「そ、それは……」

悔しさを隠さずに叫ぶ未来に鈴はつらそうな顔をしながら困惑していた。

未来に何があったのかはわからないが、今まで色んな努力をしてきたのだろうというのはなんとなくわかった。

でも、自分がクラス代表になったことでそれを邪魔してしまい、彼女の努力を邪魔してしまったのだと思ったのだ。

「あ、その、ごめん」

「いえ、あなたが謝る必要はありません」

「「え?」」

だから、鈴は謝ろうとしたのだが、そんな時に聞こえた声に未来と共に振り向いてしまう。

その先にいたのは楯無と簪に虚、それに本音とセシリアや千冬であった。

で、その楯無はといえば開いた扇子で口元を隠しているのだが、その扇子にはなぜか努力という文字が達筆調に書かれていたりする。

「如月 未来さんでしたわね? あなたがゾディアーツの疑いがあると聞いて、失礼を承知で少々調べさせて頂きました。」

それを踏まえて言わせて頂きますとあなたは努力の仕方を間違えている。

正確には努力をしすぎて、先のことを考えていないと言うべきかもしれないですね」

未来を見据えたまま話す楯無。

どういうことかといえは、未来は過度に努力してしまう傾向があったのだ。それこそ、体を壊しかねない程に。

今まで結果が出なかったのもそれによつて体を壊しかけ、本来の実力を発揮出来なかった為であった。

そして、担任はその一端を見ており、その危険性から鈴へとクラス代表変えたのである。

「努力をするのは悪いことはありません。

ですが、その仕方を間違えれば、時には自分の身すら滅ぼすことになりかねないのでですよ」

「うるさい！ お前達に何がわかる！ 選ばれただけのお前達に！」

「ふざけないで！」

「ええ、そうですね！」

「その通りだな。凶に乗るなよ、小娘」

見据えたままに話す楯無だが、未来はその話を否定するかのよう

に叫んだ。

しかし、その叫びに鈴とセシリア、千冬が反論する。

「選ばれただけですって？ んなわけないでしょ！ 代表候補生に

選ばれるのってどんなに大変なのかわかって言ってるの！？」

「そうですね！」

「その通りだ。何もせずに上に行くことが出来るわけがなからう。

自分がそうでなかったからといって卑下するのは大概にしるよ？」

反論する鈴とセシリアに同意するように千冬もうなずく。

鈴の場合、IS適正がAだとわかってから努力を重ねたことで専用

機持ちの中国代表候補生に選ばれた。

セシリアもある事情もあるのだが、同じように努力して今の立場に

いる。
だから、それをただ選ばれただけと言われた為に怒りがわいてしまったのである。

千冬も教師の立場上そういった者達を何人も見てるし、自分自身も苦勞を重ねて今という立場にいる。

だから、未来の言ってることは戯れ言にも聞こえるのだ。

「う、うるさい！ お前達なんか……お前達なんかあ！？」

《ラスト・ワン》

それに対し、逆上した未来は簪がゾディアーツになる際に使ったスイッチを取り出すと、そのスイッチが不気味な形へと変化してしまふ。

しかし、未来はそのことに気付かずにスイッチを押し

「う」

「うそ……」

蜘蛛の巣のような糸が体中に巻き付いた状態で気を失い倒れ、その横にカメレオン姿のゾディアーツが姿を現した。

そのことに鈴は驚くが

「うおおおおお！！！」

「え？ きゃああああああああ！！！」

ゾディアーツが舌を伸ばしたかと思うと鈴の体をつかみ、そのまま学園の外に投げ飛ばしてしまう。

「鈴さん！？」「鈴ちゃん！？」

「く！？」

そのことにセシリアや本音が叫び、虚や簪も驚きと共に顔を向けていた。

鈴はといえばなんとか正気に戻ってISを展開しようとしたのだが

「やれやれ、あなたは覚えておくべきです。時として努力だけではダメだということを」

そんな中、楯無はつばやきながら扇子を閉じると共に、鈴に向か

って何か飛び出してきた。

「え？ きゃ！？」

そのことに驚く鈴であったが

「ほへ？」

抱きかかえられているとわかって、思わず呆然としてしまった。

「大丈夫だったか？」

「え？ 一夏？ え？ え？ えええ！？」

声を掛けられたことでフォーゼに変身している一夏だと気付いた鈴であったが、その彼にお姫様抱っこされると気付いて驚いてしまう。

「まったく、ちょっと怒らせすぎじゃないかしら？」

「その辺りに関してはお詫びいたします」

で、着地してホッピングを解除する一夏から少し離れた所にいる衛理華がモバイルPC越しに話し掛けると、楯無もバガミール越しにこやかに頭を下げる。

そう、一夏はすでに来ていて、楯無の指示で地上で待機していたのだ。

で、バガミールを通してレーダーのモニターで今までの話を聞き、鈴を投げ飛ばされたのを見てホッピングで跳んでキャッチしたのである。

ちなみに箒もパワーダイザーに乗って待機していたが、屋上から見ているセシリア、本音、簪、千冬と共に一夏に抱えられている鈴を睨んでいたりする。

余談だが真耶も衛理華の横にいて、こっちはなぜか羨ましそうに見ていたが。

「あなた達い〜！？」

一方、馬鹿にされたと感じたゾディアーツは構えを見せるのだが

「あら？ 私達だけに構って良いのですか？」

《マジックハンド》

楯無は動じた様子を見せず、その間に一夏は鈴を降ろしてから口
ケットスイッチを別のスイッチに交換し

《マジックハンド・オン》

「おりゃ！」

「え？」

その交換したスイッチのレバーを入れて右腕にピンク色の長いア
ームとなった物を装着し、それを伸ばしてゾディアーツをつかみ

「おりゃ！」

「きゃあああああああああ！！？」

そのまま引きずるようにゾディアーツを地上へと落とす。

「あく！？」

「言つとくが、体を伸ばせるのはお前だけじゃないんだよ」

「くう……」

マジックハンドを解除して顔を向ける一夏に、そのまま地面に倒
れたゾディアーツは睨みながら立ち上がるうとしていた。

「うるさい！ お前も私の努力の邪魔をする気か！？」

「ふざけんな！ お前に何があったかは知らないが、こんな努力は
俺は絶対に認めない！」

かがむような形で構えるゾディアーツの言葉に一夏は叫び返す。

一夏は未来に何があったかは知らない。かといって、人を襲うこと
を努力とするのは認める訳にはいかなかった。

「あああああ！！」

「おりゃ！」

「あくう！？」

だから、襲いかかってきたゾディアーツを容赦なく蹴り飛ばす。
ゾディアーツを 未来を止める為に。

「は！」

「がつ！？」

《チェンソー・オン》

それでも手を休めずにゾディアーツを殴り、怯んだ所でセットし

ていたチェンソーのスイッチを入れ

「おお」

「ぐあ!?!」

「 おおりゃ!?!」

「 ああああ!?!?」

そのチェンソーが装着された右足を振ってゾディアーツの胸を切り、更に宙返りをしながら下から上へと切り裂いていく。

それによってゾディアーツは火花を上げながら吹っ飛び、地面へと倒れていった。

《ランチャー ランチャー・オン》

その間に一夏はチェンソーを解除してからランチャースイッチに入れ替えてスイッチを入れ

「いっけえ!?!」

未だに装着していたリーダーでロックオンしてからランチャーのミサイルを解き放った。

「く、あ! きゃああああああああ!?!?」

立ち上がるゾディアーツだったが直後にミサイルが直撃し、その爆風と衝撃で大きく飛び上がってしまう。

《ロケット ドリル》

それと共に一夏はランチャーを解除して、ロケットとドリルのスイッチに交換し

《ロケット・ドリル・オン》

ロケットとドリルのスイッチを入れて飛び上がり

《ロケット・ドリル・リーダー・リミットブレイク》

「ライダーロケットドリルキック!?!」

左足のドリルを向けつつロケットの推力でゾディアーツに突撃し

「ああああああああああああ!?!?」

高速回転するドリルでゾディアーツの胸を砕き、貫かれてゾディアーツは爆発した。

「よ。つと」

そして、一夏はスイッチを全て切ってから着地し、振り返って飛んできたスイッチを受け止めるのだった。

「それじゃ、スイッチを切って」

「はい」

その後、楯無達が来てから衛理華の指示でゾディアーツのスイッチを切る一夏。

それによってゾディアーツのスイッチは黒い渦に呑み込まれるように消え

「う、あ、あ……」

楯無達に運ばれた未来は目を覚ました。

「どうだ？」

「バツチリとはいかないけど、データは取れたわ。これで何かわかるといいんだけど」

その様子を見ていた千冬の問い掛けにモバイルPCを操作していた衛理華はため息混じりに答えた。

実は今の光景をバガミールを通じて撮影していたのである。

本当はフォーゼがカメラレコーダーのスイッチで記録すれば良いのだが、スイッチを切る際に普通の人に影響が出ないとも限らない。

パワーダイザーでは細かい作業は厳しい為、結局フォーゼである一夏がスイッチを切ることになったのである。

「なんで……なんでよお……なんで、私の努力の邪魔をするの……」

「では聞くが、お前はなんの為に努力をする？」

一方、起き上がった未来はうつむきながら涙を流す。

正気に戻ったことで罪悪感があったものの、なぜこつとも自分の努力を邪魔されるのかと思って悲しくなってしまったのだ。

そんな未来に千冬は腕を組んだまま問い掛ける。

「なぜって、決まってるじゃない！ いい結果を出す為よ！」

「では、聞くが。その為にはどうすれば良いか考えたことはあるか？」

「え？」

それに対し未来は叫ぶように答えるが、千冬の更なる問い掛けに呆然としてしまう。

この時はその問い掛けの意味を理解出来なかったからだが

「良い結果を出す為にはただ努力すればいいというものではない。その為には何をどうするべきなのかを考えなければならぬ時もある。」

お前はそれをしなかっただけでなく、自らの体をいじめるようなことをしてきた。

そんなことをすれば、良い結果が出ないのは当然だ」

腕を組んだまま言い放つ千冬の言葉に未来はうなだれる。

言われてみるとただ努力するだけで、何をどうすればいいのか考えたことが無かった。

体をいじめるようなことをしていたと言われたらそうかもしれない。本番で疲れ果てているのは努力が足りないと思っていたが、今の言葉で努力をしすぎてたかもしれないとも思えてきたのだ。

「それにあなたは友達や家族の言葉に耳を傾けましたか？」

もしかしたら、その人達は大事なことを言っていたかもしれないし、時にはあなたの支えにもなってくれたかもしれないのよ？」

「少なくともここにいる代表候補生は1人の力でなつたわけではない。」

そういつた者達の助けもあって、今こうしてここにいるんだ」

そんな未来に楯無も話し掛け、千冬も腕を組んだまま語りかける。1人でただ闇雲に努力すれば良い結果が出るというわけではない。

スポーツ選手がそうであるように、他の人のサポートがあつてより確実に良い結果を出せるようになるのだ。

未来はそのことに気付かずになっていたのである。

「で、でも、私は……私は……」

「何があなたをそこまで追い詰めていたのかは知らない。だからというわけじゃないけど、体を休める意味も含めて一度ゆっくり考えてみた方がいいわ。」

それでも答えが出ないなら、教師とかに相談してみなさい。その方が気分的にも楽になると思うしね。」

しかし、指摘されたからといってこれまでのことをすぐに直せるわけでもなく、未来は困惑していた。

そんな彼女に衛理華はそう言い聞かせる。今の未来に必要なのは時間。それがわかっていいるからこそその言葉であった。

「そっか。ただ、努力するだけじゃダメなのか……」

一方、一夏は変身を解きながら今の会話で考えさせられていた。

一夏は未来のような無茶はしなかったものの、仮面ライダーになる為にどうするべきなのかを明確に考えたことは無かった。

かといって、そういった目標を誰に相談するべきなのかで悩んでしまっただけだ。

「あの……ごめんね……私が変なこと頼んじたから……」

そんな中、鈴はしゃがんで未来に謝っていた。

未来をここまで追い詰めたのは自分がクラス代表を代わってと言いつつ出したせいだと思った。

そのせいで彼女はここまで思い詰めてしまったのだとも考えてしまったのだ。

「あ、ああ……ああ」

そんな鈴を見つめていた未来だったが、涙を浮かべたかと思うと鈴に抱きついて泣き出してしまっただけだ。

実を言えば、未来には明確な友達はいなかった。

だからだろうか？ 心配してくれる鈴の言葉が嬉しく感じて、思わず泣き出してしまったのである。

そんな未来を鈴は優しく抱きしめた。未来が泣き止むまでずっとそんな2人を一夏達はただ静かに見守っていたのだが。

「にしても」

「どうかしたのか？」

「いや、今日はあのサソリのゾディアーツが出てこなかったから、気になってね」

「確かにな」

その一方でサソリの姿をしたゾディアーツが出てこなかったことに不安を感じる衛理華に、問い掛けた千冬は同意するようにならずにいた。

昨日はゾディアーツとなった未来を助けるような形で現れたのに今回は現れない。

衛理華としてはそのことに何か意味がありそうな気がして、不安になってしまったのだった。

以降、如月 未来は自分にとって良い結果が残せるような努力をするようになり、無茶なことをするようになことが無くなった。

そして、今回の事件が切っ掛けとなり、鈴とも良く話すようになり

そんなことが実を結んだのかしばらくした後、未来は代表候補生に選ばれることとなる。

それはそれとして、次の日の放課後

「なんでここにいるんだ？」

仮面ライダー部に備え付けのソファに座る鈴に篤が睨むように問い掛ける。

その横ではセシリアも同意するようにならずにいたが。

「何って、私もここに入部するんだけど？」

「な、なんですってえ！？」

それに対し鈴はケロツとした様子で答えるが、そのことにセシリアはなぜか大げさに驚いてみせる。

いや、実際に驚いていたのだが。何がどうして、この部に入部することになったのかわからない為に。

「ま、あなた達に抜け駆けさせるわけにはいかないしねえ」

「「な!？」」

で、鈴はといえば挑発的な笑みを向けるのだが、箒とセシリアは思わず顔を赤くさせる。

良く見れば、一緒にいた本音や簪も同じであったが。

そう、鈴は気付いているのだ。彼女達がどんな想いを抱いているのかを。

「やれやれ、賑やかになつていくわねえ」

「あはは……なんか、すみません」

その光景を眺めていた衛理華のぼやきに一夏は頭を下げる。

鈴達が騒がしいことに代わりに謝ったつもりだったのだが

「彼女達がああなつてるのが自分が原因だって気付いた方がいいわよ、織斑君」

「へ？」

衛理華の私的にポカンとしてしまう。

自分が原因? なぜ? と、理解出来ずに一夏は首を傾げるはめになつたが。

こうして、一夏は新たな日常を迎えることとなる。

今はまだ、どんな仮面ライダーになるのかという答えを見いだせないままで

第7話『幼馴染・アタックオン!』（後書き）

そんなわけで事件解決となりましたが、もちろん幼馴染編はまだ終わりません。

次回はクラス対抗戦。一夏と鈴はクラス代表として戦いますが次回からはちょっとオリジナルが多くなると思います。

うん、思うだけだね。ていうか、相変わらず後半がはしよりすぎる……

そんなわけで、次回またお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4968x/>

仮面ライダーフォーゼ 青春のIS？

2011年11月27日00時51分発行